



## 選文

### 雑草

第一學年東組 吉田三重子

「かへつて野趣があつていゝわ」

あくまでも云ひ張つてみた私だけに自分の意志が破られたのを知ると思はず憤りを感じた。

「随分草が生えて居りますね、お取りになつたら庭がよくなりますよ」

父に向つて自分の家の庭を誇りつゝ、さう云つた人までにくらしく思へた。

青空に太陽の輝いて居る一日、草は刈り取られる事になつた。

ザク、ザク／＼雑草は齒切れのいゝ音をたて、刈られて行く。その音を聞いて居ると憤りよりも強く寂しさを感じて來た。

昨日まで子犬とたわむれた草の上——。

選文

朝の涼しさの中を私はよく草の上ですごした。子犬達は自分の体をかくしてしまひさうな柔かさを好んでゐた。草の上をかけたまわつて兄弟達とふざけつことをしたり寝そべつて居る私の体にはむれたりするそして疲れると、私の傍に横になつて居る母犬の乳房を求めた。

親犬は折々草を喰べる事があつた。

「草なんか喰べておいしいの？」そう私は聞いて見たけど可愛らしい目でちよつと私を見て又むしや／＼と喰べ出した。

私は一本の草を取つて見た。

その花のない貧弱な草が大變美しく思はれた。

水分を充分に吸収つた其の小さな葉の青さ！

ザク／＼／＼私の想つて居る中にも草はどん／＼刈られて行く。そして刈られた草の山は段々大きくなつて行く。

美しいつややかな色も失なはれてぐつたりとなつて居る草、いたましい——、私はつぶやかすにはいらなかつた。

その草の残骸にもそして草を刈る人に對しても——

草を刈る人——草には恐ろしい人であるけれどその人達、草刈の婆さん二人の姿は私の目には、いたくしかなかった。

眞黒な顔、よくしやべる口等はなか／＼元氣さうではあるけれど、手や足や脊のあたり、力弱いところが見える。

老の影の段々濃くなつて来る人々がこの暑さの中で労働をしないではないとは？

うすよごれのした手拭の頭の上にもキラ／＼光る鎌にも刈られた後の赤黒い土の上にも夏の烈しい日は強くふりそぐ。

### 荒 癡

第一學年東組 瀬川富美枝

大盟の水をくつがへす様な音がする、ごう／＼ばた／＼屋根の、瓦も洗ひ流されるかの様に、降り続く雨、如何に眠らうと、あせつても眠れない、其の中に、役場の小使が急を告げて来たので、父は堤に出

た。

間もなく、太鼓や、寺の鐘が鳴り出した、同時に山の方が、ごう／＼と鳴り出した、あれ雷、山鳴りかど、さわいである内に、電信柱が、ぶる／＼とふるへて、見る間に、ばた／＼と倒れ、家は見る間に濁水に、巻き込まれて、押し流された。私達は、あまりの恐ろしさに、ぶる／＼振へるのみで。何も手にする事も、出来ず、あれよく／＼と言つてゐるのみであつた。

その中に家の者が歸へつて来て、今の有様を話したので、益々身がふるへた、いつまでたつても雨は降り止まない。

あゝ雨よ、もう澤山だ、と言ひたい位だつた。晝からは、元氣な者は皆、死體探しに出た、私も一寸、河べりの方へ出て見ると、もう死體が五人わかつた。又今と、か弱い婦人達は、色を失つて、さわいでゐるばかりである。それから下流の方へ行くとそこには、ごう／＼と音を立て、流れる中を、村の人は根氣よく、死體探しに従事してゐる。不明者の名は、役場の前にもやんと書いて、はつてある。

さを、感じずには居られない。

### 小 鈴

第一學年東組 三宅登美子

道々には、見物の人がたへまなく、行き來してゐる。私が始めて、親類の流跡を見た時は、思はずあつと言つた程である。前の家の形は、どこへか姿を消して、そこにはたゞ茶の間が、ねぢれて、無殘な姿を残してゐるだけである。川幅も元の三倍程にも、なつてゐる。

机の上のかはい、子兔が見えない。又いつもの弟のいたずらかと口惜しい氣持でお縁に出た。

「チラツ」

と闇に小さな光りこは／＼取り上げる私の手はグリーンの紐に仲よく結ばれた五つの小鈴があつた。

私の好きな可愛い小鈴  
冴えた白い光が暗闇のお國に一脈の光をなげる

「チリン／＼」五つの音が入みだれてしほらしい鈴虫の歌のやう。私はもうたまらなくなつて手の中にさうと抱きしめた。お離れで一人縁側に坐つて鈴をいじくつて居る私。  
無意識に鈴を掴んでは投げほうつては掴んだあげく

あの愉快そうな姿、うれしさうな笑顔の、持主とは一寸も思ひ浮べられない今の姿。  
何と言つてよいか、私の胸はたゞ波打つのみで、言葉が出ない。  
ほんとうに自然の力の、恐ろしさと、人力のはかな

又たまらなくなつて鈴を振る  
次第々に私の心はうつとりとして小天使にくひ込んで行く鈴はもつれが解けて私の手の中にちらばつて居る。

「T.O.A.K.此方は東京放送局であります。」

母屋の方からラジオのおもちやで遊んで居る聲が聞える私は思はずにつこりしてやさしく鈴をそつと振つた。

「チリン／＼」清いすみきつた音が暖がくなつた私の心に入つて来る

### 宇品の山へ登つて

第一學年西組 藤村 トキ

植物採集をしようと思つて宇品の山へ着いたのは彼れ是れ朝の七時であつたらう。宇品を思ひ立つたのは前の日採集地に就て父からあそこには珍しい植物があるだらうと聞かされたからであつた。

夏とは言へ流石に朝は涼しく氣持が良い。前の日の

とでも言ふのであらう。閑静で空氣は好し勉強等良く出来るだらうとは思ふが餘り寂しく又晝でも蚊に責められる事だらう。

一時間餘りあちらこちら上り下りして二十種餘り集めて一安心した。併し足が大變だるくなつて困つて居ると父はこんな蟻の塚のやうな丘へ登つたばかりで足がだるいやうではとても富士登山などは出来な

いつまらぬ／＼と言はれた。

漸く観音堂迄下りて來た。丁度自分よりさきに此處に參詣せられ縁側で休んで居られた佐久間先生とお嬢さんに出遇つて。此處で私等の學校の先生に遇はうとは夢にも思はなかつた。先生は觀音様を御信仰になり、時々此處に參られるとのこと誠に良い事と思つた。父は先生と昔からの知合だから色々のお話もし又先生は此の觀音様の由來なども話されて居た。御みくじをひいて見たら大吉だつたので大變嬉しかつた。やつぱりくじをひいて良いのが當つたら氣持が良いものだ。

此處からは東の海を隔て、すぐ向ふに、先年海水浴の盛んに行はれた金輪島や、仁保、海田の沖まで一

豫定では、もう少し早く起きるつもりであつたが、つい朝寝坊をしてしまつた。それでも自分では餘程早いやうな氣であつたが、路々の店と言ふ店は皆朝掃除をすませ播水も出來て居り客も出入して居た。

暑中見舞の人、海水浴の客、學生、商人等で電車はどれもこれも満員。世の中の人は皆自分より賢いと思つた。

宮島や似ノ島に向いた西側から登り始めた。宇品の森林は國有林で此邊では珍しいもの、又此の山に森林のあるがため魚族が附近に群集するのだなご色々の話を父から聞いた。ありふれた物は取らない事にして、市中には一寸見つからないやうなものを探し出し、お友達を驚かさうと思つたが、自分には植物の知識と言へば藥にするほどしか無いからとてもだめだ。あの黒い茂りの中へ這入つたら善いものがあるかもしれないと思つたが、夏は蛇が多く出ると言ふからこれに出會つても困ると思つて見あはした。近頃出來たと言ふ幅の廣い道路がついて居たから之に沿うて登つたら和洋折衷と言ふやうな立派な家が數軒西側の中腹に点々と建つて居た。之が文化住宅

目に見渡された。静かな朝の海を帆船や汽船が往來して居る出の眺めは繪にも書きたいやうであつた。町の暑さを此の涼しい別天地で少しでも凌がうと山の中でお辨當を食べて居たが其の中暑くなつたので山を下り歸途に就いた。

### 雪のあした

第一學年西組 角 静子

暖いふつくりした寢床の中で私は平和な眠からさめた。ふとみると窓の硝子のすきまをもちて薔薇色の光が室内をほのかに照らしてゐる。「姉様、雪よ／＼大雪よ」妹の頓狂な聲に私は思はず床をはなれて縁に出た。

あゝ何と美しい景色であらう。昨日まではみにくい枯葉をのこしてゐた木も、みにくいあれはて花壇もすべて純白の雪におうはれてゐる。雪はこの世の中の汚れたものをすべてかくしてしまつたのである。松の葉のもゆるやうな緑と雪のあくまでも汚れない

白の色どりのよさが殊に目をひいた。

「お姉様、花咲しいさんが花をさかせたようね」と妹はあどけなく言ふ。本心にさうだ。ふきすさぶ北風に葉をもぎさられたいたましい枯枝に雪は櫻のさかりを思はすようにつもつてゐる。茶色のはだを寒げにのぞかせてゐた庭のすみになつかぬ南天の實の二つ三つこぼれてゐるのが本心にいじらしかつた。目にいるかざり一面に白いシイツをしいた様な廣い田圃の中の一筋路を急ぎ行く人の息が白く見える。

雪やこん／＼こられやこん／＼……。

私はいつのまにか幼い歌をくちずさんでゐた。思へばあの歌を歌つてからはや一年の月日はすぎてゐるのだ。

光陰矢の如し。

月日のたつのがあまりに早いことが私の心を淋しくさせた。妹の「御飯よ」とのこゑに我にかへつた私は支度をすまして外へ出た。つくねんとたつ千田様の銅像がことさら寒く見える。ともすればすべり勝な道を歩いて御幸橋についた。安藝の小富士にも己斐の山々にも雪はつもつてゐた。ほのかにかすみのた

れこめた中を一艘の舟が夢の様な波紋をのこして通つてゐると、突然雀があゝの元氣にみちたほがらかな聲でちゆん／＼とないた。よくはれた、けれどどこか寒さうな空に上つて薔薇色の光をなげてゐるお日様はやさしく地上のあらゆるものにやはらかいほゝろみをあたへてゐた。

幼き日の思出

第一學年西組 山田 春江

「春ちゃん。いゝ子だからね。おとなしくしてお母様のおいひつけをよく守るのよ。いゝ子ちゃんなのだからね。」

優しく私のお河童をなでながら大姉様は微笑をたゝへつゝおつしやつた。けれども無理に暗い影をかくしてゐらつしやることを知つた。

「お姉様春江をおいてどこへ行くのね。ね、どこへもいつちあいや／＼。」小さい頭を左右にふり私は大姉様のひざをゆすぶつた。私は幼いながらも胸さはぎ

或夏の晝

第一學年中組 早川 安喜子

「あゝあゝ——」思はず欠伸が出てしまつた。私は讀さしの本から目をはなして庭の方に向けた。

「じい／＼／＼」今まで氣に付かなかつた蟬の聲、何故だらう？こんなにかましいのに。私はいたづら半分裏の方から網を持つて來て庭の高い所に上つて蟬を追ひはらうとした。さうして松を一度ごんとついた。途端に五六匹の蟬がばつごのいて「じい／＼／＼」と鳴きながら飛んでいつた。

「じい」今の鳴聲が氣にいらぬ。どう考へても「お氣の毒様」といつて逃げたやうに思はれてならない。余りしやくに障つたので、いきなり網をそこに投げすてた。「ぼきん」あゝどうしやう？お父様の大事な植木だのに枝が折れるとは何と運の悪い事だらう。いはうか、いうまいか私はしばらくそこに立つて折れた枝をじいつと見つめてゐた。

太陽は早や西にかたむいて背を遠慮なく照してゐる

を感じた。大姉様は本當にどこへいらつしやるのだらう。家中は何かしらごた／＼してゐる。大姉様もおちつかない様なそは／＼した様にあちこちしてゐらつしやる。

私はいつの間にか眠つた。ゴトリツかすな物音にはつと目の覺めた私はいつも家の様子が變つてゐるのを知つた。私の傍にゐていつも優しい聲で子守唄を歌つて下さる大姉様の姿も見えない。私は泣き出したいのをおさへつゝあちこちと探す。奥の座敷にはお母様等がゐらつしやつた。

あゝ嬉しい私は何を見出したのであらう。いきなりかけよつて美しい裾模様のある振袖にすがつた。私はいふまでもなく大姉様を見出したのである。物珍らしさに私はキョロ／＼としてあたりを見廻す。

隅の方に何か黒の紋のあるものは私は見た。幼いながらもこれはお嫁入なさるに違ひないと思つた。ウンと一つ手をうちしのび足で私の室へ歸り裏の庭へ出た。私は其の時、思はず口ずさんだ

姉送る心は淋し裏の庭

姉はついに別をおしまれつゝ出て行つた。

## 富士の登山

第一學年中組 鍛治本輝子

何となく騒がしいのにフト目が覺めた。丁度午前三時。外の泊客は皆起きて、蒲團を疊んで居られる。富士山の事さて、水がないので雪をこかしたのをコップに一杯づゝ口すゝぎの爲にあてがはれる。外に出てコップの水で口をすゝぎ、眼下を見下す。一面の雲の海。層々と重なつた雲海の中から昨日高いと思つた足高山がはるか足下に見える。その附近にある山々もお盆がふせてあるやうに低く見える。その壯觀は本當に筆舌に盡くされない。霧がかゝつてゐるので非常に寒い。思はず身慄ひしながら石室の中に入る。石室の中ではもう御飯の支度が出来てゐる。これは皆強力さんがするのだ。お茶も夜中に二合目まで行つて取つて來たのださうだ。朝食を終つて、支度をし、三時半に出發。外はまだ暗闇で、お姉さんが可愛らしい岐阜提灯をかざして先頭に進まれる。私は初こそ、遅れまじと、元氣に

ついて行つたが、だんくく空氣が薄くなるにつれて呼吸が苦しくなり、どうくくへたばつてしまつた。五分間はかり休んで、案内の方に細綱で引張つて貰つて、やつと八合目まで登つた。丁度御來光時で、眼下の雲海が眞赤に染る。その中から大きなくく朱盆の様な太場が御姿を現はされる。その莊嚴さは思はず頭が下る位であつた。その美しさの爲今まで苦しかつた事も忘れてしまつた位。御來光を充分拜み又元氣を出して、頂上へと向つた。

## 歸郷

第一學年中組 陶 泰子

ガタリく、輕便はゆるやかに進み出した。待ちに待つた夏休が來たのだ。故郷へ歸る日が來たのだ。目に映るものはみんな故郷を偲ばせる。祖母、父、姉、妹の顔が浮んだり消えたりする。向ふに居らつしやる女學生の方もやはりこんな事を考へて居らつしやるのであらうか。窓越しに見える向ふの小

道に、眞黒い犬がこちらを向いて吠えて居る様な形でつゝ立つて居る。家の犬も相變らず元氣であるであらう。青疊を敷いた様に並んでゐる稻の葉先をなびかせて吹いて來る風は、何とも言へず涼しい。汽車よ。最つとく早く走れよ。私が故郷に向つて。

## 殿下を拜し奉りて

第一學年南組 山本富貴子

首のべ指をおり數へてゐた、十九萬人の臣民が無上の光榮に感激する日は來ました。私は朝起きた時から、うれしいやうな、おどろたいやうな氣がして、なりませんでした。私等は殿下を御向へする爲、午後一時半までに學校へ行きました。男の先生は皆禮服を着て、山高帽子やシルクハットをかぶつて、おいでました。生徒等もうれしうな顔をしてびよんく飛んで、遊んでゐました。私も澤井さん達といつしよに、遊ひまし

しばらくして、モータが鳴りましたので並んで、専攻科の人から順に門を出ました。本通筋は、赤と白との幕が張つてあつて、大變に美しくありました。奉迎門もりつばに出來てゐました。そこを通る人々が皆眺めて通りました。奉迎門をくゞつてすこし行つた所、立札が建て、あつて、それに、皆それくくの學校の名前が書いてありました。そして縣女の立札は一番始めにありましたので、そこへ並びました。そしてまだしばらくの間がありますので、先生が休んでもよろしいといはれました。それで私等も三四人と、いつしよに、草原にすはつて休みました。しばらくして、よその學校の生徒もこられました。縣女の隣へ山中の生徒が、並ばれました。しばらくして、中島先生が並べといはれました。いつもならいつまでもわいくくさわいでゐますのに、今日はだれ一人として、お話をする者はありません。山中の先生が時計を見てもうすこしで、廣島驛へ殿

下が御つき遊ばすと、いはれました。

十分頃立つたかと思ふ頃に、バチ／＼と、いさましく花火があがると同時に、ラツバがおごそかになりだしました。その時私はあまりのびつくり、頭がじんとして、なんといつてよいやらわからぬ、感じが致しました。

その瞬間今殿下が広島驛へおつき遊ばしたのかと思ふと、そのおそれおほい、又ありがたさに、自然と頭がさがりごんな事があつても一生懸命忠義をつくします、といふ心が胸にいつぱいになつて、あました。

いくらかたつて、先生がきをつけと言はれました。みんなはきんちやうして、私の体はぞつと寒くなつて來ました。ブ／＼と、自動車が來ました。私はあまりのきんちやうに、ぼうとしてしまひました。第一自動車が通りました。第二番目の自動車が通りました。第三番目の自動車が通りました。そこには神様も、あがめらるゝ殿下が乗つて、ゐらつしやいました。

殿下はちやうど、私等の眞前で、私等の方に向つて

御會釋をたまはりました。

私はあまりのうれしさに、ひざりでに、厚いよろこびの涙が出ました。

今でもその事を思ひ考へると、うれし涙が出て來ていはうと思ふ言葉が出て來ません。

後になつて私が心の中で思ひますに、殿下がおいでになつた時にきんちやうしたやうに、今その場でしやうと思つても、もう二度とは出來ないと、思ひます。

をばり

## 旅行

第一學年南組 秦 敏 子

私は祖母と二人で八月六日午前二時の東京行の特急に乗つた。あまりすいてはゐなかつた。二三時間はまたたく間に過ぎて夜明となつたのは岡山邊であつた。

夜明の景色の美しい事繪の如く、だん／＼と夜の雲がのくにつれて近くの島や遠くの山々が見え出す。

は三四分ばかりでそんなのは二三しかなかつた。

午後八時に松本へ着いた。其の時兄さんが向ひに來てゐる下さつたので大變うれしかつた。

## 田舎の夏の夕

第一學年南組 香川 キョシ

七時を打つ時計は氣怠るさうな音が低い薄暗い家の部屋の隅々まで響き居る頃は焼け附く程熱くなつた屋根瓦が漸く冷え始めてゐた。名残惜しさうな赤い夕焼の空を涼しい羽ばたきの音を殘して名もしれぬ鳥が飛び去つて行く。川向ふの瓦屋の煙突がほんのり赤く照らされて言ひ知れない懐しさを感じさせるあの炎熱も今は彼方の谷間に沈んで冷たい黄色の花を咲かせた月見草ばかり名残を止めてゐるかの様であつた。直射日光の下に力なく凋んでゐた花も生れ變つた様に生々してゐる。音なく靜かに押し寄せる稲の青い波が大きく小さく揺れてゐる。夕方の涼風が程遠くない川のせゝらぎの音を私の耳にもたらず

其の色の美しい事は緑色の毛氈をひいたやう。あゝ何と美しい事であらう。窓からは涼しい風が這入つて頬をかすめる。間もなく東の空には御光がさし太陽が笑ひ出す。と四方の雲は赤に紫にオレンジに染められる。汽車は神戸・大阪・京都等の大都會を過ぎて濃尾平野を疾走するのであつた。四方にはたゞ一つの山も見えない。名古屋へ着いたのは午後一時二十六分、すぐ中央線に乗りかへた。

其の間は十分しかなかつた。間もなく汽車は木曾川の邊を通つた。兩方の山には檜等の良材が枝を交へて天につきたつてゐる。

寢覺の床の美しい事言語に絶してゐる。水晶より美しい水が澤山々々あるすべ／＼したルビーのやうな石の間をまがりくねつて流れてゐる。有名なつり橋もある。此の景色を一目見た私は極樂のやうな氣持がした。どうしてこんなに綺麗なんだらう。

時折或る町に通ふ自動車が容赦なく高く虚空に砂塵を煽り立て、行く一筋の田舎道も今は唯長く白く筋ばかりを黄昏の中にぼろと横たへてゐる。白い窓掛を波立せる風が庭の中に高く繫つてゐる柿の木の葉をがさつかせて無限の爽やかさを起させて行く。窓掛のすきより見えてゐた山々が何時の間にか襲つて来た夜の墨染の色に融け合つてその形さへ分らなくなつてゐた。恍惚として酔へる人の様に暮れ行く彼方を驚異と一種の情趣に燃えた眼とで凝と見つめてゐる。唯何となく寂寥を覚えて物悲しい懷をそつて行つた。廣漠たる果なしの空に輝く數萬の星の光が何處となく冷たく見えてならなかつた。と彼方の草深い中から啜り泣いてゐる様な虫の音が悲しく顫へて聞える。一層と哀感を催さしめる。何時までも何時までも絶えない虫の曲が思はずも瞳を濕ほして来るさうして自然と幻想の境にさまよはしめる。夏の夕の持つ總べてが詩的である。そうして強い魅惑を持ち堪えられない、憧憬の心を高めて行く。然し何となく哀愁を感じる山の手の家々の電燈がポタリ／＼と消えて、重い戸を繰る音が絶えた頃はいよ

／＼四圍は眠つた様な静寂にかへる夏の夕は忘れ難いものである。

### 主なきすゞらん

第一學年北組 小谷ふく子

上級生がよく手に持つて居られるあのやさしいすゞらん。此の地方にはめづらしいすゞらん。おゝ其のすゞらんを今私は手に持つてゐる。たつた一本持つてゐる。其の一枝には枯れた葉が一枚、花が二ツ、それだけであつた。けれども私は大變喜しかつた。願つて／＼やうやくもらつたすゞらんだもの。私はていねいに塵紙につんでおいた。其の日は丁度土曜日だつたので私達は授業が終ると母校へと急いだのである。やうやくの事で學校についた。私達は靴を脱ぎ、かばんをおいて、すゞらんも其處に置いた。そして先生の所に行つた。もうその時はすゞらんの事を忘れて夢中に先生の御言葉を聞いてゐた。かはいさうにすゞらんのかばんのそばで主の歸るのを待

つてゐたすゞらう。三時半頃私は内に歸つた。けれどもすゞらんの事は考へてはゐなかつた。室では机の上の一輪ざしが凋んだ花を口にくはへて待つてゐた私は早速例のすゞらんをささうとしたがない。おや／＼と捨てたのだらう。あれ程願つてもらつたすゞらんを。學校までは持つて行つた。それからかばんをおいた時はあつた。私は前の事を考へて見た。さうだ。私は母校に忘れたのだ。と其の瞬間私は思つた。自然と、涙が机上に落ちて行く。ほんとうに私はどうしたのだらう。あれ程ねだつてもらつたすゞらんを忘れるなんて。ほんとうに私は馬鹿よ、と自分の頭を自分の手で打つて見た。何べんも／＼、頭が／＼なるまで私は打つた。ぼろ／＼と涙が落ちた。あゝ可愛想な事をした。すゞらんはあのすみつこで待つてゐる事だらうと思へば又もや涙が溢れ落ちる。

### 秋

第一學年北組 栗原アキヨ

「ほんとうに秋は好い。」私はこう言つて藁屋の家から腰掛を持つて外に出た。外は眞黒で唯見えるのは處々に電氣が淡い光を投じてゐるばかり、時々秋風が私のうぶ毛を拂ふ。静かなので木の葉が風にさそはれて「かさ／＼」と言ふのが秋の空氣を破つて私の耳にはいつて来る。先程から鈴虫が草の間の邊から「リーン／＼」と何も思はず唯軽く鳴いてゐる。思へば一昨年の秋である。丁度こんな晩であつた。お姉さんはすみきつた月光を浴びてあの柔い優しい聲で歌ひ。ヴァイオリンを持つて子守歌を弾いて下さつた。私は夜の更けるのも忘れてそれに浮かされた。其の時にはもう寒いがちでネルを體に掛けて居た。

何處かの工場の氣笛も九時を知らせたのであらう。ものすこく私の耳にはいつた。「かさ／＼」と言ふ音



も夜が更けるにつれてだん／＼と心細くなつた。「九時だからもう寝よう。」と思つてもどうしても此處を去ることは出来なかつた。相變らず鈴虫は夜の更けるのも構はず「リーン／＼」と鳴いてゐるばかり。

## 或秋の午後

第一學年北組 佐方美枝子

其處ら一面は、暖い太陽の光で満ち満ちて居る。私達は、妹と一諸に、勉強をすまして裏に出た。秋とはいふものゝ、やはり午後の太陽はあつい。一面青々とした木々はつや／＼しく或は黄色い葉を風はそよ／＼と、動かせて居る。重たい、はしごを四つの手でさげて一番奥のざくろの木を目當てに持つて行く。「一二、一二！」と掛聲を出しながら。この木こそ、私達が前から、毎日のやうに、實の熟すのを待つて居たのだ。赤いつや／＼とした、ルビ

一のやうな實が今にもころげ落ちんばかりに、ぱつと開いた中に浮いて見える。美しく。「あ、嬉しい」私はうれしさの餘りさび上つた。一つ二つ……と。かごの中には眞赤な色をしたざくろがころがつて居る。ちう——さしほれば赤いあまい汁がちう——と出る妹も嬉しさうにちう——ちう——と何かつぶすやうに吸つて居る。其の顔には笑がた、へられてゐる。落ちるかと思はれる程澤山かごとつた。午後の光はかごの中のルビーを氣持よくてらした。

## 虫鳴く此頃

第二學年東組 大下スエ子

「あ、もう虫が鳴く」私は今始めて夢から意識したかの如くかう叫んだ、本當に私は今迄何をしてゐたのか知らず。未だ夜はすつかり明けはなれない。ほの暗い路をたどつて外に出た。一目して秋のおとづれが想はれる

「お、涼しい朝だ、落附いた朝だ。」何んだか氣後れがする。

「淋しい、怖しい、悲しい」かうした氣持が次々こ起る、けれど一層私自身の魂に深く且つ強い／＼印象を残したのは、あの可憐な草葉にすたく小音楽者でなくてはならなかつた。

それは本當にやさしい虫の音なのである。私は此の聲がたまらなく好きであつた。

「キイリ／＼／＼／＼」變らぬ一本調子の音楽隊、それは單純と云へば餘りに單純に過ぎるかも知れない併し又一方から見ると此の單純の中に彼等ならでは示す事の出来ない尊さが潜んでゐるのではなからうか？

「まあ何て愛らしい事」彼等はあたかも誰かに命せられたかの如く絶えず歌ひ續けてゐる、はかない自分の運命も知ららうで！

はるか空に少しく白みが見え出した。美しく且ゆかしく色彩られた雲は段々と邊に擴がつて行く。木々は皆今眠から覺めた如く吹く秋風のおとづれに微かな笑を洩してゐる。

涼しい朝だ、落附いた朝だ。

未だ明の明星はだまつて下界を見下してゐる。

## 大掃除

第二學年東組 山下則子

晴天 五月二十三日 日曜日

起床六時十五分。

ベルが鳴つた。皆校庭に集合して堀込先生より各受持の場所を聞いた。

私達は四年の東組と一緒にすることになった。場所は正門、及び壁で、未だ温い石鹼水をバケツに汲んで来て、甲斐々々しくたわしで、ゴシ／＼する。今まで汚れて居た所も氣持よく、落されてゆく、村瀬先生が色々よく手傳つて下さる。

始め頃は水を小使室まで汲みに行つて居たが、しまひには直ぐ前の後藤醫院に、皆が汲みに行くやうになつたので、お蔭で、病院の玄關は水だらけ、丁度大水が出た跡のやうである。

吉村さんが上級生から消火器を借りて来たので、村瀬先生や私達で壁に水をかけた、勢よく水は口から出て、白銀のくだけるやうにはねる、氣持が大變よい。

講堂へはだしのまゝ上つて、お辨當を食べた。こんなことは始めてある。

ベルが鳴つた私達は又お掃除に取掛つた。

今度は杉山先生や熊田先生と一緒に、門の前の石をゴシ／＼と棒ずりで磨きだした、水を流してはすり、すつては流したお蔭、すんだ時は、恰も大理石のやうであつた。本當に綺麗であつたので、喜んで居ると、宮内省の自動車試験に這入ると云ふことを聞いた。

待つて居ると、やがて菊の御紋の付いた朱色の自動車は、私達の丹精こめて、磨き上げた石の上を惜しげもなく踏みちつて通つた、大變立派な自動車だお歸りになつた跡を、光榮の跡だと云つて、校長先生に笑はれた。又皆流しだした、少しして、先生方がいらつしやつて、「本當に綺麗だ／＼誰がしたのか」等と盛んに感歎詞を連發なさる。築瀬先生は大

變に自慢らしくしていらつした。全体のお掃除がすむと、講堂に這入つて、校長先生から行啓の有様を伺つた。

### 思ひ出深き日

第二學年東組 宇都宮 正子

電車が今出ようとする時に、汽車から下りたばかりのおばあさんが大きな信玄袋とお土産の様な籠を持つて、こられた。其の荷物を車上に上げようと思はれたけれども、年をとつてはゐらつしやるし、荷物は重いので上げる事が出来ない。それで車掌に「すみませんがこの荷物を上げて下さいませんか。」と玉の様な汗を出しながら、たのまれたのに「一人で上げなさい。」と冷敷にも横をむいてしまつた。おばあさんは、さも落膽した様に、絶望的に「あゝ」と深い吐息をつかれた。私はそれまでに幾度腰を上げたかしのれない。さう／＼思ひ切つて「私がしませう。」といつて、荷物に手をかけると「ごこの方が存じませ

んけれど誠に有難うございます」と丁寧にお禮を、おつしやるので、何んといつてゐ、かわからなくなつて「いゝえ何んでもございませぬ」と答へた。ふと車掌はと思つて、其の方を見ると、いち悪さうな眼で後をにらむ様にしてゐた。

「稻荷町」の聲に急いで立つと「ほんとに有難うございました」と又おつしやるので「いゝえ……さよなら。」との言葉を残して別れた。

一寸でもいゝ事をする、あんなに喜んで下さるのである。若い人でも年とつた人や、小さな子供達には親切にしなければいゝしみ／＼感じた。

我が校の校訓の良いのを思ひ、諸先生から常に、人には親切でなければならぬとよくきかされては居るけれど自分で實行してみなければいゝ人に云はれてもわからないものだと思つた。

いつかきゝおぼえの歌の中に

「良い事ならいゝなになくてもお喜びなさる神様」といふ一節を思ひ出して今日自分のした事を心からうれしく思つた。

### 海に親しんで

第二學年西組 高橋 絃子

生垣のむくものが最後の日に光をそへて、蝶の影もなく、漸く、蟬の聲がしづまらうとする頃、縞の様にだんだんに染められてゐる山畑の人の影の消えて行く時、入相の鐘のひびきはないうれげも、夕暮はだまつて、せまつてゐる。一日の仕事すませてもう寝るだけになつて海邊に出る。

海は無限である。遠くから小山がむく／＼起つて、なめらかに砕けてじやあ／＼白い波頭が青波を食べてゐる。ゆう／＼と、もり上つて、さつと、うす絹のやはらかなうねりを見せてゐる。快い海のえくぼがくる／＼るつと渦まいて、やがて、ごこかの濱へ葬られるおだやかな相である。

やがて、お寢床におつきにならうと云ふ最後のお日様の光、海は燃えてゐる。沖の方から、水平線の彼方から一日の名残が漂つて来る真紅に燃える太陽、雲のさばりの下りやうとしてゐる所そこには壯嚴の

火があるばかり、大空の青さが下からほんのりと、黄色にぼかされてゐる。奇峰の雲は、半面を真紅に紫に黄に青に半面はわびしい、火龍の焰をとりまいて萬物は焼け爛れてゐるけれども、平和である。調和がよい色の中へ色がとけ合つて、ぼかされてゐる。そうして、光の世界は、こゝだけの様に、思へる岩山の下は、濃緑に、青に、紺碧に、紫に淵とたゞへて、このはなやかな世界に、黙つて、續いてゐる。自然は調和である。今日の日が波にさよならをささ、やいてゐるのだ、浴衣の人も、この繪の中の物だ、美にとけこんでゐるのだ、夕映え、青の濃緑の波に黄金の魚がびち／＼はちけてゐるかゞやかしい、明日のなごの海を思ふ、それから考へて見ると、やはらかなもの静かな海の暮である。

黄昏、蛇のお腹の、うねりに油色に氣味悪く、光る所もある。私のサツク／＼と、潮の香を刻むやうに足を運ぶ白砂に海のはなごは秘めてある。青い影が浮んでゐる。のこし行く、足跡は波にさらはれる、時の流れと共に流れ過ぎて、みなわの後だに残さぬは

かない人間の様にはかなまれる。

石垣道に、すゝきの穂影から今日一日の尊い仕事を終へて歸る村人の、汗に光る姿がとぎれ／＼に見える、すゝき越しにそこまで光はとゞく、いかにも健實さがそこにある。威大な世界の太陽、はぐ／＼の母、衰へ行く光の雲の此方に、潮の光が道と、一きわ、明らかに光つてゐる。

樽が浮んでゐる。海人の雄叫びがゆるく、海面に、ひろがるそのの主は、山の上らしい。すぐに沖から幾ちようかの、樽の屋形船が出勤する二艘幟が、はためく、体が前へのめる後へ引く、幾人かの漕人がXともつれまた離れて、波と顔合せ舟の残した水道が光つてのこる、樽音が波に和してうねりが一層面白い、沖の樽が付いて、ごん／＼近まつて来る。先手が濱へ立つとすぐ網がかけ聲に合せて、えんや／＼と引かれる如何にも楽しさうに動作が行はれてゐる。すき透る様な赤銅の胴、生れて以來の海の子、歴史の自然に色あげされたこの体、笑が如何にもおほようである。平和な漁村の民、波の上に静かな——落付いた變化が来る、紫に水色、

薄闇にと、かはり／＼つて、榮華はさめた綾織る波に夕薄闇がたゞよひはじめ。白帆も何處へかよつて見えない。そろ／＼夕方の洞涼しい風があたりを冷々とし、後れ毛をはらひ潮に濡れた足を拂ふ、微風が海面を撫でる、私の前には目をうかせないなめらかに、かはり行く景色がいつもある。

網の中の色が外よりも一層薄黒い、ほんのりと、舟の下は黒く、緑に青に浮模様が動いてゐる。とぼん／＼魚おごしの石が水をくぐる飛沫があがる清い白帆が立つ、しぶきを浴びた体は、網たぐりにいそがしい滴が傳ふ、魚の整理はすんだ雑魚は魚こぶ人の箆に入れた、くらはげは捨てられた夜のわびしさがひた／＼宵やみとなつて、せまる靄の様にせま

る、この人たちは平和で幸福である。海に藏された寶、銀鱗のかゞやきを目にし、静かな無智かもしれないけれども尊い自然の生活を營んでゐる。

私はこの人々の間に、都の様にかたにはまつた規則的な親切でなくほんとうに美しい所のあるもの知つてゐる。

自由なゆづりあひ、自由な、なさけ、餘裕のある心、ちつとも機械的でない、自然である。町ではこんな事は見られない。

町がこせついで、總べてが、機械的であるからだらう、悪い人がおびやかすからであらう、町の人々はこれらに接し、忙しい爲に心はあつても、無理にそれを殺し、情をかけるべき所でも又かけようと、思つても、強いでそれを素通りにしてゐる、落着いて自分の心を見ることが出来ない爲だらう、悪いとは知りつゝも鬼となつて、せちがらく生きてゐるのだらう。

町の人はあはれである、自分をよく見ないで考へなく生きてゐる。それにひきかへ、自然と共にくらし自然を相手に日を暮し、自然にはぐ／＼まれてゐるからだらうと思つた。

こんな事が心に浮ぶのは、静かな塵埃をぬけた所に來て、そして、旅のくつろぎを感じてゐる故であるだらうと、藻を、たくけぶりの、白い、くすばりを見た、さつきは、赤陽に、ある面はそめられ、ある面はかけとなり、むく／＼してゐた。白煙、今はあ

たりの闇を、ぼうつとあかに、にじませて、薄い白煙と夕闇をなめてゐる火である。赤銅の顔に幾年かの嵐の恐怖、楽しい思出、いやな記憶すべてが刻まれて、それが、ほてりに、燃えた、もう、くれゆく海に舟の片附けもすみ、櫓拍子そろへて、ふなべり打つ波をひた／＼うちながら闇を遠ざかる。一群は濡れた、足音をのこして、里へいそぐ、楽しい家がまつてゐるのだ、なりをしづめた、後に遠くから、散歩の足ざりに合せる歌がきこえた。知らぬ間に夜が来て、夕映とくらべれば淋しいわびしい海である。坐つた砂から、しめりがしみ／＼のぼつて来る。黒い暗夜の幕がだん／＼とちこめて見えなくなる。鳥影も、暗に姿を潜める。たゞそのあたりと思ふ邊に黒いよごみがあるばかり、山の上や、向の島らしいところに、灯がともる水の上に、ぢり／＼のびぢみしてゐる。

いさりびが、ゆれながら、波の上をうるんで漂ふ、たゞ一点海は黒くなつてもやつぱり、自然の光を泳がせてゐる。金の波、銀の波、夜には入つて一層波の、のたり／＼が調子ゆるく、なつてきた。なぎさの闇をいろどる淋しい、ひかりむし、指環の寶石にしようとしたが駄目であつた。砂を分ければ明るくしたり、暗くしたり、流れど、共に、流れる。青い光、海の螢、淋しく、一人むせびながら、やるせない運命を青い火に託して、磯波にもてあそばれながら、何物かを求めてゐる。海の夜にふさわしい。見上げる空の下に、ぼつと明るく闇をそめぬいて火事を思はせるけれどもおだやかな向の島の火、舟底をやく火影、其の上空に赤い火の靄が止つてお祭りの夜の空のほてりを望む様な氣がする。雲の端には新しいみず／＼しい三日月一人を守つてゐる。無言の火、涼しい火、私を如何にもおちつかせ、海に親しませる、しみりとさせる、これが海の心、海に接する人のみもつ海の愛だらう。大自然は、やすらかに眠つてゐる。裏山にそよのゆ

るぎもない、月光をあびた銀の穂ゆるる潮風にいつまでもひたつて、居たいと思つた。

## 叡山登山記

第二學年西組 菊池ウタ子

プー やがて電車は今出川についた。電車から降りて出町橋の方へ歩を進めた。夏の日、淡紅の繪日傘に遠慮なく照りつける。川上から涼風が袖をかくく、ひるがへして吹きすぎる。この邊はほんとうに静かである。大阪のさわめきの中から、ぬけ出し、へ來ると氣がのんびりとする。下鴨の家を左に見、糺の森を眺めつゝ出町柳まで歩いた。柳の枝が涼しさうになよ／＼と微風に揺いてゐる。出町柳から頗るハイカラな平垣線が出て、八瀬村の入口まで行つてゐる。大型のきれいな氣持のよい電車だ、一寸阪急電車の様な氣がする。京都から八瀬村へつゞく一面の緑の田園の中を電車

選文

一七一

は只管に勢よく走りつゞけるのみ。……こしが所謂洛北八瀬の里で世に名高い大原女の棲むあたりである。一寸とした小遊園地があつて平野家や新三浦の支店がある。ケーブルカーは高野川の清流に沿うた八瀬西塔橋驛から山上四明ヶ嶽に通ふ。ヘシヤンダ様に傾斜した電車にのりこむ。チョコレート色のカーなんご云ふよい事であらう。車室は階段式になつて急勾配に準じて出來上つてゐる。定員八十人といふ。やがて發車の電鈴はけた／＼ましくとどろく。ギーゴト／＼と五六十人計りの人を乗せた、何千貫といふ。重い車体は僅に太さ一寸五分位の一本のロープによつて、一秒間二、六二米のスピードを保ち絶壁の様な急勾配を譯もなく引きあげられて行く。物珍らしげに乗客達は車窓より前や横後と見まはすゆるやかさも安全らしく、コンクリートに固められた軌道を進んで行く。中腹のあたりに軌道が複線になつてゐる。見ると山

上から下りて来た車輛は向側の線路に入る。そしてすれ違ひになる。丁度井戸の釣瓶の様だ、それから山上に近づくにつれて、勾配が急なので刻一刻と京都の市街が現れ、飛行機に乗つてゐる様である。フト上を見ると〇、九マイルの山上四明ヶ嶽驛である。其間九分  
ステーションのプラットホームは階段だ  
高台より眺望一目千里、壯大なる風景、一大パノラマの観だ、これが叡山ケーブルの持つ雄大なものである。  
登山・山詣の人達が今までなめた急峻な坂道に汗なす苦しさは車中の昔話シートについて、須臾にして山嶺に達することの出来るのは悲常な有難さだ。  
軌道に沿ふ近傍の雑木材は伐木して展望を廣めて居る。  
よく太つた人や弱い人達も易々として登山が出来、これから後の叡山はこの新名所と共に繁榮するであらう。  
終点から四明ヶ嶽の頂上將門が謀叛を思ひついたと云ふ所まで八町といふ。

急な道でもないが、ステーションのあたりには昔のおかごや馬車等があり、かごかつぎの男や女が澤山いる。勿論女は大原女である。  
私達は何ものらないで、てく／＼歩いた。  
たどつてゆく右の山の中にも左の谷間にも鶯の聲が聞えてくる。何となく春よみがへつた様で山中といふ氣分を深める。  
少しゆくと蛇ヶ池の運動場がある。  
あまり急峻でもないが少し苦しい、喘ぎ／＼やうやく頂上へついた。登る時は暑かつたけれど四明ヶ嶽の一角に立つた時、最早汗は體のごこかへ消え去つてしまつた。  
眺望がいゝ。  
「あつ」！思はず叫びたい様だ。  
八瀬・大原の村々は遙か奈落の底に沈み身は昇天の爽快に踊る。紺碧の空から降る銀光を浴びて白く輝く京洛の街々。遠く西の方に横たはる大蛇の様な淀川暗藍色に塗りつぶされた愛岩鞍馬の連峰、さながら活動のフィルムを展開する様に坐しなら雙眸に映じてくる。

爽快！快絶！

フト我にかへると將門が岩の上に乗つて京都を自分のものにしたいなあと考へたといふ將門岩の上に坐してゐた。粘板質砂岩の變化したものが大きな岩だ。何百年か昔、將門がこんな格好をして、二つの恐しい眼で京都の街をにらみつけたらう等と聯想しながらその岩に立つて見た。  
その向ふの方に望遠鏡がある。一人が十錢だといふ。八瀬の女が調節してくれると琵琶湖で海水浴をしてゐる人やボートが見えた。女は「今日は、あつちの方が少し曇つとるから見えんけどお天氣やつたらまだく／＼見えます」と琵琶湖の方をさした。  
頂上は廣い。  
下山は樂だ。  
四明ヶ嶽驛から又ケーブルカーによつて京都にかへつた。

蚊

俳句

第二學年西組 菊池ウタ子

庭はけば蚊の飛び起ちし落葉かな。  
蚊いふしに咽びながらの夕餉かな。  
月仰ぐ顔を訪ひ來ぬ蚊の一つ。  
蚊の一つゐて寝られぬよ蚊帳の中。  
蚊やり火の絶えしも知らぬごうちかな。  
蚊を打つて悔ひある衣の血痕かな。  
明がたの耳に又來る藪蚊かな。  
やがて死ぬ氣色も見えず蟬の聲。  
蟬暑し松きらばやと思ふまで。  
日盛りに赤き日傘の二つ三つ。  
ありし日をしのぶ墓場へたよりかな。  
亡き友にとゞかぬたより出しにけり。



## 静かな夜

第二學年西組 平賀園子

空に無数の星影が寶石をちりばめた如くきら／＼と輝いてゐた。

烏羽玉の夜にどこから来たか「きき／＼／＼／＼」と  
かん高い聲を残した夜烏がまた烏羽玉の夜へ消えて  
行つた。

後は再び元の静けさにかへつて唯星のまたゝきのみ  
………思ひ出せば此の様な夜に………

忘れる事の出来ぬいとしい妹を奪つて行つた魔のひ  
そむ夜………

時から勝氣の妹も今は力なくベッドの上に横たはつ  
てゐた。

章ちやんにとつてどんなに長い／＼病だつた事だ  
う。

「章ちやんお薬りですよ」ガラスのコップに盛つた水  
薬をそ／＼と持つて行くと章ちやんは「お薬りはい  
らんお母ちやんわたしお薬り飲みたくない——」

どこはいものでも見るかの様に顔をかくしてしまふ  
「でもね章ちやん、これを飲んで早く病氣がなほらな  
いと幼稚園に行かないからね、お隣の幸子さん  
はもうお辨當さげて赤い洋服きてね、幼稚園にいら  
つしやるのよ、章ちやんも行きたいでせう？早く薬  
を飲んで行きませうね、章ちやんも澤山きれいな着  
物が買つてあるわね、お辨當箱もあるでせう？」  
お母さんは毎日／＼涙をうかべつゝ妹に薬をすゝめ  
るのでした。

章ちやんはこれを聞くときつと嬉しさうに強くうな  
づいて見せるのでした。

あゝあれ程幼稚園を楽しんでゐた章ちやんに何故  
少し位行かして下さらないでせう

静かな夜

電燈の光をやせた體にあびつゝ今夜はいくらか氣持  
がよいのかさつきからすや／＼と眠つてゐた。

お母さんは長い間の看護でろくにお風呂にも入られ  
なかつたが今夜は如何にも氣持がよささうだからと  
私と共に近くお風呂に行かれた。

けれども何となく今夜は胸がせいてお母さんのせ

中も充分に流して上げないで直ぐ上つた。

お湯屋から出ると一層胸さわぎがして何者かに引つ  
けられる如く家途を急いだ。

けれども家に歸へつて見ると章ちやんはやつぱりす  
や／＼と電燈の元に氣持よく眠り續けてゐるし、傍

にはお父さんが坐つて何かに目を通して居られた。  
母さんは如何にも安心した様にそれでも早速カラス

湿布の用意をして妹の枕元によつてそ／＼と額に手  
を置いた。お母さんの顔は見る／＼青ざめて口唇は

怪しくわな／＼とふるへてゐる。

私は瞬間身が縮まる様な恐しさに襲はれた。

「お父さん、大變です。章枝の頭は／＼もう冷たく  
………呼吸が變つてゐます。園ちやん早く病院に

行つて來なさい、早く／＼」まるで狂氣の様に呼ば  
れた。

私は思はずバネにかゝつた様に飛立つて淋しい夜の  
細道を飛ぶ様にしてかなり遠い村はづれの病院へ走

つた。

夜は更けてゐたがすぐ醫者に會はれた。息もきれぎ  
れ急いで来て下さいと頼んで病院を飛出しその足で

すぐ親類の叔母様の家へかけつけ戸をドン／＼叩い  
た、叔父さんが出て來られて「どうしたの？今頃」と  
聞かれおろ／＼聲で「おちさん、章ちやんが死にさ  
うになつたの、すぐ來て下さいね。早く」こゝまで  
言ふと何故かしらとめどもく涙が流れ出した。  
息をきらして家に歸つて來ると今迄の氣持をぐつと  
押へて妹の病室へ來た。

室内は——しんとして物凄かつた。

醫者はもう來ていらつしやつて妹の胸に注射をして  
居られたが重々しい調子で二言三言、父母に告げる

と、唯じ／＼としてゐられる。

母は、つと座をつて室を出た。私は何うした事かさ  
つぱりわからずその後をつけて出た。

母は、すぐ佛前に線香を立てそ／＼と前掛で涙をふ  
かれるとその儘弟の寢てゐる部屋へ行つて「一さん

起なさい……一さん……章ちやんはもう死ぬんで  
すよ、早く起きて、さよならをしないね」としんみ

りとした聲でおつしやつた。

私はそれを聞いて思はず胸がびりりとして身振した  
「あつ章ちやんはもう……あゝ章ちやんが……」

いゝえ、そんな事があつてなるものか……神様ごうぞうそであつて下さる様に……」私は思はず佛前に泣伏した。

隣の部屋から私を呼ぶ聲かしたので、はつと思つて急いで章ちやんの枕元に坐つた。

病み衰へたおもぎしは蠟の様に青白く、くちびるは紫色に染められて唯すやゝとさつきの通り眠つてゐる。

私は恥しさも忘れて「章ちやん」二度繰返して叫んだが妹はぼつちりと目を開きつくゞと私の顔をみつめてゐたが、やがて静かに再もとの如く細く閉じて行つた。

私はどうか助けて下さいと醫者にすがりつきたかつたが無情や醫者は、何事か悔をのべて退出してしまつた。

「あら、もう歸へつてしまはれるの、お醫者様も少し今の中にどうかして下さいませ」私は後から、かぢりつきたかつたがもうすべて駄目であつた。

私の心は急に眞暗な深い底知れぬ谷へ突落されてしまつた。

た。

お母さんは、もう言葉も出さず細い章ちやんの手を握つたまゝ其の場に泣伏してしまはれた。

あゝ(驚き)……章ちやんが笑つて呉れた……」皆がさけんだのがこの世の別れ……

妹は、につこりとほゝえんでやがてすやゝと永遠の眠についてしまつた。

皆のむせびなく聲ばかりが静かな夜に空気に響いてゐた。

あゝ悲しい事を思出してゐた。星は私の胸に打明けた物語に耳をかた向けてゐたのか星の瞳にも露が宿つてゐた。

丁度その時、柱時計が平然と時をつげた。私はそつと袖で涙をぬぐつた。

### 皇太子殿下をお迎へして

第二學年中組 道家 愛子

何時もは砂煙りの練兵場も今日の善き日を飾つて遙

選文

お母さんはしよんぼりとお醫者様を玄關へ送つて行かれた。

家中の者は段々細くはかなくなり行く妹の靈を引きつける様に交るゝ「章ちやん」繰返へしてゐたが、妹は唯目をぼつちり開いて見るばかりで今は早や返事もしてくれない。

お母さんは聲をあげまして「ふみちやん……章ちやんはい、こねえ、今にすぐあみだ様のおそばへ行つて面白く遊べますよ、そこはほんとうによい所ですよ、もうすぐやさしいあみだ様が章ちやんをお迎へにいらつしやいますからね、ふみちやんはい、こと」こんな事を、聲をしばつておつしやるのでした。

他の者はそれを聞きながら聲をしのんでむせび泣き妹はそのたびに目を開いて母の顔を見まもるのでした。

かすかな呼吸になつて参りました。

あゝ妹は永久に此の世の人でなくなるのか。

私はだきしめる事の出来ぬ妹の靈にしがみついて、此の世へ少しでも永くとどめたいと一生懸命もたへ

向ふには杉屋根のけだかい御座所が設けられてゐる若葉に香ふ五月の日に、尊き方を御迎へする事の出来る私達の心は唯嬉しさをのゝく。私達ばかりではなからう。恐らく廣島縣下の人々は皆私達と同じやうな嬉しい心で、今日の喜びの日を御祝ひしてゐるであらう。市内の人は勿論郡部の人でも二三日前から泊り掛けで來ると云ふ風で、それだけでさへ如何に眞心がこもつてゐるかといふ事が判る。

四時何分御着と云ふのに早くも一時に集合したのである。それなのにもう練兵場は一ぱいの人で老ひも若きも皆心から御迎へ申し上げやうとしてゐる。

私はそれを見て何だか涙ぐましいやうな氣がした。其の中には腰のまがつた老人を乳母車に乗せて來てゐる人もある。杖をついたよぼよぼの老婆が大勢の人垣を前ににご進む。何と云ふ美しい心であらう。殿下はこんなのを御覽になつてどんなにお喜びになるであらう。と思ふと自然に暖い涙が滲み出た。

御仁徳深い事は始めから聞き知つてゐるけれども、どんなに御やさしい御方かしらなご、嬉しさの後から考へたりした。

空はどんより曇つて何時もなら「うつとほしい日」と一口に嫌がれもしやうに、今日は、行啓を待つお天氣と云ふので却つて落付いて静かである。あたり一面は異様な緊張味が溢れてゐた。それこそ赤誠の結晶であらうか。何時もはずみ分口数の多い私達でさへ周囲のいかめしい空気に溶け込んで何となくひきしまる。

やがて曇日の空を振はして殿下御着の花火が空高く響いた。頭の前から足の先まで冷たく固くなる。神経はいよいよ鋭くつて、一寸の物音にでもはつとふる。さうした気分がさう長く續かない中に、けたくましいサイドカーを先頭に、殿下の御召車はしづくと進まれた。

黒い多くの自動車の中に一際目立つて美しい朱塗りの御召車。菊の御紋章が目射る。あゝ殿下！侍従と御對坐なまつて軍服いかめしい殿下！非常な感激がぐつと胸につかへる。胸はどきどきと波打ち目の中が熱くなる。何故かしらぬ。何故か知らぬ。唯其の非常な御威光に打たれて。御眼鏡がきらりと光る。遠くながら其の御口元のきりつとしまつた御

威嚴のある御尊顔、一々敬禮に御答禮遊ばす爲、御舉げになる白い手袋の御やさしさ。殿下！天と地に遮ぎられてゐる尊い御方を近く拜し得るといふ、畏れ多い事と、自然にそなはれる御威嚴に感じて聲を上げておろおろと泣いて見たいような感激が体中に湧き返る。あの自動車を追つて行つたら、殿下は後をむいて下さるかしたら、など夢中になつて考へる。何萬といふ人が御迎へ申し上げてゐる事を忘れて、唯一人自分だけが、奉迎してゐるやうな氣がして何とも云へぬ御したはしさが湧く。其のまゝ自動車を御見送りするのが惜くて仕方がない。

「じゅー」と云ふ砂利の音を残して美しい御召自動車の御影が見えなくなつても、まだ私の心は殿下の後を追つてゐた。感情が高ぶつてゐるため先生が平生おつしやる言葉なんか頭の隅にもない。背のび足のびして、名残惜しいやうな氣分に馳られた。やつと氣が静まつた頃、はるかに聳ゆる廣島城を見上げると何時もは、唯若葉に包まれて、美しく思ふだけの天守閣も何だか紫の雲がたなびいてゐるやうに思へる。

お友達の目にも、皆涙が滲んでゐた。後は唯無言のまま、残された感激に息づいてゐる。

## 丘

## 第二學年中組 栗岡良枝

M國の一小部落I村にも楽しい春が訪れて來た。春！春！暖い春！長閑な春！平和な春！あゝすべてのものが幸福の霞に包まれて居るではないか。

ピョ〜ピチ〜……………可愛い雲雀の聲が雲の彼方から響いて來る。長閑に——はるかに——清くかすかに——低く高くなりながら……………

私は村はづれにあるA丘に行くのが大變好きだつた。

A丘は、霞に疊まれて、藍に紫に彩られたI山の前に横たはつて居る小高い丘で、邊には一面に雜草が茂り、其中を點綴して、春の草花が、赤・黄・紫・青・

白などに咲亂れて居た。それを遠方から眺めると、丁度グリーンのピロードを敷き詰めた上に、七色の花模様を散らした様である。

丘に上るとすぐ眼下には清いY河の流れが見られた。サラ〜〜〜しづかによごみなく落ちて行く水は、流石に春を思はせた。暖い日の午後など、河岸に佇んで見て居ると、目高や小鮎の群が無數に泳ぎ廻つて居るのが、河底の白い小石と共に、手に取るやうに目にうつる。其上を小さな水黽が唯一匹、水に身を任せて、スイ〜〜と下つて行く。

丁度二年前の今日の様に氣持の好い日だつた。何時もの様に、日さんに誘はれて、A丘に上つて行つた。二人はお揃ひの白いリボンをつけて、同じ様な飴色の靴をはいて居た。私達が上つて行つた時には、かなりの人が遊んで居て、鬼ごっこをしたり、かくれんぼをしたり、又は摘草に一心になつて居た。二人はわざと人を避けて、静かな木蔭を選んだ。それから一時、私も摘草に心を奪はれてしまつた。摘み取つたものは、皆蓮華草やすみれ草等ばかり……。それでも一生懸命だつた。



「良ちゃん。大分取れたわね——」驚いて振り返ると、其所には淋し相に微笑んでHさんが立つて居られた。

「もうお八つにしませうよ、直き十時になりますから」私も之には賛成して、笑つて立ち止つた。さうして元の場所へと歩を運んだ。

Hさんの白い手には、かなりの土筆がにぢられて居る。私はそつとHさんの顔をぬすみ見る様にして、自分の手元を見た。紫とピンクの花が悲し相に首をうなだれて居る。

「こんなものつまらないわ——」私は急に其土筆が慾しくなつて、いきなり花を捨て様とした。

「好いわ、ほんとうに、其花の方が可愛くつて——」Hさんはこう云つて少し許りの土筆を分けて下さつた。

そよ／＼と風が吹いて来て、二人のリボンを煽つてすぎる。青白い程のHさんのお顔には、白いリボンが此の上なく良く似合つた。二人の眼と眼がびつたりと出會ふ。につこり笑ふ。併しHさんは淋し相だつた。お揃のルビーがびかりと光る。

ピー／＼／＼心地よい程よく鳴る。

陽炎萌ゆる廣野の道を

小牛追ひ行く里の童

吹くや麥笛音も長閑に

空の雲雀の聲にだけ合ふ  
思ひ出す小學時代に、國語讀本で習つた歌、今自分は其氣持を心から味はつて居るのだ。何たか牛を追つて、童が出て來そうにも思はれる。

平和——長閑——静寂——

突然邊りの寂莫を破つて響き渡る鐘の音。

あゝ、暮時の鐘の音だ。ゴーン／＼I村の隅々まで傳はつて行く。慌しく暮色が邊りを取りまいた。人の姿も、I山の影も、もうはつきりとは見えない。夕やけ小やけ

明日、天氣になーれ

私は丘を下りる時、ふと子供の歌聲を耳にした。西の空が真紅に彩られ、山の頂——雲の影が、金色に照り映えて、又どない自然美を遺憾なく表現して居る。

静かにD橋を渡る。鳥ももう、ねぐらに歸つたの

「あ、疲れた——」Hさんは、額に滲み出た汗をハンカチで拭き取つてから、私の汗も拭いて下さつた。「ほんとうにあの時には、別れると云ふことの悲しさ、淋しさを知らなかつたのかわ——」と、私は一人言うた。

あの大きな瞳に、涙を一ぱいためて、誼はしろうに空の一隅に見入つて居られるHさんのお顔が、ぼんやりと幻の様に浮んで來る。

「悲しい別だつた。淋しい別だつた。ほんとうに——」私はもう、別れると云ふことの悲しさを知つて居るのだ。味つたのだ——」と、思はず臉が熱くなつて、私には一人で暖な涙が滲んだ。

私は中食を取つてから、又A丘に上つて行つた。ぼかぼかと陽気でねむくなる。黄に咲いた菜の花の上を、ちら／＼と陽炎が萌えて、早いうすはかげらふが二三匹、胡蝶と一しよに、先になり後になりして、戯むれて居る。それもやがて目前から過ぎ去つてしまつた。芝生に轉んで居ると、何だか草笛でも吹きたくなる。麥島まで一走り、麥の葉や、稻の莖を五六本、無造作に引き抜いて手早く麥笛を作る。

であらう。鳴聲さへもきこえない。

あゝ、春の一日は行かんとする。思出多き春の一日よ——なつかしき春の一日よ。

おゝ、もう暮れた。I山の頂を染めて居た夕映も次第に薄らぎ、高く突き立つた北峰の杉が、物凄いまでに黒く姿を浮かして居る。

春の一日——楽しい一日——愉快な一日——夢の一日——あゝ、すべてのものが、夢のとばりに抱かれて居るではないか。

I村の春の一日は、かくして夢の如く淡く消えて行く——。 終了

### 七夕の夕

第二學年中組 前 笹 龜 代

たのしいまごらかな夕飯をすませてみんなは思ひ／＼にうちわを片手に裏庭のすつと見通せる椽側に出た。

お椽に腰をかけたたり片膝を崩したりして、ぱた／＼

どうちわを使つてゐた。晝間大きな笹に赤・青・緑・黄・白の色んな形の短冊に筆で一心になつて、書きつけたのが、八つ手の向ふの植込の所に、わざ／＼揺れて、見えてゐる。お庭の木には、今しがた私がじよろで水をかけたその後が、きら／＼／＼／＼寶石の様にかゞやいてゐた。飛び抜けて高い松。地を張つてゐるさつき。大きい手を擡げている八つ手。すつと植込みになつてゐる樹木など晝間とは全然變つて、私の眼に映じる。それ等の木もみんな露をうけて嬉しさうにしてゐる。私も嬉しい！私と母様と二人で今日朝方庭の大きな石の上に台をのせてそれに白いさらしの布をかけ、大きな西瓜。なす。きうり。東瓜。南瓜。たうもろこし。等をのせてあるのが何とも云へない程嬉しく感ぜられた。私は庭下駄を突かけて飛石傳ひに庭に出た。カラコロン／＼とはつきりあたりにひゞく。私は石の後に立ててゐる笹の所に行つてその中から私の書いた短冊をよつて四五枚持つて來た。

「七夕さん、たなから落ちて灰もぶれ瓜やなすびが機嫌とる。」といふのがあればいやに固くるしい格

言めいたのがある。

「あは、／＼、何だこれは。」と父様は私の手から格言めいたのを取つて大きな聲で笑はれた。そして笑ひながら首をひねり／＼讀み初められた。「まあ」私は腹が立つて、思はず叫んだ。いくら私が字が下手だからといつてもあゝ迄首をかしげて讀まないでよいものに、と思つたのでいきなり父様の手から引きむしつて丸めてしまつた。するとその私の顔がおかし

いといつて又みんながどつとばやした。今度は自分ながらおかしくなつて來たので、みんなに釣り込まれて笑ひ出だした。本當に家はたのしいな！と思つて初めてあたりを見廻した。電燈を消して美しい岐阜燈灯をつるしたのが云ひ様もなく夏らしい。お庭からすだれ越しに、岐阜燈灯から下る四つの數珠つなぎになつた綺麗なふさが、二尺餘も垂れ下つてゐる。

そよ／＼とそよ風が吹き過ぎる度にお椽につるした風鈴が、りん／＼／＼／＼と美妙に歌ふ。すだれが岐阜燈灯のふさと、共に動かされて疊の上に長い影を落してゐる。

庭の笹が、風につれて、ざわ／＼とゆれてその度に短冊か、ひら／＼舞ふ。お庭とお座敷とをくらべてゐる内にふとお座敷の机の上の花に氣づいた。今朝母様が一生懸命になつてお活けになつた平鉢の中に可愛い、桔梗女郎花。ピンクの撫子が調和よく美しくならんでゐる。あたりの氣持よさにうつとどしどしとゐると急に父様が「西瓜を切らうか？」とおつしやつた。「えい。」と何の氣なしにうつとどしどし返事をした。と自分の言葉に我に歸つて、はつとした。今の言葉が、丁度いゝ工合いに合つたけれど、もしこれが變つてこんな所に運悪くすべつたならば又みんなに笑はれなきやならなかつたのにまあよかつた！と思ふと再び胸を撫で下した。すると間もなく大きな西瓜が、ねえやの手でお台所から運ばれた。

母様がそれを眞二つに切られた。みんなそれ／＼それを口に入れた。冷いおいしい味が何とも云へない。物を云はないで食べてゐたみんなはそろ／＼お腹がふけると口が働らいて、手に持つた西瓜はお留守になり勝ちであつた。私も一ぱいお腹にいれ込んだ時、茶の間から十時を知らせる音がした。

「あゝもうねる時間だね。」とお母さんがおつしやつた。私も氣がついて見ると、あたりは、ひつそりとして物音一つしない。みんなは、はたと口をつぐむ、氣持の好い沈黙がつゞく。そしてゐる中にはみんなの顔を見てくつ／＼笑ふ者がある。「ウフ／＼／＼」とみんなは、聲を立て、どつと笑ひ崩れた。蚊のふうん／＼とさうなる聲が喧しく耳につく。空には澤山のお星様が、降る様にまたゝいてゐる。松葉の間からもきら／＼とダイヤモンドの様なお星様が。幸福さうな、私達をいつ迄も／＼見つめてゐる。

眞黒い空がだん／＼と薄く切れて行つて間もなく朧の月が片割れとなつてぼつかりと浮出してゐた。

## 夏休の出來事

第二學年南組 泉 サナへ

「夏休の出來事」つて皆楽しい事ばかりだつたけど、最後にした病氣がすつかり吹き消して了つた。

丁度楽しく遊び戯れてゐる心を重苦しい試験がひるがへす様に。古びた五重の塔の高く聳える下に群鹿の悠々と歩く奈良の情緒、振袖重く夢見る様な瞳の京の舞子さん、みんな楽しい思ひ出ばかりだったのに、薄絹を隔て、見る様な本當にほんやりとした記憶になつて了つた。一番しつかりした記憶、やつぱり病氣だ、たつた二日だつたけど吐いり熱を出したり溜息の二日だつた。九十三度の炎暑に暑いお蒲團にくるまつてじつとしてゐる苦しさをたらありやしない。「うんく」あまり苦しくも無いのに唸つて見たりする。吐く息がお部屋にこもつて燃え立つ程の暑さだ。「え、これじゃあ暑い、一寸開けて上げませう一寸ですよ」此の時ばかりはお醫者様がおがみたかつた。後光でも射すかと思はれた。お空とポブラと物乾竿と展開した嬉しさ、あかす眺め入つた朝。太陽は未だ出ない。お空は水色にぼかされて下界を祝福する様に照りはえてゐる。ばら色の朝、希望の朝、ポブラは新しい魚の銀鱗の様にビチ／＼と熱よくはゐてゐる。物乾竿だけは何時も變らぬ棄てられた色で守宮の背中の様なかさついた色で。

晝、天地は微動だにしない、夏の太陽がじり／＼と照りつけてゐる。今お空は青い、青い、じつと見詰めてゐると何だか吸込まれさうだ。南國の海の様だ。椰子の陰濃き。風はちつとも無いけれどポブラだけはゆらり／＼と子守唄の様に揺れてゐる。赤蜻蛉が時々すい／＼と目の前を横切る。ねむつた儘、見詰めてゐると小さい景色だつてどん／＼ふとつて行く様だ。景色だつてお日様に育まれてゐるのだ。あぶが不氣味な唸り聲を立て、ポブラの上の方の枝にさまつた。小鳥位に見える。それがお日様の光を受けて快く光る。寝てると何だつて美しく見える。神経が凡ゆるるものを美化する様にも思はれた。夜。お空は夢の様な色だ。お晝の空に水を流して段々しぼつて行つた様な色だ。お日様はもうすつかり隠れて其の餘波が東のお山をアルプス連山の様に染めてゐるつて父さんが云つた。急にお山に登りたくなつた。お山！お山！夏のお山さんい、たらう。何も食べられないと急に變なものが食べたくなる。今日だつて葛餛飩が食べたくなつて弱つた。お山だつて登れないと解ると急に登りたくなる。快

つてから誰かお山に登らうと云つたつて登る様な私じやないけれど、どうも不思議だから此の事をお父さんに聞いて見ると此んなのが「天邪鬼」と云ふのだとおつしやつた。

私、今迄随分天邪鬼つて悪い人だと思つてゐた。なせでも、日通寺の山門の人柱にされたり嚴島附近の孤島にお墓を建てられたり死んでからの報が一向有難く無い事ばかりだから、静にお目々をつむつて天邪鬼の事を考へて見た。………かさこそ／＼ポブラが鳴り始めた。もう北風が出たらしい。何時か習畫室にはり出してあつた。圖案に濃いオリ／＼地があつた様に記憶する。庭のポブラは其の色に一寸似てゐる様な氣がする。暗い繁みから何か出さうで氣味が悪かつた。もう九時打つた。おやすみ、さよなら、ポブラよ、お空よ、物乾竿よ。

此の間の遠足

第二學年南組 東

和

満員札を掲げた電車は私達を尻目にかけて走つて行く。私達の浮き立つ心を知つてか、知らないでか。走つて行くのを後から見ると、何だか大きな人の顔の様に見えて憎さは増々募る。小網町迄歩いて、漸く鮎詰の様になつて乗つた。

己妻の電車の停留場の前の狭い空地は、縣女の制服、制帽に埋つてゐた。電車を降りた。輝かしい友の顔は私を迎へて呉れた。時間だつたので皆整列してゐた。私達は其處迄一散に走つた。四人居た中の一人は乙隊に加つたので、たつた三人になつた。けれど私達は唯、秋の山登の歡喜に、身も心も浮立つてゐた。路傍には彼岸花が赤く熾えてゐた。又農家の庭には、紅や白のコスモスが朝風にゆらり／＼とゆれて居た。街道を右に折れて八幡川に沿ふて上つた。川の水はさら／＼と氣持よく流れてゐた。去年來た時には壊れてゐた橋が風雅な木造りの橋に



選文

なつてゐた。でも其の袂に立て、あるある幡は厭な感じを起させた。路傍の廣い鳥小屋には雞が自由自在に遊んでゐた。また其の傍には牛が其の偉な體を横たへてゐた。如何にも呑氣さうに。

だん／＼溯るにつれて、川の幅は狭くなり流は急になる。危ふく懸け渡された板橋を渡つて左に折れた。其處には此の邊には珍しく大きな神社があつた。

黄金の田には所々に倒れかゝつた案山子が立て、あつた。其の黄色い波の間をうねつて漸く麓に辿りつた。

私は此處迄來た時思はず懐しい感じに襲はれた。それはあの永い四十日の休みの間、毎日々々窓から見では思ひ憧れてゐた山だ。あのお山の向ふには楽しい／＼お國がある。きつとそつだ。私はいつもそつ考へてゐた。其の山の麓に今私は立つてゐるのだ。そうして將に登らうととしてゐるのだ、と思つた時、私の胸には又新しい歡喜が芽生えて來た。

今迄方々に翠の影をつくつてゐた無花果は殆ど盡きて、土藏や家の側に色づきかけた柿が枝もたわ／＼になつてゐた。木のすみに這入つたかと思ふとばつと

開けて鳥の隅には火の様な雞頭がすつくと立つてゐる。小さな流の側には小屋を掛けて、水車が倦ますたゆまず廻つてゐる。暫く登ると石のころ／＼轉つてゐる道に出る。それを登り切ると松林が續いてゐた。私達三人は谿流に臨んだ岩の側に腰を下した。

空が灰色に染つて身にしみ通る様な風が吹き下して來る。思はず身をすくめる。とかつと晴れて日の光が木の葉を漏れて邊が薄緑になる。谷の水は氷の様に冷たかつた。顔を洗ふと蘇つた様になる。一休みして秋草を探しながらすん／＼登つた。

しほらしい釣鐘草の様な花に飛付いたり、黄色な女郎花に走り寄つたり、又木と木の間此の天地を我が物と大手を擴げで巢を張つてゐるのに驚かされたりして、懸て手には薄や女郎花や野菊や其の外、名も知れない草花が一杯になつた。

見馴れぬ蝶々や蜻蛉が寒い冬がやつて來やうなど夢にも知らず飛び廻つてゐた。山に來てよかつた今更の様に思つた。いつもなら楽しく賑やかなお辨當も今日はひつそりと濟した。でも私達はそれに満足した。

### 一番悲しかった事

第二學年南組 池田ヒデヨ

日が眞夏の様にちり／＼照りつけるので草つ原に投げ出した足が焦げつく様に熱い。けど流石に私だ。夏なら水氣を帯びてゐる様に感じるのに、今頃は何となく乾燥してゐる様に思はれた。

暫くするビ／＼と笛が鳴つて其所ら中に散つてゐた生徒は一所に掻き集められた。あれ程遊んでゐても、降りるとなると、名残惜しかつた。私達は山の翠を後に、元來た路をかへつた。一つ／＼の物が皆、行く時の、楽しい希望に満ちた思を喚び起させる。井の口迄來ると、もう一步も進めなくなつた。目の前をからの電車が氣持よささうに走つて行く。あれに乗つて一飛びに歸り度い。私は電車が來る度にこゝう思つた。そうして束縛された身の悲しさ——とは餘り大袈裟かも知れないが——を感じた。もう誰もかも疲れ切つたのか、物も言はず、黙々と歩いて行つた。己斐の停留場を見た時、張り詰めてゐた心が一時に緩んで、倒れさうになつた。そうして電車にありついた時はぐつたりと後に寄りかゝつた。

「この人が私の姉さんかしら」私は見違へる程美しくつくられた姉さんの容姿に見惚れてゐた。ちつとも似てゐやしない。これがあんなに意地の悪かつた姉さんかしら、どうしてもさう思へない。長いまつげ、水をふくんだ様な眼、濃く紅でぬりつぶした小さい口許、それに繪に書いた様なふじ額。私は一人取殘された様な氣持で足元に眼をそらした。其の時私の足の上で何か白く光つてゐるものがあった。おや？おゝそう／＼之も私のなつかしい思出の傷あとだ。「早く行きなさいよ遅れるじやあないの」「でも轉びさうなのですよ」「早く行かないとぞで押す事よ」斯う言つた險しい姉さんの言葉にさからふまいとして雨上りの道を無理に急いだ爲に、きつ下駄の緒ですつて出來た小さな傷、いはゞ姉さんの作つた過の傷である。それが今日こんな可愛ゆいすべ／＼した微な禿になつたのだ。そしてあんな

に悪かつた姉さんは……もう少女の時代を終りやさないの娘時代にもわかれを告げて大人の仲間には入つてゐらつしやるのだ。私は今迄それを知らずに二人で大騒して面白い日を過した。けれどももう今宵かぎり姉さんはよその人となつてしまふのだ。どうしても別れなければならぬ。今迄の腹立たしい喧嘩迄も果敢ない思出となつて仕舞ふのだ。姉さんと二人で何處か静な森の中につまでもいつまでも住んでゐられるのだつたら、私はもう何もいらぬに、でもそれは空想だ。はかない／＼手に取れば消えて仕舞ふ虹の様な空想だ。

「どうしたの、度々學校の歸りにいらつしやいなね」「近いのだから」「え」まあもう姉さんはよその人だ。私の頬を生温い涙が幾筋も／＼傳つた。姉さんは行くのを喜んでゐるのかしら、私はむら／＼湧いて來たにくしみの心をどうする事も出来なかつた。姉さんは私と別れるのを喜んでゐる。只一人私を淋しい所に残して美しい花園の様な所は入つて仕舞ふ。いゝ、いゝ、もういゝ。私の姉さんではない。どうなりと勝手に、私をおきつばなしにして女王の様に振舞

ふがいい。

斯うして一人悲しんでゐた時今夜雇はれた姉さんの支度をする人がは入つて來て姉さんを促した。もう自動車が出ますつて。「さう」姉さんは長い／＼縮緬の裾をゆたかに引きながら出て行つた。其の時本當にその一寸の時私は姉さんの白い頬を傳つてゐた光るものが私の眼に焼きついた。涙——あゝやつぱり姉さんは……あゝやつぱり私のあの親しい姉さんだ。斯う思つた時私の胸にあらしの様な悔恨の情がむら／＼と湧いて來た。御免なさい、お姉さん。私は机にうつぶして泣くばかりで何の考も浮ばなかつた。しかし其の時のその涙はもう、さつきの様にけがれた涙ではなかつた。淨い／＼真珠の様な涙であつた。

ブルー／＼早や自動車の出るけはひ、窓をあけて見ると雨をついて數台の自動車が疾走して行く。左様ならお姉様。どうぞ私を忘れないで……

### 三等列車の旅

第二學年北組 中村千代

「ではよろしく頼みます」小林の兄さんに私の事をたのんでお父さんは汽車を降りた。何だか急に淋しくなつた。ゴットン／＼汽車は東へ東へ、廣島の町はだん／＼遠ざかつて行く。もう灯だけしか見えな

い。三等列車の旅はつらい。煙草のけむりでむせかへる様だ。電燈には蛾が一ぱい來てゐる。足をのばしてねてゐる人、子供に乳をのませてゐる内儀さん。かん高い聲で話してゐる若い人々、座席の下は丁度塵箱を引くりかへした様にビール瓶、辨當箱の空、アイスクリームの箱、梨の皮等々。

海田市で水兵さんが五六人乗つた。さわいで後の紳士に叱られてからいくらか静かになつた。眠らうと思つても汽車がゆれて、ねむれさうにもない。静かにいろ／＼な事を考へた。坂道もすんで西條あたりから汽車は急に速くなつた。ねむられぬまゝに秋ち

やんと學校の話などして過した。急行ではない列車は小さな驛まで一々とまつて行く。本郷あたりで降る人に代つて貰つてねる仕度をした。——仕度といつても空氣枕を出してその位置を定めただけだが——ふと目がさめた。ゴ—と汽車は一しきりゆれて岡山についた所だつた。十二時半だ。それでも三時間ねむつたと見える。足を蚊にさされてゐる。顔にのせたハンカチの上には黒いごみが一ぱいたまつてゐて急に拂ひのけたら汗だくの背中にはいつた氣持が悪い。あたりにねむつてゐた人がねむさうな目をしておき上る。丁度蠶に桑を與へた時のやうに。添乳をしてゐたお母さんはよくねむつてゐて赤ちやんだだけがおきてお乳をいちづつてゐる。よくまあ子供を落さない事、おそろ／＼その子供をあやして見た。子供は頬ふくらませて、變な顔をして、にらめつける様にしたので、泣きはせぬかと、それからあやす事は見合せた。汽車は夜の道を、まつしぐらに走つて行く。

「皆さん、此の汽車は姫路まで。降りません」と、一ねむりしようと思つてゐると前にゐたお婆さんが

どこまで行くかと伊豫訛の言葉で聞いた。私はたゞ「すつと」と答へた。お婆さんは東海道を行くことも思つたのか、地震のあつたのを知つてゐるか又聞いた。「え、知つてゐます」と答へたので、安心したらしく、それからは何もきかなかつた。私は心中このやさしいお婆さんと話して見たかつた。一つには伊豫の言葉を聞きかたつたのだ。しばらくして、そのお婆さんも寝た。汽車は次第に早くなつて行く。次はごごだらう。窓から見えるのは遠くの灯だけ、淋しい田舎を走つてゐるらしい。まだく西宮は遠い。車中は静かになつた。今度は位置をかへてねむらうとつとめた。汽車は静かにそれでもゆれ乍ら、夜の道を走つて行く。

或日の日誌

第二學年北組 中村 知 恵

×月××日 晴天  
朝 五時起床

トロン／＼鳥が鳴く  
ねんねの森から目がさめた  
さめるにやさめたがまだねむい……  
其の歌聲に目がさめた。婆やがあんな歌を唄ふ筈はないし。はてな。あたりを見廻した私の目に映つたのは姉の姿だつた。私は急に其の歌聲が懐しくなつた。姉のまだ家に居た時いつも唄つてゐた歌だ。私は寢床の中に飛び起きて「姉さんお早う、随分お早いね。あの歌いつもお歌ひになるの」姉は微笑んだ。「いゝえ久ぶりに家へ歸つてあの歌が懐しくなつて歌つたの」姉は家に居た頃から何かにつけて弱々しさうだつた。  
私は急いで顔を洗ひ裏に出て見た。まだ朝顔も半開きのが多く、涼しい風が吹いて来て何とも云ひ様のない氣持良さだ。  
表の方ではそこゝで店を開ける戸の音が聞える。時々大八車がきしる。いかにも朝らしい感がある。  
暑い／＼何處に如何して居ても暑い、退屈まぎれに店から雑誌を一冊持つて来て読み出した。まだ十分

も讀まない内に店で、「知恵ちゃん泳ぎに行かない」と云ふお友達の声がする。すぐ様水泳着をかゝへて家を飛び出した。

頭から陽がかん／＼照つて日射病になりさうだ、銀色に光る川が向ふに帯の様に見え出した時は思はず「快かな」をさげんだ。

此處ばかりは暑さを知らぬ國だ。楽しくきやつ／＼と戯れてゐる小供等を見るときも何とも云へぬ氣持になつて、水着に着替へるのももどかしく川に飛び込んだ。冷めたい川の水が私の熱した体に氣持良くしみ込んだ、川だ／＼、お、私の川よ！川の中を河童の様に泳ぐ時は私の一番楽しい時だ。

夜、  
温い湯につかつて手足をぐつと思ひきりのばした。とても良い氣持だ、一日中の草臥を洗ひ流すのが風呂なら一日中の心の悪を洗ひ流すのも風呂だと思ふ晩食の後かたづけをする時、いつもの歌をうたつた。これも姉が家に居る時いつも茶の間をかたづけながらうたつた歌だ、そして父が生前夜のお祈りの時うたつた歌だ。

夕日はかくれて道ははるけし  
行く末いかにと思ひぞはすらふ  
我が主よ今宵も共にまして  
さびしき此の身をはぐくみ給へ。  
九時就床。

山 登 り

第二學年北組 栖 雲 貞 子

夏休暇の終りの或日、私は叔父さんと今年三つになる従弟の常ちやんと、三人で山登りをした。私の目的は昆虫採集だつた。常ちやんは叔父さんに抱かれたり脊負はれたりして登つた。常ちやんは生れてから始めての山登りだから喜ぶのも無理はない。  
私は未だ山へ登らない中に蝶等を澤山取つたので、山へは余り登りたくなかつた。蝶等を追ひ廻して居ると、叔父さんの影が見えなくなる。負けては追ひつく、又後れるする中に段々山の中に入った。追ひつく時常ちやんを「こらく／＼待て／＼」と追ふ

と、常ちやんは叔父さんの脊中をゆすつてもがく。一面笑を漂はせた黒い小さい顔が後を向く。斯く狂ひ乍ら登ると、ゆくりなく人家を見付けた。此の人里離れた山の中に……、私は此の人達が何故こんな所に居るのかしら、小供も居るに學校へ行くのだらうかと疑つた。更に此の一家に加る鶏も飼つてあつた。

黄塵の世を避ける人か、或は風流を好む人かと思つた。勿論知る由もない。田舎の習慣で知らない人にも道で會つたら「今日は」とか暑いとか寒いとか云ふに定つて居る。叔父さんも其の田舎習慣を忘れず「今日は」を一發やつた。向ふの主人らしい人が「マア休んで上んなさい」と云ふ。叔父さんは断る様子もなく「渡に舟」と云はる、儘に休む。私は体の休め場所に窮したが、幸小川の側の岩に腰を下した。岩からの冷氣は軽く疲れた身体を冷して何とも云へぬ程涼しい。やがて此の人達と別れて更に登つた。道の右側の山に續いた所に「奉寄進」と書いた旗か澤山立て、ある。きつここれは願をかける其の印であらう。これを見てこの道も夜は恐しい靈道と

なるのだらうと思つてゾツとした。後を振り返つて見ても誰も來ない。只前に常ちやんと叔父さんだけが居る。尙更心細い。ズン／＼登つて行くと、仙人の洞窟の様な中に清水汎濫し數十年経たかと思はれる所があつた。そしてその岩には苔が蒸して滴る雫は眞珠の様、私はこれを見て急に涼しくなつた。私は其の氷と冷く玉と澄む水を汲んで足を洗つた。あへぎ／＼又登つた。休み小屋が炎天の下に私等を待つて居た。私達は其處で裸足になつた。樹陰の嵐氣肌に迫る所又は焼けつく様な所を通つて仙境とも云ふべき十八町の頂上に達した時は、天下を小とする思がした。此處で二、三十分休んで再び歸路の坂を下つた。

### 思ひ出の野

第三學年東組 高野綾子

野！野！山と山との間の、そして前に平和な瀬戸の入海を控へた一寒村に、十四の春迄はね廻つた私にと、ほつちり浮んだ、緑の小島と、大きく横つた鯨の様な能呂山と、親鯨にいちらしくよりそふ子鯨の連山と、その皺の間の私と同じ様に廣野に憧れてゐるであらう乙女の住む村々より細く昇つて行く紫の煙だけが映つた。

は、清い水の澱み、流れてゐるあの美しい大川の蛇の様に曲りくねつたのが見える殿山や、ぼーつと霞んだ音戸の瀬戸の彼方に、白い帆影が夢の様にはぼつちり浮んでゐるのが見える先山で、楽しく遊んだ數々の思ひ出は今尙くつきりと私の胸に大切にしまはれてゐるけれど野に遊んだ事のない私には野の感想なんてものは一寸もなかつた。野といへば、なごやかな陽の中に果しなく續く廣野を想ふ。幼い頃、繪本や讀本で「おみよは三郎と、野に花をつみに行ききました。」等と書いてあるのを見て、私はどんなに山ばかりの私の村を、口惜しがつたかしない。「ねえ廣い野原で遊びたいのよ。お姉ちやんは。」と姉らしく妹のおかつばをさすつたものだ。廣い野あゝ廣い野！ 幼い頃の私の憧れ。尋五か六かになつた時、冬枯の野の所を習つて、一層憧れを強くさせられて、高い山の頂邊で高くもない脊を爪立して、一生懸命廣い野を探し求めた。でも、私の希望に輝く瞳には、やつぱり、古代のセントの瞳を想はせる、限なく擴がつた深い藍色の海

と、静かな太陽が、深緑の木立を、洩れて美しく輝く中を、泣きたい様な氣持で松かさを無暗にジョンに投げながらしほ／＼と、坂路を下つていつた時、山鳩がほう／＼鳴いてゐたつけ。それがこの試験に通つて、三次へいつた時、三月終り頃の積雪や、清い小川のせゝらぎに過去一年の苦しみを忘れてガタ／＼汽車に揺られつゝ、貧弱なステーション……に。それから威勢よくおばあ様の家で車を下ろされる迄夢心地だつたつけ。「さあこゝがおばあ様のお家」とやさしくママに囁かれて「いや綾ちやんもつこのりたたい。」つて駄々をこねた私。昨年死んだ祖母は「およう來た。ようきた。大きくなつての——。」と如何にも、可愛くつてたまらないといふ風をしたつけ。そして、あゝそして、あの美しいふつくらとした草餅の尾關山公園に、年上の従兄と三次

の盆地を見下した時、始めて私の長い希望は達せられたのだ。

春とは名のみの三次の平原は、紫色の山に圍れて、其の冷々と冷えきつた三月の霧の中に、やがて来る春の用意に忙がしうであつた。平和のシンボルの様な農夫の鋤先は、凍つた地面と、細かく震へてゐる大氣の中に、輝いてゐた。

桑は若芽を、その固い冬籠の衣の中からのぞかせてゐたし、可愛い工筆坊は雪や霜に固くかためられた地面を突きやぶつて「やゝやゝと春が来た。」と喜んでゐた。

監下の大川は深い淵をして、雪解けの水を狂はして、黒岩に投げかけてゐた。ぱつと散る水玉。冷たいしぶき。

彼方の芝生、まだ冬枯れのまゝの芝生ではあるが思ひなしかローマのお寺のドウムの様である。やがて花に酔ひ、酒によふ人の千鳥足に、無慚にふみにじられる時を知りつゝ、ガタ／＼汽車の汽笛にさえ、三次の平原は来る野を讚美し、謳歌してゐた。すべてが快い努力の中に……。

ニンフ生活を想はせるオートレライの口笛は、高いつまでもいつまでも漂つてゐた。

「まあ。三次はい、所ね。廣い野があつて。」

「なにえ、こないが」従兄は答へた。

「え、所じやが。」といつて笑つた。従兄も笑つた。

三次の平原もにつこりとほゝえんだ。

妙に強く光る桑島も、監獄の高壁も嬉しかった。

巴橋も。松原も。そしてそこで活動の撮影のあつた

事も、一層平原を楽しいものにしてくれた。

あゝ今まで矢張り私は、もう一度なつかしい監獄の

高壁の傍を、野牛の路を、名も知らぬ小草の一つ／＼

にもほゝえみかけながら、赤いたのしい夕日を脊に

うて、唱歌を歌ひつゝ歩きたい。そして心行くまで

三次の平原の空氣にひたりたい。

あゝ廣野よ！ 夕日よ！



秋の悲しみ

第三學年東組 榎本壽美子

幼き時の思ひ出は懐しくも、淋しきものである。

それはまだ私の家があの關門海峡を越えた遠い遠い宮崎にあつた時の事である。

町はやさしいスロオプをなす丘の中腹から孤獨の乙女の様な月見草が大海のうめきふるへてゐる海岸まで續いてゐた。海は明くて銀の様だし、丘の青草は子守唄の様な微風にゆられて緑の夢を敷いてゐる様だし、あの町の六月ほど美しい六月はない。

兎までが一緒にはね出す様にぎら／＼と強くお日様の輝く日には丘は焼きたてのよもぎ餅の様にふつくらと青色に描き出され、名さへ知らぬ糸の様な青草が物狂し氣に日光と戯れ合ふのであつた。

そんな日にはよく音楽の本と一緒に其の柔かな青草の丘を登つて行く。頂きは巴里ッ兒があでな女王をえらぶ美しい巴里の花祭りを思はせる花の都である黄色。ベニ色。ピンク。緋色。山吹色。

群る様に咲いた花の美しい色と、甘い香ひとは丘の唯一の魅力である。根元をおしわけて寝てゐると、陽に染つた赤い光が空に漂ふミルク色の雲間から止めどなく滴り落ちる。

陽の光を浴びて夢の様な花の丘、夢の様な青い空、それらに守られて夢の様に唄を歌ふのが一番好きであつた。

見渡せば限りなく續く廣い畑。

無限の力と勤勞とをこめた三日月の様な鍬が陽にこげた赤黒い顔と一緒に輝しい眞晝の空氣の中を泳いで行く。かくて地表は次第に耕されて行く。

ぼんやり眺めてゐると、ねるの着物の袖口からくすぐつたい西風がそよ／＼と吹いて来る。

かうして六月の午後はねむつてゐる様に静かであつた。

突然「突貫——」と其の靜寂を破つて、英雄氣取りで一生懸命走つて来る妹。父のふるぼけた黒茶色の帽子にあうかた顔をうづめて、長い竹竿で地上に曲つた様を残して来る。と竹竿が石にひつかかつて哀れあれ程の英雄はつひに倒れた。——が泣きさうにもな



い、暫時花の陰にかくれてどうするかと見てゐたら小さな顔はこつぼりと帽子にかくれてあごさへも見えない。帽子をとつた妹はくるり／＼と邊りを見廻して、こそ／＼と起き上る。私はひよつと頭をもたげた。ぱつたりと視線が出合ふ。――と腕白氣な顔が見る間に痛しくもしほらしき泣き顔に變じた。妹はわざ／＼こけて泣き出した。私はをかし／＼とじつと何時までも見てゐてやつた。

妹もいつまでも／＼地上にころんで泣いてゐる。仕方なしに「おべべがよばれるよ。起きなくちや。ねえ、まあちやん」何時までもすかしても知らん顔をして泣いてゐる。無理に起せばまたころんで一層激しく泣き出す。もう終りには腹が立つて黙つてはつてをくど、ひよつと起き上つた。まあなんて言ふ事だせう。妹は私の顔を見てくす／＼と笑つてゐた。

あゝ無邪氣な妹 懐しい宮崎

× × ×

或日の事

くつきりと障子にうつる二つの小さな影。

一人はお河童。一人はいがぐり坊主。

こそ／＼と何んだか手まねで相談してゐる。一人は云ふまでもなく妹。一人は多分お向ひの勝ちやんらしい。やがて相談は成立したらしく一先づ解散した。

再び障子にうつされた影には筆が参加してゐた。私にはぬむりをした風をしてゐるとす／＼と障子のひらく音、つゞいて忍びよるかすかな足音。一人は私の脊の方に、一人は前方にと二手にわかれたらしい。くす／＼と聞える笑ひ聲。いきなり冷たいものがびたりと額にあたつた。

同時に私は大聲で「こらッ」と叫んで起き上る。勝ちやんは素早く逃げた。妹は驚いてしばらく私の顔を見てゐたがいきなり白雷の一時に落ちる様な大聲で泣き出した。

× × ×

涙の雨が闇の天空を貫いて恐怖と誘惑の世界の遠い旅をつゞけ、救を求める様にポト／＼と夜の町の静寂を破つてゐる。更け行くまゝに家々の燈は次第にうすれ、闇に吸ひこまれた雨は音のみかまびすく、深夜の空氣に消え失せさうなぼ／＼とした電燈がポツ

カリと闇に浮んで淋しいイルミネーションの様だ。遠くを行くはまげたのかすかな音。ねむそうな人をのせて電車が行く。

うどん賣りの茶碗を洗ふ音。

何處からか洩れて来るハーモニカの銀のしらべ。

あら盗人かしらと耳をすませる鼠の音。

あゝすべての物が淋しく物憂い晩秋を語つてゐる。

廻り廻つて幾度か秋は訪れて来たものを。懐しい妹は永久に歸らないのだ。

あゝ其の靈は何處に眠るのでせうか。世のすべてのものをすて、一人悄然と此の世を去つた妹、もう私には妹と呼ぶべき人はゐないのだ。ぼんやり妹の幻が浮ぶ。

「母さん妹のなくなつた夜も丁度今宵の様に静かな夜でしたわね。」母は無言の儘うつむかれた。低くおろされた赤々しい燈に熱い母の涙がぼんやりと光つてゐる。あゝ悪い事を云つたと思はず胸に手をあてる。さつきまで降つてゐた雨に。びつしより濡れた月が、強壯な考の滅亡を黙止する様に恐怖と悲痛な世界のさやかに見える大空にしつとに燃える龍の眼

の様にざら／＼と物凄く、妖魔の微笑の様に皮肉な世の常を物語つてゐる。

不圖思ひ出した様に井戸端近く鳴く虫の音もそゞろに悲しくきこえる。そのやさしい音も今宵は最早亡き妹の世を呪ふ悲しくも痛ましきす／＼泣きの聲と思へて、私の心は永久に永久に閉ざされて開く事の出來得ない悲痛な世界に吸ひこまれてしまつた。あゝ妹は「おねえちやん」と幻の様な聲で悲しい別れを告げて、一人しよんぼりと未知の世界に旅立つたのだ。永久に／＼。

小さなよろこび

第三學年東組 香川八重子

麥がのどかな田舎の野を一面に淺翠にする頃……。私はふとした事から、朝顔を作る事を思ひ付いた。そんな事には経験の無い私だけれども、きつと立派に作つてみせると思ひながら種を求めて来た。清らから砂を取つて来て、平たい植木鉢にその種を

蒔いた。さうして、「朝顔」と木の小切に記して立て、おいた。數日後、小さな芽が出た。それが、やがて、二葉となつた。やがて小さいけれども朝顔の葉の形になつた時のうれしさ。芽が五六本出た頃別の植木鉢に植え變へて竹を立て、好具合にした。木々は一齊に緑の衣を纏ひ、涼しい風がその葉をかすかにゆり動かす初夏が訪れた。そのさわやかな気分の中に、朝顔も竹にまきつきながらすく／＼と伸びた。私は毎日、日向水を三回位注いだ。きつく雨が降る時なんか、朝顔が如何かなりはしないとしらと心配した事もあつた。恐しい様な第一學期の試験をすみ吞氣に通學する頃になつた。或朝雨戸を繰る時、朝顔を見ると、うすべに色の花が緑色の葉かげにつくましく咲いてゐた。花はほんとに小さかつた。けれども「花が咲いた。」と思ふと、たまらなくうれしい。「母様、朝顔が咲いたの。」と大はしやぎしたのだつた。その後、花は日増に多く咲き出した。紅や、紫や、白や、ローズ色等、色を競ふて……。寝坊の私も、眼が覺めるとすぐ床を出て、咲いた花

を數へる様になつた。又夕方おふろから出て涼しい風をさつぱりしを浴衣に受けながら翌朝咲くらしい蕾を數へるのがどんなにたのしかつたであらう。朝は美しい花をまだ明けやらぬ頃に開いて私を待ち夕はつばみを以て私をたのしませて呉る朝顔に深い感謝を捧げたないではゐられない。さうしてそこに細いけれども明い幸福をもたらししてくれる。この、小さなよろこび。小さなたのしみ。によつて少しでもたのしくこの夏をすごし得た事を幸福に思はないではゐられない。この世に人は多い。その中に心の底から楽しみを持つ人々は何といふ幸福者だらう。と私は思ふ。私も、今、此の幸福な人々の中に入る事が出来たと思ふ時、一層うれしかつた。朝顔は、「あなたを一層喜ばせてあげよう。」と云つた様に日毎々々心地よくのびて行く。私はたび／＼祈る。萎れる日の一日も遅かれ……と。

花

第三學年東組 久野雪江

福壽草……祝ひませ／＼の目出度いお正月。

お床の間には例によつて型の如く、松竹梅の三幅對の掛物がかけられ、そばにはお飾り餅が飾つてある。

隅の方におかれてある平たい矩形で栗色の陶器の植木鉢の、枝ぶりのいゝ松の根元に、小さいふつくらとふくらんだ黄金色の頭をもたげてゐるこの花、富豪の老人夫婦がむつまじく隠居してゐる様だ。

梅……昔風の屋敷の奥深い庭園に只一本、その風流にまがりくねつた枝をのばして咲いてゐる。

私はこの花はさういふ静かな所で鶯に宿を貸したらいと思ふ。

桃……空には雲雀が高く囀つてゐる。それに呼び出される様に麥がつい／＼と伸びる。そして穗になる。子供達がピィ／＼と麥笛を吹く。日はだん／＼

永くなる。……桑摘に行く田舎の乙女が手拭を姉様かぶりに、裾をはしおつて籠を脊に褌が

けの姿が桃の花をみることに思はれる。櫻……「平氏にあらざれば人にあらず。」そんなにまでおごつた平氏も、あはれ春の夜の夢。屋島に戦つたある夕暮時、一艘の小舟が沖の方から漕ぎよ

せて來た。舟の中には柳の五衣に紅の袴をつけて袖笠をかついだ女官が、皆紅の扇に日を出したのをせがいはさみ、舟の艦頭に立つて「これを射よ」と源氏方をうちぬいてゐるのであつた。

與一の放つた一筋の鏑矢は、浦響くほどに鳴渡つて、首尾よく扇の要を射あてた。

扇はさつと吹き渡る春風に身をまかせ、ひらく／＼とまひながら波の上におちた。

輝く夕日にあか／＼と照された扇は、白波にゆられながら、どこへともなく連れ去られた。

戦に破れた平氏は皆悲壯な最後をこげてしまつた私は、櫻の花の美しく咲きほこつてゐる様は、平氏の一族が皆高位高官に昇り、榮耀榮華をさかめた時に……さつと吹きまく春風に名残りもなく散

り失せる様は、戦にやぶれて、一族の者がみない  
さぎよく悲壯な最後をさげて果てしまつた時に  
……よく似てゐると思ふ。

ポタン……濃艶な装ひをした令嬢の様だ。

コスモス……といへばいつもきまつて秋！さうして  
病弱の乙女！

日向葵……「昔或る國に年とつた王様がありました。  
王様は随分お年寄なのに、皇子様が一人もありま  
せん。それで王様は毎日、自分の位を誰に譲ら  
うかと心配していらつしやいました。  
けれど人々の噂によりますと、王様がまだお若い  
時に一人の美しいお姫様がお生れになりました。  
だのに其の年のクリスマスのお祭の夜、王様の國  
よりすつと南の方に棲んでゐる悪い魔法使ひのお  
婆さんのために、お姫様はさらはれておしまひに  
なりました。そして今では其の魔法使ひの家の庭  
の隅の方にある蜜柑の木の中に、封じこめられて  
いらつしやるといふことです。

王様に一人のまだ年若い忠義な家臣が居りました  
忠義な家臣はその話をきくと早速旅に出る用意を

調べ、只一人で南の國の方に向つて出發いたしま  
した。——お姫様を助け出す爲めに——

家臣は幾日も暑く、暑く、暑く、沙漠を馬で乗り廻りま  
した。そしてとうとう魔法使ひの棲家をさがしあ  
てました。魔法使ひは人々の噂の通り蜜柑の木の  
實の中に、お姫様を封じこめておりました。

魔法使ひと、忠義な家臣とは、随分ひどくたたか  
ひましたが、ついに家臣は魔法使ひのお婆さんを  
殺してしまひました。魔法使が殺された時、すべ  
ての魔法がとけてしまひました。

蜜柑の實の中からは美しいお姫様が出ていらつし  
やいました。家臣は大變よろこんで、早速お姫様  
を馬に乗せて、王様の所につれてかへりました。  
この花をみると、いつもこのお話の中に出てくる  
やうな美しいお姫様をたすける勇ましいナイトを  
聯想する。

蓮……極樂の蓮池の中にある。玉の様な薄紅色の花  
瓣、その真中の、好い匂ひをあたりに漂はず金色  
の葉、いかにも純潔で、高尚だ。  
白百合……緑色に繁つた草にまじつて、高くぼつか

りと咲いてゐる様——神々しい女神、そしてまじ  
り氣のない純真な心。

水仙……俗ばなれのした花。この花から受ける感じ  
——それは夕暮の街に人待ち顔に立つてゐる上品  
でやさしさうな、そしてどこそなく寂しさの漂つ  
てゐる支那の少女。

ダリヤ……真夏のあつい日の下に咲くこの花——  
それは丁度高慢ちきな女。

スズラン……私の足の止つた所、そこには美しい泉  
があつて、澄みきつた水がどん／＼湧き出てゐた。  
やがてそこに私位の乙女が眞白に模様のかかれた  
青磁のつぼをさげて来て、靜かに水を汲み取つた。  
泉のまはりには若草の線がピロロドの様美しく  
緻密に生えてゐた。その中に鈴蘭がたつた一本、  
美しい鈴の様な花をつけて夕風にゆられてゐる。  
風が強いと、リン／＼なりさうな鈴蘭の花！

乙女はふとその花をみつけると、つぼを若草の上  
においたまゝ急いで花の所にかけてよつて、その花  
を靜かに手折つて胸に強くだきしめながら泣き出  
した。

「おー！異郷にある私のたつた一人の妹よ。私はお  
前のゐる國には美しいこの花が澤山咲くときいて  
ゐる。  
なつかしい北海道よ！石狩の平野よ！  
妹よ。達者でゐておくれ。私はお前の幸福を、健  
康を、毎日祈つてゐます。」乙女はさめ／＼泣くの  
だつた。

野にある小路は果もなくどこまでも／＼續いてゐ  
た。

これは私が夢でみたお話なのだけれど、其の時み  
た鈴蘭の花が忘れられない。

### 秋のながめ

第三學年西組 榎田玲子

「さあ参りませう」と御祖母様の聲、御母様と三人で  
裏戸をあけ田圃道へ。三人はとぼ／＼と畦道を歩む。  
澄み切つた蒼空に巨人の様な山が聳えてゐる。行く  
手には只細い白い路が、うね／＼と、まがりやがて

黄色い稻の中に隠れてしまふ。實のつた稻は肌寒い秋風に穂をゆるがせてゐる。雛菊を初め、名も知らない小さな可愛い花が田圃道の兩側を一面に覆ひ、その間をカマキリコホロギ等が、はねまはる。嗚呼。秋だ。ほんとに秋だ。コバルト色の空といひ。黄色く實のつて重たげに首をかしげてゐる稻といひ。なよ／＼と搖ぐ可憐な淋しいコスモスといひ、濃みごりの莖葉を見下した高慢氣なダリアといひ、夕焼の様な色をした葉雞頭といひ、ノーブルな女郎花、桔梗といひ、それから……。それからあの藁屋の軒近く赤く色彩られた柿、何一つとして、秋を思はせないものはない。

間もなく、尾關山が眼前に見えて來た。他の山々が一面翠緑に蔽はれてゐるのに反し、之はまあり。朱に染まり黄金に輝き扱は、すきとほる様な褐色に。山路に差かかる。枝より離れたもみぢした木の葉は後から、じめ／＼した黒い地上に落ちて行く。かと思ふと、之からが、自分の世の中と言はぬ許の楓もある。だん／＼登つて行くと、一寸した石があつて、腰を下すに丁度よい。大分疲れてゐた私は早速憩

ふ。後から登つてゐらした御祖母様と御母様は芝生に坐して、黄に、赤に、褐色に紅葉しきつた葉を、みつめてゐられる。私は山上よりの眺望に目をうつす。

右には、見上る許の峰が聳えて、それが午後の日射をうけて、或ところは明るく、或ところは暗く、様々に色彩られてゐる。

山の麓の白壁の土藏も、秋の陽を照りがへしさながら寶石の様にキラ／＼閃いてゐる。

水が涸れて、大半あらはになつた河原を綱を肩にした舟人がぼつり／＼歩み、水面を舟が静かに滑べつて行く。曳船だらう。川中に突出した岩鼻のところは、黒ずんだ水が湛ひて、その向ふは又、普通の藍色、でも大分深さうな。

川の彼方は又、一面の黄金、その向ふの驛と、おぼしき邊、一條の白煙がたなびく。もう夕の支度か？今川岸を離れた渡し舟は、のんき氣に、ゆたり／＼と向ふ岸へ向ふ。夕陽を浴びた四、五人の人影をのせて……。

鳥屋

第三學年西組 岡田 滋子

いんこ

父さま母さまのお留守を見すまして、バツと巢を飛び出した小さい、いんこ。緑の森の小路を東へ／＼一目散に走つて行くと、眼界がバツと開かれて、白い／＼バラが初夏の眞赤な太陽の光線と、とけあつて、赤い屋根の家をかこんで居ました。トン／＼とドアを叩くと、青い服を着た小人が五人、黙つてお辭儀して、王女様の前につれて行きました。王女は金の冠をかぶり、ピンクのドレスを着て赤いホッペタを持つて居ました。そして小さな、いんこが大好きになり、歓迎會を開くと小人においひつけになりました。

五人の小人が銀のお盆に、それ／＼お美味しさうな御馳走を運んで來ました。藤色の衣をつけた五人のダンサーと黄色の着物を着た五人のコーラスガールとは、舞つたり唄つたりして、小さないんこを歓迎

します。

小さなお客様は、目を算盤の玉の様にバチクリ／＼させながら夢中で、御飯を食べてゐます。

つばめ

旅行家の紳士——燕尾服を着て、白いチョッキの胸つき出して、氣取つた身振りで舗道を歩いて居る。——シルクハットはこの國におき忘れたか。

ひばり

チカ／＼輝く空の色。美くしい日の光。光澤のよい緑の山。青々とした麥。刺戟の強い黄色い菜の花。白雲かどあやまたる大根の花。ベタ／＼に塗つた藁屋根の家。畔に腰かけて、煙草を吸つてゐる爺の太陽に反射された額。

それらを背景に音樂會を始めてゐるお前達家族——お前達の畫工は無名の洋畫家だ

カナリヤ

いつの晩だつたつけ——唄を忘れて、象牙の舟にせられて、月夜の海へ流されたのは。

ふくろ

黒い／＼森は小鳥共の喜びと、悲しみを飲んで眠

つて居る。星一つ無い藍色の空には、磨ぎすました刃の様な冷やかな三ヶ月が物凄く何物かを凝視してゐる。突然木々の間から懐中電燈の様な大きな目が二つ爛々と耀き始めた。

九 官鳥

お前は「ホーホケキョ」「お竹さん」「お早やう」「ハト  
ホツポト鳴く鳥は」……等何んでもお上手だ。  
私がつて教へてやるから覚えてごらん。  
「バス。トス。スマツシング。」「シケンコマツタ〜」。

祭の夜

第三學年西組 若松美築子

「ドン〜、ドンド〜」

村の子供達のた〜く祭の太鼓の音が澄んだ秋の夜の空気をふるはせて、引切りなしに響いて来る。氏神様にお参りするらしい下駄の音が、時々明るい笑聲に入り交つて門の前を過ぎて行く。

「それからどうなつたの、お姫様可愛想ね、ねお姉ち

やん、お話してちやうだいよ。」と先刻まで一生懸命私のひざでねだつて居た妹も、優しい眠りの神に誘はれたか、上臉と下臉とが段々仲良くなつたかと思ふと、それも暫くで遂々夢の國に入つてしまつた。楽しい花園でも散歩して居るのか、時々口元に愛らしいほゝろみが浮ぶ。

「ドレ眠氣覺しに蓄音器でも、出しませうかね。」

お母様がお立ちになると、之もうたゝ寝をして居た弟がバツと眼を開いた。

「母様僕が取つて来る。」早速氣を利かせてレコードを取りに入る。

「オヤ〜、明日雨にならなければ良いが。」母様のじやうだんに眠た相にして居た皆が急に元氣付いて笑ひ出す。

「潤ちやん〜、起きなけりや駄目よ。蓄音器ですつて。」

「ドーン〜、〜」

神秘的な太鼓の音と共に、平和な村の人々は、怪しい夜の眠りへと刻々誘はれて行く。

旅館の夜

第三學年西組 佐伯幸

「ではお先に失禮致します。お休み遊ばせ。」と私は南川のをち様をば様に言つてから、先刻宿の女中の敷いてくれた赤い緞子の掛蒲團の掛けてあるふつくらとしたお蒲團の中に身を横へた。ひんやりとしたシーツの冷たさがほてつた手足に心地よい。

此所は此の一夏を楽しく過した會寧の地を數十哩離れた清津といふ町で、私は明日内地に向つて出發する台南丸を待つ爲に雞林館といふ旅館にとまつてゐるのである。

こんな寂しい町の割合に人の出入の多い此の旅館になかなか賑しくバタ〜と廊下を走る草履の音がやかましい。

「コラ潤ちやん。起きないと鼻をつまむぞ。」

弟に鼻をつままれて、ぐすりながら、やうやく起き上つて妹も、蓄音器と聞いてニッコリと笑ふ。

「何からしませうか？」

「義太夫は無いのか？」とお祖父様。

「つまらないよ。義太夫なんか、僕は軍艦マーチだ。」弟の反對。妹は横から「あたしは花ちやんの繪本が良いわ。」

「そんなに一度に出来ませんよ、潤ちやんのから先にしませうね。」と言はれて妹は得意満面。

「どうやらお祭らしくなつて来た。」ニコ〜顔のお父様がおつしやる。

音も無く静かに更けて行く秋の夜！何所やらで一人残した様な秋虫の淋しい鳴き聲が耳に響く。空には丁度十五夜の月が晃々と下界を隈なく照らして居る。「ドーン〜」太鼓の音は相變らず永く餘音を引いて静かな村の空気をふるはせる。「お、良いお月様」

邊りの沈黙を格子の音に破つてカラコロと、お隣の小母様が出ていらつしやつた。冷たい秋の風が囁く様に袂の袂をそつともて遊んで行く。

八月の末とは言つてもまだ眞夏。それなのに障子は  
びつたりとしめ切り、その上お蒲團が重く厚いので  
随分暑い。

枕元の婦人雑誌を手に取る。明日はどうせお寝坊が  
出来ると思つてさつと開かれた頁にゆつくりと瞳を  
注ぐ。

「……女工の中にも相當の家に生れながら工場に出  
てゐる人も澤山あります。ですから、女工は人間に  
あらず等と考へる人のある事は、私共として本當に  
歎かましい事でありませぬ。私共は……」今頃お母様  
は何をしていらつしやるだらう。きつと可愛い、質  
をだつこして、あのベーチカのある中で私の事  
を御心配なさりながら、けれど晝間のお疲れに静か  
に眠つていらつしやるだらう。信彦は姉ちゃんを寝  
たいつて泣きはしないかしら。……すーつと目  
頭から溢れ出た涙の頬を傳つて流れるのにはつと我  
に歸つた。眼は一心に本を見つめてゐるのに心は遠  
く遙かに第二學期の勉強をする爲に、お別れして來  
た父母兄弟の上に走つてゐる。  
あゝあの二十幾日かの間は樂しかった。誰も彼も親

切に大事にして下さつた。父のお手助けも少々は出  
來た。私の顔も忘れてゐた幼い質も姉ちゃんくそ  
廻らぬ口で言つて慕つてくれた。次から次へと樂し  
かつたお休みの間の事が思ひ出され會寧驛で私を見  
送つて下さつた母の御顔が目先にちらつく。と又し  
ても眼は霞のかゝつた様にぼんやりとかすむ。

「何といふ馬鹿な事か。」と私は私をかう叱り付けた。  
別に皆とお別れして來た事が左程悲しくもないのに  
涙に眼を濡す自分の愚さにつくつく愛想が盡きたの  
だ。

向ふを見ると南川さんの女中さんが、太い腕をにゅ  
ーつと出していざたなく眠りこけてゐる。その顔は  
何の屈託もなく安らかである。私はつくつくそれを  
羨ましく感じた。

眠らうと思つて眼を閉じたがどうしても眠れない。  
下の帳場で大時計がぼん／＼と十二時を打つた。

仕方なしに又本に眼を注ぐ。何分かつた。けれど  
眼は依然として同じ字を見つめてゐる。

又眼をつぶつた。下ではひつきりなしに下駄の音と  
話聲がする。ブーツと警笛を鳴らして一台の自動車

が門前に止つた。又お客が着いたらしい。急に廊下  
の草履の音が忙しくなる。寢ようとおせればあせる  
程寢られない。暑いせいとおふとんをのけると寒  
い。その上お腹がちくちくと痛み出した。もう一時  
も過ぎた。下のやかましまも大分收つた。眞夜の静  
けさに入るのも、もうすぐらしい。

いつたいどうしたらよいのだらう。思はず「お母様。」  
と叫びたい氣持になる。

夜はしん／＼と更けて行く。その静けさを破るもの  
は折々聞えて來る犬の遠吠えのみ……。眼は私の心  
があせればあせる程冴えまざる。あゝ何時になつた  
ら眠られる事か？

## 野を行く

第三學年中組 植木喜代子

「サクサク」私達の歩む草履の音ばかりが耳につく。  
凡て物が焰の様な強い殘照を浴びて静かに横はつて  
ゐる中に黄に紅にもみぢした木の葉が秋風にヒラ

／＼舞つてゐたり、あちらこちらの白壁が眞赤に映え  
てゐたり、黒い瓦が銀の鱗の様に、キラ／＼輝いて  
ゐたりして、黄昏の野の周りを美しく彩つてゐる。  
灰色をした一群の雲は北へ北へと流れる。ガア／＼  
とからすが二三羽ねぐらを求めて鳴いて通つた後は  
元の静寂があたりを襲うた。

やがて名殘惜しさうに夕映も薄れてゆき、あたりは  
だん／＼蒼すんで來た。足もとに落ちてゐる病葉は  
自分の果敢ないさだめに頭を垂れてゐるのか、コン  
とも音を立てず静かに淋しくうすくまつてゐる。今  
まさに暮れんとする野は黄昏の繁雜な巷を知らぬげ

に蒼黒い淋しさを見せて静寂を保つてゐるのだ。  
冷たい様なしみる様な秋風が落葉をふんでゐる私達  
の間を吹きすぎた。

「寒いね。」「え、寒いね。」だまつてゐた私達は初め  
てかう口を利いて、襟をかき合せる様にした。黙し  
つゞけたまゝ、廣い黄昏の野を歩む二人の間に一脈の  
冷たい空氣が流れる。

お君さんはそれに氣がついてか、時々間を緩和す  
る様に一言、二言話しかけたが、二人して思ひ／＼

違つた事を胸にしてゐる私達の話はとぎれ勝ちだつた。時々思ひ出した様に鳴く虫の音も何だか胸にしつくりと合はず、いら／＼するばかりだつた。冷気は私達の全身を襲つて魂の中まで喰ひ入つた。指さきや足の方が冷えてゆく様に思はれる。そして目には淡い長い二つの影が冷たく映るばかり。「もう歸らう。」私はこんな氣まづい思ひをするのがいやなばかりでなく、ひな育ちの何も知らぬこの人に氣まづい空氣なんか味はせるのが氣の毒だつたから。

かう云つた時お君さんの瞳が名残惜しさうにあたり配られ「え。」と返事はしたけど、私はその瞳に不足らしい色が動いてゐるのを見逃さなかつた。それでだまつて歩きつゞけながらこの人を見るのに、そのちつともわだかまりのなささうな様子は私に「お君さん何にも氣がつかないんか知ら。」こんな疑ひを起させる程だつた。

リン、リン／＼。小さな音楽師は私の心を和けるべく努めたが思ふまいとしてさつきの不快な出来事が胸に浮ぶ。そのおかしい程小さな出来事が妙に

頭にこびりついてゐて忘れられない。折角の私の厚意を無にして怒つた様にフイと姉さんの方に行つてしまつたこと、皆で大きな聲して笑つてゐた時のこと。こんな一々の動作にいろ／＼なことを思ふ。あの人は皆に私のことを話して笑つてたんぢやあないか知ら。次へ／＼といろんな事が胸に浮ぶ。又あの人は小さい時、眞赤な緒のついた薄つべらな草履をはいてゐた。ひからびたそして赤銅の様に赤くやけた足。赤いちぢれた髪の毛を二つに分けて布で無造作にくびりつけたその髪…………。

幼い頃の思ひ出はなつかしい。よくこの人と二人で、山へ登つて栗を拾つたものだ。そしてお君さんが薄つべらな草履であのいが／＼したのをサク／＼とふんで中から栗を出して呉れた時、骨の出た足の所々ひつかいて白くなつた様な所の所から血がにじみ出た時のこと。よくお祭などに髪を高く結つて平生の血色のよくない蒼黒い顔に紅などはいたお君さんの顔…………。思ひは遠くなつかしい昔に走つた。がふとつまづいた石に空想は破られてしまつた。がうした幼ない頃の思ひ出は不思議に冷たいこたは

つた心に温かみをあたへた。

お君さんは何のわだかまりをも持たない昔のまゝの純真そのもの、様な人なんだ。

神経過敏な世とは云へ余りにとがりすぎた自分に對していや味を感じるばかりでなく、淡い悔いに胸をいためた。

もうすつかり日は落ちて、あたりは見分けもつかぬ程の夕ぐれになつてゐた。氣がついた様にみたお君さんの顔は薄暗い中に蒼白く浮いてみえる。

夫をみると急に氣の毒な様な氣がした。「どうしたの。」こんな優しい言葉をかけずにはおられなかつた。「もうもしやあせんの。そいでもあんたがあんまりだまつとるもんぢやけ、どうぞしたんか思ふて」今でもはつきりと残つてゐるこの言葉！さびのある低い聲が、今なほ耳もとで聞える様な氣がする。その時、こんな優しい純な心の表れた言葉を聞いた時、一寸でもこの人を憎んだ自分の心が悔いられて、お君さんの胸にすがつて、大聲で泣いてわびたい様な氣がした。

「もうすつかり日が暮れたのね、寒くない」「うんね、

あんたは。」

こんな言葉の中に二人の間の空氣は自然と和いだ「もう歸りませうね。」かう云つて落葉の道を肩をならべて引きかへした。木の葉は風もないにヒラ／＼と落ちて、周囲の病葉はおど／＼した様にかすかにおの／＼いてゐる。

## お山の秋

第三學年中組 關 末 子

木魚の音にまじつて、お經を讀む聲がとぎれとぎれに、古びた山のお寺からもれて来る。その間には、カーンカーンと何か叩く音がして、又お經が續く。それは、玻璃の様に澄んだ秋の朝の空氣の中に、冷たく響いた。

時には、バチバチとゴマを焚く音もした。私は、よく、この、ゴマを焚いておいのりをするのを見に行つた。

朝と、お晝と、夕方と、夜のおつとめの時は黒い衣

を着。其の他の時は、爺やと一所に水を汲んだり、お庭を掃いたりしてゐる和尚さんについてギシギシと音のする廊下を素足のまゝ踏んで、佛様のまつ、てある所へ入ると、其處には、線香の細いけむりが立のぼつてゐた。厚い座布團に坐る和尚さんの後に、私は、冷い黒いアスファルトの上にそのまゝ坐つた。キチンと膝も崩さないで、お経を讀み、ゴマを焚く和尚さんの姿は、如何にも世捨人に似つかはしい、静かな、そして寂しいものだつた。

ゴマは赤い火の中で、パチパチと、はね上つた。

私は、静かな、落ついた、そしてすべての事を忘れて終つた様な清い気分になつて、ちーつとさうなだれてゐるのだつた。

私は何故か、このおいのりが大好きだつた。

「今日は、ゴマを焚いておいのりします。」と、和尚さんが仰云ると、私は喜んで、ギシギシと音を立てる長い廊下を歩いた。

お寺のお庭には、白萩がみだれて咲いてゐた。

私は、このお寺のたそがれ時も好きだつた。

和尚さんは、日の沈む頃鐘を撞いた。

お寺に變つた事がある事として、お山を登つて來ると云ふ事だつた。早鐘が鳴らなければ、お寺の變事が下の世界にわからない程、そのお寺は浮世と離れてゐた。

鐘を撞き終へる頃には、あたりはすつかりたそがれて、下の方には、あちらこちらにぼつぼつと、うるんだ瞳の様に、赤い灯がつき始めた。

和尚さんの去つた後に、鐘撞堂の傍に立つて、私は冷い黄昏の秋風に吹かれながら、ちーつとこの夢の様な世界に、見入つてゐた。

秋も十月、色づき始めた木の葉が頭の上を覆つてゐる細い路を歩んで、お寺の裏に行くとき、其處には大きい池があつた。池の真中に小さい島があつて、松の木が一二本緑色に澄んで風の吹く度にサラサラと小波を立てる池の面に、影をうつしたゐた。

その島の真中には、何かを祭つてある小さいほこらがあつて、岸から、朽ちた小さい木の橋が渡してあつた。

私は、今にも落ちさうなその橋を渡つて、このほこらの前に坐つて、めつきり弱くなつた秋の日を浴び

鐘樓は、本堂から少し離れた所にあつて、一度火事で焼けて建て直したと云ふものだけど、随分古びて柱なども黒く、虫の喰つた跡さへもあつた。そして一度は火の中に包まれてた大きいつりがねが昔からのすべての事は皆知つてゐると云ふ様に、だまつて冷く下つてゐた。これも古びた撞木か。先のみ白くすりへらされて、鐘ならんで下つてゐた。和尚さんが、鐘を撞くと、ごーんと長い長い餘音を引いて、村里の方へ響いた。

一つき、又一つき、次第にたそがれて行くお山の夕べに、白萩のみがほの白くゆれてゐる。

私も、よく、撞かせて貰つたが、力の弱い私には、和尚さん程強くは響かなかつた。手にあるかぎりの力をこめて、重い撞木で撞くと、ごーんと弱い音がして、もはや入日の影は雲にのみ残つて、野も山も島も、うすすみを流した様な、そしてその中を白く川の流れてゐる下の世界へと消えて行つた。

鐘の音が未だ消えない時、次を撞いてはいけないと、和尚さんは何度も何度も仰云つた。

それは、「早鐘」と云つて、その鐘が鳴ると村の人は、

ながら色々の事を考へたり、見たりした。

時には、その離れ島の端に行つて、緑色の水の中に黒や赤や白い背を見せて泳いでゐる大きな鯉や、じゆんさいや、池に動いてゐる白い雲を見た。

池の向ふ岸には、水とすれすれに、つりがね草や、女郎草が咲いてゐて、廣いすくきの原となつてゐた。それはすつとすつと向ふ迄續いてゐて、その果は、

ふもこへ通ふ小さい路となつてゐた。

私は、又、ほこらに背をもたせかけて、足を投げ出し、風の行方を見た。風が吹くと、そのすくきは順々に吹きわけられて風の通つた路が出来た。

こんなにして、秋風は何處へとも無く去つて行くのだつた。

この、すくきの中をわけて來る年取つた郵便配達を、よく、私はその島で待つてゐた。

人の脊よりも高いすくきの中から、帽子が見え、靴が見え、やがて、黒い地下足袋を穿いた年取つた姿が出て來るのだつたが、池のほとりの小さい路に來る迄は、その胸から上位迄しか見えなかつた。

「嬢さん。ホラ。」池のほとりの小さい路を廻つて、



橋を渡つて、廣島からのおたよりや、途中で手折つたのだと云つて、濃紫の桔梗や、うす紫の野菊、うすいもく色の山撫子等を置いて、その細い路をお寺の方へと木の間にかくれて行く姿を、私はちつと見送つてゐた。

又、私は度々、お山を奥の方迄分け人つた。

細い細い路の兩側には、山萩が咲き亂れて、黒い土の上にホロホロとこはれた。岩蔭などには、濃い色の桔梗や女郎花が咲いてゐて、その路は、何處迄行つたらつぎるのかと思ふほど、細く續いてゐた。私は、この路を行つたり來たりした。自分で自分の足音に耳を澄まし、木の葉の囁く音に耳を澄まし、あても無く歩き廻つた。晝なのに寂しい寂しい聲で虫が鳴いてゐた。私は、そのまゝ、地の上にしやがんで泣きたい様な氣分にさへなつた。

黄色い稻の波の中に、白い路の細く續く下の村からは、秋祭の、笛や太鼓がかすかに聞えた。

秋も十一月始めになれば、最早、お山は冬の様に寒くなつた。池のほとりの澤山の楓は、眞紅に燃えてそのかけを

緑色の水にうつした。その水を漂つてゐる葉もあつた。

お庭の楓も紅葉した。

朝起きて、和尚さんや爺やと、長い竹箒で、お庭を赤くいろどつてゐるもみぢや、櫻の落葉を掃き集めれば、葉と葉とすれ合つて寂しい音がして、秋も限りかと思はれた。

白いけむりが立のぼつて、煙の中に「お、暖い。」と手をかざしてゐる和尚さんが見え、爺やが見え、デ、デ、露にぬれてゐる葉が、時々音をたてる。金色の扇の様な銀杏の葉も、舞うて落ちた。

落葉の路を行けば、かさかさ音がして、その音のあまりにもたより無さに、思はず立とまつて耳をかたむけたりした。

赤々と燃えるあろりの廻りに集つて、爺やの古いお話に一生懸命になるのも、朝な朝なもみぢを焚く頃の、星月夜とも云ひたい様な夜だつた。外には強い風が吹いてビュウビュウと叫ぶうなりさへも聞えた。

あの鐘撞堂が火に包まれた時、鐘が、誰も撞かない

所感

第三學年中組 二木 澄江

のにひさりでに鳴つた。「昔を思ひ出す様に低く語る爺やの話聞きながら、ふと、ガラス越しに外を見ると、その鐘撞堂が黒く立つてゐた。こんな日が續いて、お山の秋も寂しく去つてゆくのだつた。

今年も、お山の秋は深くなつたであらう。

秋祭の太鼓が響き、お庭の楓も池のほとりの楓も、もみぢしたであらう。

お山の秋！と思へば、ちきには、鐘撞堂と、和尚さんと、爺や、と年取つた郵便配達と、細い路とが幻の様に私の胸に浮かぶ、冴えた朝、バチバチと云つてゐたゴマの音、やるせない思ひをこめて撞いてゐた鐘の音。限りなく思ひ出される。

お山の秋よ！

星の冴えた夜、なつかしいものとして、手箱の奥深く秘めてゐる紅葉や銀杏の葉を、取出して、お山の秋を思ひ出してゐる子のある事を忘れないで……  
—ある年のF寺の秋—

「近頃の娘は体が大きくなつて、引込思案でなく、活潑になつた。」と云ふ様な記事を、よくいろんな書物で見ると、

私はこれを見て少々の誇りを感じるけど、

「どうも近頃の娘は慎みがなくてお轉婆で、生意氣で、女らしさが缺けて來た。」と云ふ事も亦度々耳にする。

この時私は、自分もこの「近頃の娘」であると思ふと、云ひ様のない恥づかしさを感じる。

体が大きく、そして快活な娘。でもお轉婆で生意氣な娘。

「なまじつか學問なんかするから女が生意氣になるのだ。」一途にかう云ふ人がある。けれど私は決してそんなに考へたくない。學問したからと云つて何も偉さう振らなくてもよい。學問をすればする程謙遜な態度をさらなくては、ほんたうに學問をしたとは

思へない。薄つべらな表面許りの學問をするからいけないのだと思ふ。

立派な學問をした人には決して、生意氣な女は出ない。近頃頻りにモダンガールと云ふ言葉が流行する。私の様な小さい、世間しらすの者にも、モダンガールと云ふ言葉は度々聞かされる。そしてモダンガールと云ふ言葉から受ける感じ、それは決してあまり良いものではない。

何處へでも派手な風をして出しやばる女。そして少しも優しみの無い女。自分さへ好ければ、と云ふ様な感じのする女。ふわ／＼して落付の無い女。

これが果して眞のモダンガールだらうか？  
今、女と云ふあらゆる女が、皆このモダンガールになつたら、果して日本はどんなになるだらう。今まで随分多くの立派な人を出したのは皆誰の力かと云ふに、皆女がその陰で非常に働いてゐるのだ。大和魂のある立派な武士も、皆女が、母が、つくつたと云つてもよい。

それを今度は今頃のモダンガールと云はれる女が全部母となつて、そのふわ／＼した氣持で、そして表

面許りの薄つべらな學問をした頭で育てた子が、果して楠公父子や、乃木大將や、まだ／＼多くの立派な人々の様になれるかどうか。

だん／＼と世の中が進んで、世界は戦争はしなくても、一生懸命に生存競争をしてゐる今、私達はうか／＼と夢を見てゐる時ではないと思ふ。

現代的な女性と云ふ言葉を、もつ／＼有爲に大切な意味に解したい。唯うはつらだけの事ではなくすつ／＼奥深く考へて……

眞のモダンガールは決してふわ／＼したものでなからうと思ふ。もつ／＼とつかりした、落付のある。そして根據ある學問によつて得た立派な思慮のある女でなければならぬ。でも昔風の、引込思案の女であつてもつまらない。

十分の落付と、出來得る限りの慎みとを、平常時は持つて、そしていざと云ふ場合には深い思慮の下に何でも決行する進取的な人。

こんなのが眞の現代的な女性ではあるまいか。

私達は「お轉婆娘」と云はれて恥づかしい。その氣持があるならば、それを單に「恥づかしい。」で放つ

## 野を行く

第三學年中組 保澤佐喜子

ておかないで、更に進んで「今にきつと立派な女になつてお轉婆娘と云つた人の鼻柱を挫いてやる。」と云ふ氣になつてすん／＼向上して行きたいものである。

それには修養が第一である。私達の様な、修養するに一番よい時季は又と來ない。そして又、今一歩ふみはづせば何處まで落ちて行くか、はかり知る事が出來ない。

この危険な、しかも最も修養すべき時を、無意味に過ぎないで、相當深く考へて、立派な道へ進んで行つたら私達はどんなに望ましい女になるだらう。

「あ、近頃の娘はなか／＼活潑で、一寸見るとお轉婆の様だがなか／＼しつかりした所がある。」と云はれるのも、

「日本も、女がこんなにつまらなくなつては情ないものだ。」と云はれるのも、皆私等の考へ一つにあるのだ。

野には女郎花や溝萩や秋の草花が黒い土の膚に芽萱の青氈を着せた上を刺繡してゐて、土の匂と茅萱の生臭いのが鼻をついた。夕暮になると野を通ふ一條の白路を私はよく一人で歩いた。

人、何處より來り、何處にか去る。草原を横切つて一人の人間が歩いた。また人間の一人が同じところを横切つた。更に第三人目第四人目……こんな風にして路は生れたのであらう。

その意味で路は原始的な匂があり、人間同志の親しさと思はせる。だから凄いや夜闇の淋しい一條道でさへも、其の淋しさ凄さには、人間が同じ人間を懐かしむ情感のあふれた氣持がありはしないか。

路は野の大地の微動をあてもなく流れて林に入る。月の青ざめた神秘の光が、何處でか闇を震はし、細い樺の幹を斑らに青白く彩つて、其の纏れあつた影を濕つぽい草の上に縦横に引張つた。たつた一人で

人を離れて森の中を歩くと、自分の体が濃い沈静なもので包まれてゐる様で、柔かい底に冷めたの含まれた空気が顔にひたつと纏ひついて、足を止めて目をつぶつて何かの音を耳で聞かうと思ふ様な沁々とした心持になる。そして森は單純であるが、力強い嚴やかな奥深い感じを持つて私を冥想に導く。

人間—生命—いかに生くべきか—未來—そして死—永遠—絶對—神……。私はいつまでも思ひ續ける。しかし其の得た終結は皆んな纏りのないものばかりである。考へても、解決する事が出来ずに頭は亂れて麻の如く、思ふ存分狂ひ廻りたい衝物にかられて私はむちやくちやに木立の間をさまよひ續ける。月の神秘的な光の下に凍る様になつて立つてゐる樹がちつと臭をひそめてゐる。其の樹の呼吸が針の様に尖つてゐる私の神経に傳はつて來る様に思はれる。かうした時、しめやかに思はれるのは故郷に病を養ふ友の三木さんの事だ。二人の幼ない頃は大勢の子供達と一緒に故郷の野に遊ぶ事によつて過された。野は人間化された自然である。人間の氣息に洗禮された自然である。従つて山や森等と比べると非常に

親しみ易く、底の知れぬといふ様な秘密を藏する事がなく、總てを開放して、潑刺とした生氣をもつて子供達を抱擁してくれる。

夕日を受けてギンギラギ。

村の千代さんが嫁に行く。

馬に乗つて——。

シヤラシヤラシヤン／＼鈴の音……。

此の歌が謡はれ、そして踊られてゆく時、キラ／＼赤い／＼血の様な益の様な大きな光の太陽に眞紅に顔を照されながら、子供達は野に遊んだ。唄の調子はピツタリと自然の景色と調和して、ゾツとする様な沈み行く夕陽の姿を奏で出してゐた。そこには敬虔なそして幸福な希望にあふれた子供等の姿が甘い空氣の中にとけこんで行つた。

さうした遊びが一日／＼と續けられていつしか幼ない頃を送り、學校は異れど同じ廣島の地にS野に散索する二人となつた。

思へば、去年の秋の散索が三木さんとのS野への最後であつた。其の頃のS野は一体に哀調がこもつて凡てが心細く果敢なく、冷やかな地の底に吸ひこま

れてしまふ様であつた。その中でも音と光とがとりわけて其の心を表すものだ。強い事をいふ三木さんの口から「淋しい。」といふ言葉の洩れたのもあの時だつた。二人は足のむくまに何時までも歩み續けた。風の度に揺れて觸れ合ふ薄の間からは、殆ど聞きとれぬほど弱いしかし言はれぬ情趣を含んだ響が傳へられた。河風に吹かれる葦の戦ぎとも、時雨にうたれる木の葉の嘯きとも違つて、それは暗い夜見えざる影に驚いて時から飛びたつ小鳥の羽音にもたとへよう。生きた耳が聞きわけるといふよりも、衰へた肉身にひそむ疲れた魂ばかりが直覺し得る聲ならざる聲である。そうして尾花のほのかな香が漂つて來る様な色どそつくりの、眠いだるい滲み入る様な日向に身体をさらして歩いてゐると、日の光が如何にも鈍く震へながら、だん／＼頭の上を廻つて行くのが感じられるのであつた。

あゝ、思へば、あの時あの日が、三木さんとの最後であつた。彼女が神を、絶對の世界を、熱情を秘めた哀愁のうちに私の胸に訴へる時、彼女の沈んで行く聲は寢静まつた世界に響く唯一の旋律として私の

心の奥殿、深い印象となつて喰ひ入つたのであつた。其の信仰は随分熱を含んだが彼女は遂に狂つた——。あゝ、我が一人の友は失はれた。そこには原始の荒野が寂然として現はれ、全くの孤獨を自分の生命の上に見出した私には、かなり深刻に社會の事が考へられた。そして人を求める心が本能的に作用したが、人々の心に植ゑつけられた根強い先入觀念から、意味の無い私の行爲の總べてが、「反抗する。生意氣だ。」との定評をうける。それが私には死よりも淋しかつた。悲しかつた。苦しかつた。そして自己の修養の足りなさが口惜まれる。かくて私の心は次第に絶望の形をとり初めた。

——光りは無いか？ 光りは無いか。——と幾度私は叫んだであらう。けれどもそれはいつも、「光りは最早地上には與へられぬのか——。」といふ絶望の嘆息となつた。花も鳥も私にとつては空な幻影に過ぎなかつた。冷い夜風に吹かれながら野を歩みつゝ、幾度もなく私は溜息をついた。そしてこんな皮肉を言つた。

「我々人間に何の永遠性があるだらう。力も愛もた

流星の様に消えて行くのだ……。」と。 終り

### 四季の思ひ出

第三學年南組 兒玉秋子

花の春、思ひ出しても氣が浮き立つ程である。四方の山々は桃色、黄色、緑色と様々な美しい色彩られてゐる。冷たい空氣から逃れ出た生物は春風かほる春の日に歡喜の色を漂はせてゐる。小鳥歌ふ花の下を、お人形の様に美しく着飾つた舞子の一群二群喜々として戯れ行過ぎるも趣あるものである。身輕な洋服の子供達が辨當を木の根本に集め置き「目かくし鬼ごっこ」してゐるも又可愛らしいものである。お酒に酔ふた人の千鳥足も何となく春の日を思はせる。桃の花咲く渡し場を舟が音なく滑つて行き、若草萌える廣野を里の童が牛追ひ行くも長閑である。總てが浮き立つ春の日も漸く暮れて朧月夜もなつかしい。紅葉の秋、秋は虫の世界である。

秋の夜長にふと眼を覺ました時、庭の叢で「キリキリ〜」と果ては闇へ消え入る様に「きりこ」の鳴くのは趣深くも淋しいものである。又夜汽車等にて眼を覺ました折「きりこ」の聲を聞くのは一入淋しいものである。三篠の土手の夜道は虫の音樂會である。夜露の御馳走を食べながら、有る限りの聲で「リン〜、チンチロリン、リン〜」と短い命も忘れて歌ひ續けてゐる。

私は淋しい秋が好きである。「キリ〜〜」と「きりこ」鳴く秋に父も母も歸らぬ旅に旅立つたのです。思ひ出せば「きりこ」鳴く夜がなつかしい。

海へ！ 山へ！ 楽しい夏休みも思ひ出の一つである。 我は海の子白波の騒ぐ磯邊で貝拾ひ

ポートに乗つたり、西瓜取り

楽しい夢は走馬燈の様に次々と頭に浮いて来る。青葉の山、緑の天地涼しい〜別天地である。木蔭にて讀書、悪戯小僧のトンボ釣り蟬取りも日課の一つとなる。

「チ〜〜〜」あ、五月蠅〜晝寝も出来ぬ〜

とお祖母さん達の不満も珍らしくない。夜は螢狩り夕涼み等楽しいことばかり、川に落ちる火影も涼しさうである。花火線香、燈籠のお盆も近づいて来る。

陰氣な冬が又のそ〜とやって来る。

お祖母さん達は「やれ〜又年が寄る。」

商人は「忙しい〜」

子供は「嬉しい〜早く来い〜」

様々な氣持で待つてゐるお正月も来る。お年始廻り、お雑煮、羽根の音、手毬の音、猿廻しの太鼓の音も頭から去らない。

火燧を取圍んでかるたの聲聞える夜も雪降り積り木枯吹き荒む中で雪だるま雪うさぎ作るも、總べて楽しい〜思ひ出である。

### 光の夜

第三學年南組 今堀恭子

しづくが垂ればせぬかと思はれる程、ゆたかに、そ

していきいきと、茂りに茂つた青葉が、だん〜と夜の薄黒い水彩繪具でぼかしにそめられて行つて、若やかな緑はいつしか軽い凄さを加へた暗綠色に成つてしまつた。そして、さもうらやましげにこれもこれもよろこびにか〜やく嚴島の方へ手を差しのべて居る。江波の山をのぼり切つて、ふもとを見渡せば、見ゆる限りの木々は皆同じ行動を取つて居る。大正十五年五月二十七日午後八時。私達は幾重かの波をへだて、皇太子殿下のまします宮島を望みたいために江波の山に登つた。五月二十五日の、光か〜やく午後三時、思つた〜でも感激に胸をどぎ〜れてしまふ程、神々しい一分間を、私達はあたへられた。皇太子殿下の氣高い、しかしおしたはしい……かう言つては大變恐れ多いけれど「殿下だ」と言ふ感じを向ふに、たてまつ〜てしまふ様な、又美しいおんまなざしを拜するため一分間をいだ〜く事が出来た。

その時は何とも考へる事が出来なかつたけれど君が代を歌ひ終つてはりつめた心をや〜ゆるめた時、殿下が千代八千代もまさきくぬませと祈ると同じに東

の空を望みつゝ光にみちたあの一分を永久に私の胸にをさめて、私の歩む道をてらす光といたします事を、おゆるし下さいと心に叫んだのであつた。けれど、私の心の底に、忍んでゐた。欲望は、その一分をせめて二分にとねだつて、なだめてもすかしても一向きゝ入れない。どうくゝこちらで折れてしまつて浅野圖書館、比治山などへみあごをしたふて行つたけれど、どうくゝふたゝび氣高い皇太子殿下から擧手の禮をたまはる事はかなへられなかつた。すると、ねだりやさん、泣きねいりするかと思へば、なか／＼どうして……ちやあ、せめてみ船の影だけでも拜ませて下さい、さうすればお心にしがひます、なんて、飛んでもない事を言ひ出した。私が江波へ行つたのはつまり、この小さい欲の、お望みをかなへてさし上げるためである。

人が山に多く上る様になつて來ると、それにつれて、嚴島は次第にかゞやき出した。山の上暗く、海の上はもつとく／＼暗い。瀬戸内海にちりばふ島々とならんで、それよりやく大きい丈の高い軍艦が薄暗の中にも、くつきりと浮んでゐる。靜かにく／＼浮んでゐる。

る。

「あれが長門だ、皇太子殿下のいらつしやる……それ、そこに見える……」さう、長門、と思ふと、いつか呉へ伊勢を見に行つた時、黒いけむりを西になびかせて通つてゐたのを、沖合はるかに望んだ時の長門にちがひない。軍艦はちがひないでよいけれど、あの時の長門と、この時の長門とでは長門をかざるべき言葉がちがふのはどうにも仕方がない。あの時は、「帝國一の長門」であつたが今は「皇太子殿下の御召艦の長門」だもの。

くらい海に一点の明るい光が浮ぶ。いつか、波にゆらり／＼とすべてをまかせつゝ、流れる／＼。ゆれる、又ゆれる。燈籠だ、燈籠だ——すると火は速力をゆるめて、つい足元の海をよこに通つてしまふ。「奉迎」の字が宮島の明るい火の中に、一層ひかりかゞやいてゐる。山の上から光が生れて、さつと空にまひり、山にも海にもあかくはえる。と思ふと一つの直線が出来る。他の火もまた直線をつくる。そして、する／＼とひとりで、くらいやみにすひ込れてしまつた。花火、花火、音のしない花火、けれ

ごきれいな花火。山の王女が、まつかなもすそをつけて、東宮殿下をお迎へするために空にあらはれたのではあるまいか。宮島の山のふもとに、ほたるの光をあかくしたのが二つ、三つ、四つ、五つ、——次第にふえて次第にくつゝさあひ、長い直線が出来た。こちらにも出来た。あちらにも出来た。どうくゝ直線はくつゝ、いつかしまつた。

その中にも、對岸の五日市のあたりに同じ様な現象が起り、これ又前のより一層長い、ほんごにながいが線が五日市宮島間の何里かを結びつけてしまつた。小さい提灯の火がああ長い間をつゞけるには、どんな大變な人が必要であらう。これも、東宮殿下のお忙しい行啓の、み心をなぐさめ奉らうとする大和民族の赤誠のために違ひない。

燈籠が一つこちらへたゞようて來る。また一つ流れて來る。光と光が入れ代りになつてあちらとこちらへ急いで行く。

燈籠が急に光にてらされる。長門のサーチライトが波を照らしたのだ。今度は宮島が照らされる。つゞいて五日市が照らされた。小さくなつたり大きくな

つたりして、くるり／＼まはつてゐる。こちらへ來ればよいと思ふのになか／＼來ない。三十分ばかり立つと、目の前に火があらはれて、まぶしくて目もあけられなくなつてしまつた。サーチライトでとらされるのは随分苦しいものだ。でもそれがあちらへ行つてしまふと、わたし達がかゝで長門を拜んでゐる事があの軍艦の人々に知れたかと、大層うれしかつた。

いつの間にか夜が更けて海の風が大層寒くなつて來た。

## 旅の人

第三學年南組 渡邊 周子

ちやあ行つていらつしやい。よく氣をつけてね。

優しい母の聲に送られて停車場に至る。

緑こき眞夏の或る朝！

舗道を歩む下駄や靴の足音、驛夫の聲、發車のベル郵便物を山の様につんで運ぶガラ／＼車の音

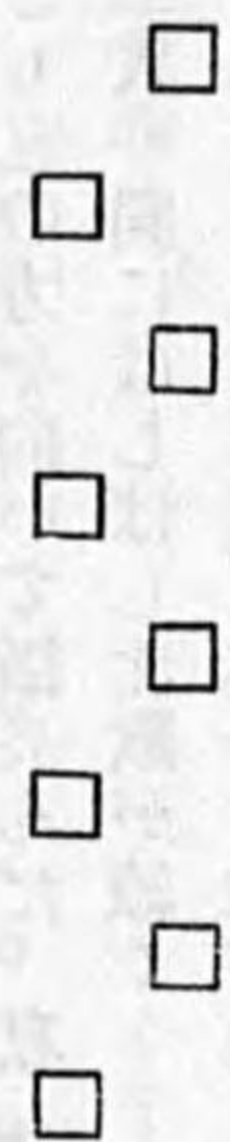
總べての物音が入れまじつて發車前の構内は都會の縮圖の様に、さわがしい。はげしい勢で流れる潮流の様な人ごみの中を通りぬけて漸く車室に入ることも又黒い頭と白い衣で一ぱい。空席を見つげるために、きよろ／＼としてゐる私を氣の毒に思つてか、職人体の人が、立つてすゝめて呉れたので、お禮を云つて、手の荷物を網棚に置き、腰掛けて、ほつとする。そして初めて、あたりを見まはした。前には、都會見物の歸りらしい、田舎のおばあさんが暑苦しうに、額に油汗をにしまして、居きたなく眠つてゐる。蠅が一匹頭のまはりで、ぶん／＼してゐるのを知らないらしい。横に視線にうつした時、今まで私を見守つていたらしい四十格好の、上品な人が、愛きやう笑くほを出し乍ら、聲をかけられた。あんなはん、お一人ごすか、どこまで行きなはります。

齒切れのいゝ京阪言葉だつた。Nまで参ります。小母さまはごちらまで、二言三言話してゐるうちに、すつかり打ちとけて一しよに遠慮なく果物等食べたりした。其の人は、白つばい、浴衣地に薄い羽織をひつかけて、髪はおどなしい丸鬘に結つてゐた。面白い淡泊な性質の人で色々な話題をさらへて私のひとり旅の退屈をまぎらせて呉れた。窓の外には、濃緑の森、青々と續く稻田、目を射る様に輝やく海、それから田舎家の軒下で餌をついばむ、雞の群等が、うつ／＼たり消えたりした。車中の人々は暑中の旅に疲れて多く、ごろ／＼横になつてゐた。子供達は、それでも元氣で窓へのぞいたり、お菓子や、ほ／＼ばつたりしてゐて、二三人の女子の、何か歌ふのが車輪の響に、まじつて所々聞えて來た。青空に狂ほしいまでに、熱して輝やく太陽。然し窓近い私達のところへは、涼しい風が吹き入つて、にぶい睡氣さへ誘つた。前に居るおばさんは、いつの間に目を覺ましたのか、

めぐみの小路を

第三學年北組 難波邦枝

どんよりにごつたまなごで、じろ／＼遠慮なく、あたりを見廻してゐる。何だか氣味の悪い、まなごし。近くに母の膝に頭を、おしつけて、たわいなく眠る子供の愛らしく、葉巻をふかせ乍ら、悠然と新聞よむ人のつゞけ様に、あくびするも、暑中の旅の、いらだ／＼しさを忘れさせる。其の人も、疲れたのか、雜誌持つ手を膝において、うと／＼して居られる。汽車は轟々と、すさまじい音をたて、トンネルの間に入つた。再び明るい所へ出た時、松の木の間白壁が見え初めたNも近いらしい。小さいNの驛で、さやうなら、したのが最初で又最後の——おそらくは永久の——別れだつた。ガラス越しに眼前を、よぎりし人の如く、其の人の事は、だん／＼記憶から遠ざかつてゆく。



山里を奥深く分け入つたある長い／＼峠にさしかつた。大きな松の梢にはまだ朝の空氣が輕やかに流れてゐて、太陽はほのかな光を投げてはだん／＼と朝から遠ざかつて行く所であつた。何處からかチーチー姿も見えぬ小鳥の聲が清くさびしく響き渡るさういふ大きな自然の景色、そして淡いす／＼とした感じ、本當にめぐまれたたどりの様な氣がしてならなかつた。けれども峠を大分過ぎた頃は肌は汗じみて、手提を握る私の手も何時しか汗にまみれてゐた。「姉さん、大分暑くなつて來たのね。」妹がのぞきこむ様にして私の顔を眺めたその瞳にはいくらかつかれたやうな色がかゞはれた。「え、ほんと、少し休んで行かない事。」濃い緑のこんもりしたまがり角の木蔭に入つて、苔のついた大きな岩の上にくづれる様に身をおいた。そして妹は可愛い、袋の中からお

菓子をつまみ出してピンクの玉を一口に含みながらにっこり私の方を向いて微笑んだ。私もにっこりした。二人の間にはしばし沈黙が続く……。

「姉さんまだいくらあるの？」と妹がさきに口を開いた。「そうね。三里の上もあるかしら？」「まあ。自動車が満員でながつたらよかつたのにね。」と小首をかしげながらだるさうにしてゐたが、又今度はさつき求めた桃をむぎ初めた――。

すぐその左側には玉のやうな綺麗な水が小さな石の間をこぼつて湧き出て、私達はその清い清水を手にくんでほつて潤した。その快さ！一先づ勇氣を出して歩み出した。

と、未だ十五分も立たない中、どうしてか急に向ふの方から黒雲が浮き出て、見る／＼中に青空は墨を流した様にひろがり、あれ／＼といふ中に雨は遠慮なく大粒なのがぼつ／＼もやうして来た。仕方なく大きな藤の小枝の蔭に走り込んで身を縮めながらかたづを呑んで雨の止むのを待つてゐたが雨の脚は一刻一刻さしげくなるばかり……でも私達は神様のお蔭かあまりぬれたあともなくからだを小さく葉の方

に寄せてしばらくしてゐると雲を洩れて光が真直ぐにさ／＼ときらめき、雨は日の光を受けて絹糸のやうに白くやはらかくほのかに輝いた。その時の嬉しさ！

あの今朝汽車の中で苦しんだお隣の他所のおちいさんの背中を私達がなでて上げたその事柄が、小さい胸にはつくり浮んだ。あ、私達は神様が守つて下さるのだ。そしてあたゝかい香を以て私達の周囲を女神様にかこまれて手をとつてゆられてゐる様な心持さつと立つて名残惜しく後をふり向くと、銀色に光る笹の葉の先から真珠のやうな露がほろ／＼と散つてゐた。さつきの雨はも早消え失せて、路上は水を打つたやうになり、ほん／＼と歩き心持がよかつた。

妹と私はさんび歌に小足を進めながら行く中、どうした事か又ぼつ／＼肩をぬらしてやつて来た。何時か百合ちゃん可愛い、お口を圓くあけて歌つたて／＼坊主の歌、早速それを歌ひかへて。

てる／＼坊主てる坊主  
今日天氣にしておくれ

若しも天氣になつたら

あなたに あめ玉二つあげよ

ふざけながら小雨の中を縫つて行くとその歌がきこえたのか又お天氣にして下さつた。

「そーら、姉さんあめ玉あげなけりやあ。」あ、袋から一つ出して「妹は私に一つ渡し妹の手には緑色が入つてゐた。

「富士さんがさきよ。」いやよ、じゃんけんしてね「私は妹は紙だつた。「そーら／＼／＼やはり先よ。」

「姉さんもあどきつとね。」といひながら高く投げる勢よく木の葉の上にあたつてころ／＼姿をかくした。一寸妹をいたづらしやうと「ほら、見とつてごらんよ。」と投げる風をしてぼつと口に入れると「あら、そんな事てるちやんがおこりになるの。」「さう。」といつたさきり微笑んでゐたけれど、てるちやんには一こ上げお蔭で妹には皆上げてしまつた。あたりはひつそりして遠くから川の流れが、がう／＼響くばかり。

### 鈴の音 (思ひ出)

第三學年北組 小寺 富美

今夜はそれは涼しい夏の夜である。私はお湯から出て私の大好きな水色の長袖に着替へて私の部屋へ来た。

南と東に明けはなされた風通しのよい部屋……。南は窓で純白のカーテンがある。格子には、ヘチマの蔓が遠慮なくのぼつてゐる。東のお縁には私が一生懸命に作つた朝顔が屋根までも、つるされた綱に大方まきついて大きな葉が緑をなしてゐる。

涼しい心地のよい風は緑の茂みからスウー——と音もなく流れて来て私のユカタを微かにふるはす。

あ、涼しいしづかな夏の晩だこと、と思つて窓にもたれてゐると月は静かに私の部屋に美しい光の幾條かを投げた。夜は私の好みからあかるい電燈は消されてあるため更に、月の光は美しい……。緑の葉に影して。

あ、美しい空だ、なつかしい空だ、本座敷につるさ

れた風鈴が軽快な音を立て、チリ……と繪のかゝれた硝子どが、すれあつて美しい夜に、思ひ出の多い音を立てる。私には鈴の音を聞くといろ／＼の思ひ出がこみ上つてくる。

恰も今まで大事に大事に秘めたる銀の小箱が莖の様に美しい人の黄金のかぎによつて堅いこびらを……と開かれた様な……。

銀の小箱からは桃色の思ひ出の液を莖の様な人の指圖で小人達が少しづつくみはじめた。

トピラはすつかり開いた。

× × × × × × × × × ×

チリ／＼／＼リン／＼／＼……。鈴の音。けたゝましい鈴の音。

今まで安らかに夢を結んでゐた私はバネ仕掛の様に飛び起きた。時計は確か四時位で、外はまだモヤに包まれてあけはなれてゐなかつた。

私の寢室の窓にかけられた。おもちやの鈴はまだまだチリ／＼／＼とやつてゐる、大急ぎで起きた私は窓を押し明けて負けない氣で鈴のついてゐる引手を引く、するとお隣りのムツチャンのお窓の鈴が又チリ

／＼／

今日はどう／＼「まけた、まけちやつた」と云ふ心持で一ぱいでくやしかつた。お隣りのムツチャンはもうお玄關のお掃除もすんだらしい。私も手はやく着物着て、雑巾バケツと雑巾をさげて表に出る。

所へムツチャンがにこ／＼しながら来て「ふみちやん、アンタ、私がベルならした時はまだ休んでいらしたのしやう。ね、さうね、今日は私の方が勝よ」と早起競争でかつたものだから自慢して云ふ。

くやし／＼／＼たまらない。私は云つた「あら違ふから私は早くおきたんだだけぞベルならさなかつただけよ。」とかなりの負け惜みを云つてゐる。でも私とムツチャンは大の仲よしなのでお掃除のすんだ後妹のみいちゃんも入れて三人で御幸橋の方へ散歩に行つた。

電鐵の小路を通つて竹屋川の邊を通つて橋へと向つた。竹屋川の廻りには草が澤山生えてゐて草は水晶の様な露を帯びてゐてまだ誰も踏まないのか、草は少しも、いたんでゐない。うれしく／＼仕方がない。紫色の小さいつゆ草も野菊も丈の長い雑草も朝

の冷氣にあたつて元氣よく私達をむかへてくれる草の彼方を見ると籐の椅子が草の中にだしてあつて白髪のお爺さん……。長い／＼／＼／＼あごひげの爺さんが、ねころんで夕刊でもあらう、それを目から遠くはなして讀んでゐる。ほんたうに神様の様の爺様が……。何と心地よい朝であらう。何と詩的な景色であらう。御幸橋に着いた頃、東の空が赤く照り榮えて今にも眞紅の日輪が出やうとする有様、水にうかべる船も島も總てが紅に染めだされた。私達は大抵この橋に來た時、日輪を拜んだ、三人は同じ様な可愛い、人形のかいた團羽をもつて又も我が家へと歸つた。さうして私はこの夏ムツチャンと鈴によつて朝早く起き、お掃除の競争をしたりした。

といつてどう／＼泣いてしまつた。母は途方にくれた様なお顔をなさつて「しやうがないわね、でも今日のみいちゃんも初めてあんたより早くおきたのだし、あの子だつてたまにはあんたより勝たせて、やらねばね、でも今日は勘忍してね母さんがわるいのでした。明日からは早くおきませうね。」とやさしくなだめて下さると余計になきたくなる。

晝の御飯を戴く時も鈴をならしてしらせ、又夕方勉強のをはつた時も、遊びに行く台圖、就床すべてこの鈴によつて二人の生活をしらせ合つた。これがたぬこの夏は最もたのしく有益にすごした。

そも／＼この鈴といふのは私とムツチャンの發案であつた。

夏休みも間近になつた。或日三人は河へ貝ほりに行つた。この時鈴の事がきまつたのだつた。

「ふみちやん、もう夏休みも近くなつたから夏にはおもしろい事して遊ばない」「え、しませう」と忽ちの間に賛成した。

「私ね何でも一つ奇抜な事がしたいわ。一日中の事が二人によくわかる様な方法があるといふけどね」



「どうね何かおもしろい方法ないかしら」濱邊にしやがんでかんがへた。  
 妹が思ひだした様に、「わかつたわ、姉様朝おきつこしない事……? そうしてしらせ合ふのよ、おもしろいね」と一人きめこんで空の方をむいてしまった。  
 私達もなるほごと思つたが一体どうしてしらせ合ふかが問題であつた。勿論遠くはなれた家ではなし、一軒一軒はなれてゐてもお隣り同士であつたのだ。  
 私は妹に「でもみいちやんどうしてそれを知らせるの」妹は一寸頸をかしげてゐたが「それはね早く起きた人が、おね坊さんの部屋の戸をたたくのよ、さうすると……さうね、姉様かしらまあどつちでもよいけど、びつくりしておきるので、おかしいわ」と相變らず無邪氣な夢の様な事を云ふ。私達は思はずふきだして、誰に云ふとはなしに「そうしたら、たゞかれた家の人達がびつくりして泥棒かと思つて飛びだしてよ」いよゝおかしな考がでる戸をたたくは泥棒みたいと云ふし、今思へばおかしいけどその頃の私達はこんな事を真自目に考へて見た。  
 問もなくしてムツチャンが、何かの本で見たらしい

が鈴にしようときめた。私達はまるで鳴子ですゞめを追ふ様だと笑つたが他によいのがないからこれにきめた。  
 私達はもう夏休みの事を夢見ながらいそゝと帰宅した、三人は内の二階に毎日来て、製作に苦心した。と云つては余り大げさだが、第一に小さい弟のゼンマイのついた鈴を二つ失敬して来て、それから父の道具箱から長い麻綱をさあ幾丈ぐらゐあつたかおぼえてゐないが、その両端に鈴をつけて私の部屋からムツチャンのお窓に連絡させて丁度電線みたいに軒をすつと通つてベルをならす様にしたのだ。  
 この事はまあこれでよかつたが、この麻綱を近所の悪戯子が見つけて時々途中から繩をさられたりして困つたもつともこの腕白坊はまだ小學の一年で大きな目をくるく／＼さしながら歩く、さうして今の様な仕掛でも見やうものなら一目さんに走つて六つ、七つ、いたづらの仲間をつれて来て、無暗にベルをならされたたりした。その音が奥座敷の父にきこえて、うるさいから、と叱られた事があつた。  
 これからますます／＼むつかしくなつた。で私達も考へ

た、今度はこの鈴を本箱の中につないで、他に音の聞えない様にして四五日はすんだが、お寝坊の私には本箱の中で鳴る鈴ぐらいでは目がさめず聞えても夢うつゝでだめだつた。それでどう／＼元の箱にあることがへりをした。窓につるし人の手の届かない様に、してから何の故障もない様になつた。  
 又この鈴をならすのに、規則があつた。一ツならば起床、二ツなら何、三ツなら何といつた。風に、物好きな私達はいろ／＼面倒な事をやつた。父も初めは「うるさい」とか「やかましい」とか、いつていらしたが、終ひには、ベルの装置をなほして下さつたりした。その事によつて私達は規律よいのしい生活をした。父にはめられ等して日曜日等には瀧をみにゆき岩に腰かけて童謡等をつくつて日誌にかくなごしてたのしく、又心持よく遊んだ。  
 あゝあの頃が一番なつかしい。あの時の夏休みほどたのしい規律よい事はなかつた。あゝもう一度あの夏を味ひたい。涼しい朝があつた。露したゝる朝があつた。詩その物の様な月日をおくつた。  
 あの頃は吞氣だつた。妹もいたし、ムツチャンも生

きてゐたし、私の一番幸福な幼き日であつた。  
 私はこの思ひ出に幾度涙をながしたらう。  
 まだ、妹のみいちやんが生きてゐる時二人で月明りのさす電氣のけしてある部屋で涼しい風を身にうけながら彼の思ひ出に泣いた事があつた。あの時の風は蚊帳をゆる／＼さしながらさびしい風であつた。  
 あゝあの青白い月の光がガラス窓から私達二人に光をなげた時、思はずはきだす様に云つた。「お姉様あの頃はたのしかつた。あゝせめてもムツチャンが生きていらつしやればね」私も黙してはいたがその通りの心持であつた。  
 ムツチャンはお隣りの一番末のお嬢さんだつた。父にあたる方が官吏である爲たび／＼今までも移轉なさつたのださうだ。私達のたのしい夏はすぎやがて木の葉の色づく秋が来た、ハラ／＼と木の葉が散つてゐつた秋風が冷く肌にしむ、すべて世の中の物がさびれて行つた。この時私にとつてはムツチャンとの最後のお別れであつた。遠き青森に行つてしまはれたのだ。  
 私達一家は驛までお見送りした、その時のムツチャ

ンは断髪にして桃色の洋服で可愛い方であつた。今になつても思ふ「サウナラ〜」また今度くるかもしれないわ」とあまりかなしみもないで一通の挨拶をした。

あ、仲よかりし友は一人はる〜と多くの肉親をばなれて神の御許に召されてしまつた。

この事をかながへると同じく私の妹のみいちやんも私の傍にはいなかった。ムツチャンと同じ國へ行つてしまつた。梅がさきみだれ雪のチラ〜ふる夜、やはり今夜の様な青白い月がガラスを通して来た時分どう〜行つてしまつた。……さびしき一人旅に長い〜旅に……。

あれやこれやと思ふ時ほんたうに淋しくかなしくなつた。たのしかりし夏の夢は再びおとづれ様ともしなかつた。

幾千年さがせご見當てぬあ、ムツチャンあ、妹よ。

永久に私はあなた達に逢へないのかしら……？。生前さびしさうな、しづかな、無邪氣だつた妹……幼き時よりよわかりし妹今こそほんたうにあなたの

すきな静寂の國で私達を守つてくれるであらふ。お、鈴の音又もきこえる鈴の音。この音がきこえる時なつかしい……かなしい總てがゴツチャになつて涙の目にはムツチャンと妹のまぼろしが見える。あ、又私の頭をかすつて行く、風鈴の音が……。

美しき月はだん〜と山にかたむいて行く。

## 西 風

第三學年北組 片山美枝子

お風呂から上つて、さらりとした氣持の良い体にかたを着て、二階に上つた。

二階ではお父さんとお母さんが、明るい電燈の下で新聞を読んで居らつしやつた。早速夕刊を手取る。

二三日前から紙上を騒はがして居る。長野事件の紛擾が大きな標題で出て居る。面白いなあと思ひながら、急いで読み出した。時々小さな虫が、電燈の周

りを廻り、電球にぶつかつては暫留の上に落ちて來る。

さつきから乾き切つた涼しい風が西側の縁から吹いて來て新聞を読んで居る私の背中を素通りして、東の窓に逃げて行く。本當に良い氣持だ。しばらく読むのを止めて、もつと涼しい風に吹かれ様と思ひ、縁に椅子を出した。涼しい風は前よりも一層良く吹いて呉れた。

ふと空を仰ぐと空は眞暗だ。小さな星一つ見えない其の暗い中に、かすかに白い洋館の右の方には、小さな電燈二つ三つ鈍いぼ〜とした光を出して、光つて居る。暗い中にぼんやり白く浮き出た洋館と、鈍く光つた電燈の光とで、大變美しく見えた。

しばらくして姉さんも二階に上つて來られた。縁側に來て、「本當に涼しい良い風ですね。」

「此の欄干の前に物干を造つたら、もつと涼しいだらうね。」と母さんがおつしやる。

「母さん大阪に居た時には、物干何所にもありませんでしたね。だから随分涼しくて氣持が良かった。」と私が云つた。

お父さんは「いい風だ〜。」と言はれながら、如何にも心持が良さうに、涼んで居られる。

ふと日誌の事が頭に浮んだので、下へ下りた。

## 海上の一夕

第四學年東組 赤川まさえ

早や傾きかけた夕陽に傍の島に半紫にかげつて滑かに影うつした水面を船は心地よくすべり行く。白い船脚も遠く彼方は黒くよごんで波の動搖にあふられたくらげは長い足を見せて、ゆるやかに流れ行く。空には赤い夕焼雲を黒い雨雲が荒み合ひつゝ争つて居る。次第に夕焼雲が勢を得て眞紅に燃えた雲のかたまりは山の一端より除々に廣がつた。

あ、ヨットが……甲板の一隅に夕陽を脊に受けてぼんやり沖を眺めてゐた私の口からはかうした言葉がかすれた様な低いつぶやきとなつて洩れた。赤く照り映えて血を流した様な水と「アラビアンナイト」の怪鳥の頭に似た雲の一團との續く水平線のあたり

その極彩色な調和を破つて現れた灰色のヨットの影  
周囲が周囲だけにその濛い灰色は氣味悪い迄に落つ  
いて見えた。私は急に大きな不快を覺えて逸早く瞳  
をそらした――

ふと何氣なく瞳を擧げた。あ、まだあのヨットが……  
島は次第に薄く小さくなつて行く。併しヨットの影  
は元通りの大きさを不氣味な配合の中に依然として  
黙止してゐた。と、雲間を破つて落陽の凄惨な光が  
流れる。その刹那言ひ知れない恐怖を感じて私は船  
室に走り込んだ。

息苦しい幾分かは續いたが併し心落着かなかつた。  
恐しいけれど氣味悪いけれど見ないでは居られない  
あのヨット。私は何かしら見えない力の糸に引づら  
れて何時の間にか甲板へ出て了つた。

又その影が眼前に現れるのを豫期しながら私は思ひ  
切つて閉じた目を開いた。併しどうしたのかそこに  
はヨットの影は見られなかつた。胸のひびきは一し  
きり高くなつた。

海の陽は全く沈んで水面には紅の餘抹さへなかつた  
争ひかれた雲も流れ去つて空には灰白い夕日が……

一日を奮闘に照した太陽の没落後は一戦後の陣中の  
寂寥に似てすべては静寂の夜に入るのだ。  
突然あたりの空氣を破つて一聲高くひびく汽笛……  
お、彼方にはなつかし港町の燈が点々として……

### 海上の一夕

第四學年東組 野田 セイ

永遠の調べを奏する清らかなる白波島間を縫つて走  
る白帆、常緑の松枝の下に抱かれつゝうすれ行く黄  
昏時の彼方の海を眺めて佇んだ、やがて太陽は最後  
の光を下界になげかけなつかしの山の端にかくれん  
とする時、お、その美しさ空に躍る金波海に漂ふ金  
波燃ゆる白帆筆にも言葉にも表はし得ぬ焦躁と悲し  
さ、空と海が静かに――一條の淡い線を畫いたまゝ、  
融け合つて行く彼方にこそは、想像の世界憧れの世  
界が擴つてゐる。小さいハートは次第々々に彩られ  
て美しい世界が畫かれて行く、眼には唯夢の景色が  
ぱんやりとうつゝてゐる。耳には寄せてはかへす白

けれど心をのせた白帆はどこへ行つたか行方もわか  
らない。

### 夕 顔

第四學年西組 有末 満子

波の岩に碎くる音もかすかに聞ゆるばかり心に畫か  
れる平和な春の女神の楽しい美しい國――想像の世  
界エンゼルの御手に絶つて心は何所を逍遙うてゐる  
のだらう畫面には種々の花が畫かれて行くきつと清  
らかな泉の傍の花園でもあらうか。  
松吹く涼風にふと花園の花も泉も白い繪具で塗りつ  
ぶされてしまつて又もや眼前に現の絶景が展べられ  
る。日輪の反映に赤橙色の雲は微動して行くかど見  
てあればやがて長く尾を引く白帆に乗せられて心は  
再びする／＼と海面をすべつて行くこの白帆はどこ  
まで漂つて行くのだらう。  
果てしもない大海を、風もないだ水面は水棹に細い  
／＼波紋を畫いてははかなく消えて行く。  
畫面再び黒色に塗りつぶされた時に、あの神秘的な  
空の色も夕やけ色を名残として眼前の景色も同じ様  
に黒く塗りつぶされてしまつて天と地と心とがすつ  
かり融け合つてしまつて肉体までも淨化されて吸ひ  
こまれて行く。  
波の音はいつしか小さくかすかに歌つてゐる。白く  
ほの見えるのはあれは何であらうか、白帆か。

空が暮色を帯びるとして夕闇がひそ／＼と身に泌  
みる氣色を感じると静かに／＼夕顔が咲く。  
キリッとうすまいた蕾の螺旋が音もなくふくらみ非  
常な静けさでその白い花が開く。赤い萼から泣いて  
ゐる笛の音の様に細い軸を通してそのさきに白い大  
きな花を開く。清楚の氣品！ 僅かな風にもその薄  
い花瓣をふるはせながらホンノリと匂ふ。ちつとみ  
つめてゐる時スツと誰れだか人の横顔が花の中に  
浮いて見える。  
淋しい瞳、氣持よくしまつた口――夢の中でお話し  
た様な、それとも何時も私が幻に描いてみる人かし  
ら。  
「一体貴女は誰れなの？」



犠牲の精神

第四學年中組 兒玉幸子

社會の進歩、人類の幸福、その蔭には常に黒い犠牲の影が横たはる。
どんなにそれが小さな成功である時でも、その後には必ずかすかではあつても常に、じつと凝視する時の私の眼に痛々しくそれが映つて来る。
尊い犠牲、戦慄させられる様な烈しい犠牲、悲しい犠牲、それらによつて私達に幸福が與へられた時、私達は深い感謝の念を以てそれらの犠牲を想ひ、其の人の辿つた境遇に對して哀憐の情を起す。と同時に又その反面にはこんな尊い影が潜んでゐるのをも顧み見ず、唯當然のこの如く自分の幸福に酔ふ者を見た時、私達の胸の中には吐嗟に憎悪、憤り、悲しみ、こんな感情が凄じい勢で渦巻くのである。
然し犠牲者の心、それを靜かに想像した時に、そこに力強い大きなよろこびを見出す。
勿論それは私達の考への及ばない大きな深い苦しみを

を経験したことであらう、けれども其の苦しみの反面には又屹度それに伴ふ大きなくよろこび、満足
を味つたに違ひない。犠牲の苦しみよりも寧ろその大きな満足を得ようとして得た人、所謂犠牲者、それはほんとうに幸福ではあるまいか？
この大きなよろこびを得る事の出来なかつた人、換言すれば犠牲者たり得なかつた人を世人は幸福だと云ふけれども前者にくらべたらどんなに貧弱なものであらう。
犠牲者は幸福だ！私達もこの犠牲の心を何物かに捧げたい。犠牲者のみに與へられる大きなよろこび、満足が得たいものだ。

地上秋夢

第四學年中組 井上與女子

凄いまでに蒼白い……清浄な月光が三十八錢の安花瓶にさゝられた白薔薇を照らす今宵私は出しても答へない父に便りを書かう。

そして銀杏や楓の落葉と一緒に燃してその灰を澄んだ裏の河水に流さう。

かう思つて私は父の遺愛の一だつた紫檀の大机に凭つてペンを持つた。何を書かう？

父への文章には技巧は要らないが……だが後から後から湧出る「父戀ひし」の言葉より他に何等の言葉がない。

あゝ本當に困つた。

「お父様！

どう言つてよいやらわかぬ程なつかしいお父様

いゝお父様……世界で一番よかつた私の大好きなお父様」

こゝから何と書かう。思は一杯でも筆にされぬ焦ら

だたしさに私は頭を机に伏せて瞳を閉ぢた。時は素早く歩む。知らぬ間に私は夢國の住人となつて居た。そしてくだんの短いたよりを手にして元安河畔に下りた。人氣の無い河端で全身月光の洗禮を受けながら涙しながらその文殻を銀杏、楓の落葉と一緒に焚いた。

薄白い煙は病める老女の如く細き果敢ない姿を空に

横へ浮べた。

淡い幽しい落葉と文殻燃す香を嗅ぎながら空しく消える煙の行方を見送つてその途端常緑樹の多い黒瓦の家の障子が開いた。

あゝTさんのお母さんだ……私の大好きなおばさん！ 幼い時田舎の祖母の家へ行つた時見た仙台萩の政岡の様な感じのするおばさん。心からなつかしいおばさんが見える。と、そのおばさんの顔がだん／＼父の顔に變はつて行く。息をもつかせぬ間に父の顔になつた。

「よしちゃんお出」と夢の父は両手を出した。嬉しさに夢中になつて飛びつかうとした瞬間月夜の夢は破れた。

淡い秋夜の夢は破れた。冷たい白薔薇の一片……二片私の手に落ちてゐた。

愛する父とおばさんの顔もあゝ凡べては月夜の夢……短い儂い幻だつた。一層あのまゝに壊れずに破れずに消えずに居て欲しかつた。あの夢よ！ 沈黙のしじまを破つて時計は二時を私に告げた。静かな家中に妙に恐い餘韻を響かせて。

地上の秋は深更二時だ、もう床に入らう。今から寝ても「貴女は早くからお寝すみになりますね」なんて言ふ人はまさか有るまい。冷い床はさつきの假寝の楽しい夢をば二度と見せては呉れないだらうか？

なつかしい地上秋夢よ！

### 攝政宮殿下を迎へ奉りて

第四學年南組 宮地 徳子

光榮ある五月二十五日をどれほど待つて居た事であらう。此の上もなく嬉しい様な又何だか心配な様な自分自身それすら分らなかつた。目に見ゆるもの、耳に聞くもの總て歡喜そのものであつた。時は刻一刻と過ぎた。そのうち中島先生のもとに「氣をつけ」の號令がかつた。それと同時に私達も席についた。時計は一時を示してゐた。午後〇時五十六分だ、運動場では禮の練習をしてゐらつしやつた。私達は心を靜にして休んだ「授業最中間達の無い様

に、皆元氣でまさかの時にはどんなお役にでも盡します。日本の女子もたのめしいと御満足になります様に」と心の中で拜んだ、又「氣をつけ」の號令と共に自動車の勢の良い音が聞えて來た。丁度時計は一時五十六分を示して居た、「禮」そして殿下には家事教室に玉歩をお進めになつた。その間時計はコチ／＼と云ふ音ばかり聞えて來るのだつた。そのうち手に取る様に尊い靴の音が聞えて來たかと思ふと校長先生を先導に殿下は教室にお這入りになつた。校長先生のお聲は振ひ勝ちに「これは四年化學の實驗で御座います」とおつしやつた。殿下は台の上にお上りになつた。その時は無我夢中でどの様に最敬禮したか分らなかつた。あまりおそばで拜するので尊さに殿下のお顔を拜む事が出来なかつた。先生は元氣よく「今迄は」とおつしやつた時我にかへつて「今度は元氣で」と一心に實驗した。校長先生の「授業止め」といふ聲がはつきり聞えて來た私は此の時殿下のお顔を心ゆくばかり拜する事が出來た。それと同時に私達の誠心誠意でした授業が御満足であつたらうか又後姿を拜んで、おそれ多い。

### 初秋の調べ

第四學年南組 八木十三子

人世の目醒るべき秋が來た。秋！秋！總べての苦難にうちかつて、冴えたる腕勝れた力の持主たる凛々しい赤裸々の秋が來たのだ。「倒れたものは起てよ、眠れるものは目醒よ、そうして力のあらんかぎり働け働け、それがお前等の務だ」と云はぬばつかりの秋……………。

梢に吹く風は、ひし／＼と身にしみ、そうして自然人の心を怠惰より救はうとして居る。月は皎々と冴えわたり下界を隈なく照らし、星はまた、いて居る。折柄リーリーンと、何處から聞こえるのか鈴を振る様な愛らしい音、つゞいてチンチロ、チンチロ、キリ／＼／＼と秋の夜長を鳴きとほす可愛聲の主。生命の短縮さを顧り見ず、秋夜を、鳴き明かして、一層美化して行く可愛虫よ、鳴け／＼いつまでも何時までも。秋の有らんかぎり、生命の有らん限り……………。

敬ふ。といふ心も起つたけれど又一方懐しく、親しい様な氣がしてもう一度はつきりと拜みたい様であつた。角をお曲りになる時には目に涙が一杯たまつて頬を傳つた。殿下の自動車は勢よく校門をお去りになつた。一日とても缺かさなで我々臣民の事ばかり御心配下さる殿下と思へば自然あつい涙が目に滲み出た。何といふ光榮であつた事で御座います。私が此の様に健康で今日の晴ある場所に出る事の出來たのは唯々師の爲、父母の爲なのだ。今日の此の光榮と感激とは自分一人でなく長へに傳へて、大なる御威徳の下に益々學び勵んで女子の守るべき道「貞操義烈」をよく守り忠誠を捧げて思召の萬分の一に應へ奉らう。今日の氣持で一生を過さうと心強く決心した。

## 初夏の或日

第四學年東組 山本信枝

若々しい緑の眩しい色彩が地上を蔽つて仕舞つた。午後の光線が柔くポプラの葉に當つて静かな庭には私の下駄の音以外何をひそつ音をたてるものはない罌粟や石竹や薔薇の咲き揃つた花壇を私はしばらく何といふあてもなく凝視めて居た。其時私は小さい草花のひとつ／＼の中に生命の鼓動があつていづれも生一杯伸び様として一枝花々の葉をふるはして居る様に思つてならなかつた。柔かな風が其上を撫でて行く度毎に葉は翻つて灰緑の裏を見せて様々の花はまるで舞踏でもして居る様に揺れてゐる。

一昨年の此頃挿木した五本のポプラが素晴らしい勢ですん／＼伸びていつて今は二階の窓をのぞく様になつた。自然の世界に於ける生長力の偉大な事を今更の様にしみ／＼感じさせられるのだつた。コスモスのなよ／＼しい芽もあちこちに生えて居る

あまり込み合つてゐるので数本引き抜いてわきに捨てて見た。後になつて可愛想な事をした等と思つた。小さな池のほとりに行くとき可愛い金魚の群は妙に全身をふりながら又大きな鯉は尾ばかり左右に動かしながら静かに静かにそうして平和に泳いでゐる。三、四年前には二寸にもみたなかつた鯉が今は早や五寸以上になつてゐる。かうして草も木も金魚も鯉も私と共に今初夏を迎へてゐる。一体誰が一番幸福なのであらう！私は突拍子もなくこんな事を考へるのだつた。そしてやはり池の面を見ることもなく見つめてゐた。かうして私は初夏の光に全く溶け入りさうになるのであつた。

## 秋の或る夜

第四學年北組 奈良井みゆき

あたりの静寂を破つて、暗黒の世界を一時に吐き出したかと思はれる様な氣笛の音に、私は一層更けて

行く。

秋風にも似た、冷めたいなやみの秋の夜は、斯して一汽笛毎に暗黒は増して行くのだ。

いかすみを、とき流した様な大空からは月の青白い光と、星の優しいさゝやさとが此んな静寂な、そして孤獨な、夜にもきつと、私の窓邊に訪づれてくれるのである。

月は嚴かに明日の務を教へ、星は優しく今日の疲れを勞してくれる。

それだけでも私は嬉しい。

果てしない、永劫の暗かとも思はれる大空を、天井とし、底知れぬ暗の地を、座所として、優しい母の様な星と、父の月とに守られて、夜を過す事は、これだけ幸福な事であらう。あれぞこの平和なとぼりの中にまでも、又淋しい秋の空氣の流れは、どうする事も出来ないのだ。

私の心は次第に淋しさに、ひきづられて行く。晝間の世の喧騒からはなれ、總ての醜いものより脱した、この静寂の夜には、只魂のすゝり泣きの聲のみはつきりと聞えてくる。

寂寥！ そうだ

私が毎晩暗黒の世界から、何物かを求めようとしていたのは、それであつた。かゞやかしい光明ではなかつたのだ。

又一しきり、この闇に、暗示を與へる孤獨の様に淋しくも又ものすこく汽笛が聞える。

あたりは一層、森閑として來た。

窓邊に聞える、鈴虫の鳴聲も、一層夜更けて思はせる。

床下のキリコは、何となく胸をえぐる様な氣がする。希望、心のすみか何もかもすべてキリキリの四文字の吸ひ取つてしまつて、何處ともなく消えて行く。だん／＼吸ひとられて行く、求めつゝあるものゝ、希望は如何ともする事は出来ないのだ。

只後から後から淋しさ物足りなさは、こみあげてくるばかり、邊はひつそりとして、物音一つしないみ何時の間にか、降りだした雨が秋葉にあたる音のみガサ／＼ときこえる。今晚も又、惱ましき苦しみの總てを、大きなためいきと共に、虫にふきかけて安らかに眠るとしよう。

秋の聲

第四學年北組 永田 柔子

門外一步を出ると、もう空が高く雲の色も陽の光も紛れなく秋になつてゐた。かなめの垣の上に頭を擡げる様にして咲いてゐる木槿の花にも、秋の來たのを思はせた。

針の様な松葉の尖に秋のあつい陽が燃える様に光つてゐる。そうして其の光の中に浸つて雀が軽く動いてゐる。其の動く毎に光の散るやうなまばゆさを覺える。

爛漫と咲きほくえんだ美しい花もあとを隠し、もろく様なわかくしい若葉も、總てが黄色に變つて行く。

何故に秋は悲哀を一切の胸に感じさせるのだらうか思へば神秘的な靈感である。秋の響はさびしく悲しい其響が一切の胸に涙と悲しみとをより強くより深く浸々と傳はせる。秋の感じは深くさびしい神々の立琴のに響も歟取る農夫の太い聲にも中空の青白い月

の面にもましてや淋しみは深い、秋は永遠の深さである。そうしてそれ等の一切は皆力強く更にく北極へと流れて行く。

秋の悲哀は生きんとすればする程尙更に其の胸に深刻な響を與へる。而して神秘は秋にのみ籠る。

魂祭の夕

第四學年北組 石井 八千代

水色の岐阜提灯に灯を入れてから私は静かに庭へ下りた。静かな夕——。氣紛れな風も名残なく風いてすべての物の息づかひが穩かである。打水の後の土は快く濕つて草履を通して清々しい感じを足の裏に與へる。私は緩かな足取で歩き始めた。植込の葉蔭から生れる夕闇が次第に黒くたちこめて私の身の邊へも押寄せて來る。しつとりとした夜氣が袂から泌み込んで來る。

嚴かな夕——今宵はお精靈様がお出でになるのである。懐しさと悲しさが溶け合つて妙に遺瀨ない心持

て燈籠に灯をともした。ほつくと淋しい音をたて、焰がゆらめくと灰白い煙が夕闇をついて空の方へと消えて行く。私達はお墓の前に合掌した。家へはいつてふとみると佛壇の火がきらめいてゐた。

貴き信頼

第五學年 岩本 芳子

で私の心は充たされて來た。七八年前の冬に逝かれたお祖父様の御靈限りない愛を私に遺して亡くなられたお祖父様の御靈は今宵の夕風にのつて忘れ難い私のごころへお出でになることだらう。幼き日の記憶が新しく甦つて來てごめ度もなく涙が溢れ出る。丁度私が九つの時既に亡かつた父の傍が戀しさに指折りかぞへて「父様が來る」といふ魂祭の日をどんなにか待ちこがれたであらう。けれども魂祭の夕が來ても夜に入つても父は來る筈がなかつた。そして大そう失望した私が祖父に言つた時「お父さまは十万億土といふ遠い所からお出でになるからあなたがねんねしてからでないとお着きにならない」と答へられた十万億土。この言葉は幼い私の頭にも言ひ知れる奇異な神秘的響を傳へたのであつた。魂祭もすぎ秋も去りやう／＼父の事も忘れ勝ちになつた時に又も祖父は父の後を追つてあの十万億土へ旅立たれてしまつた。こんなにも早くお亡くなりにならうとは誰も思はなかつたのに。

ふと仰ぐ西の空には銀色の月が利いだ鎌の様に輝いてゐる。微塵も風のないよい夜である。母に促され

かくて市民の感激にうるむ瞳の中をかしこくも御會釋賜ひつゝ殿下は御宿泊所に入らせられた。



今ぞ我が皇太子殿下は我が安住の地鯉城の里におはしますと思へば心は、諸佛に見捨てられた罪深き凡夫が暖かき彌陀の懐に抱だかれた時の様な云ひ知れぬ大きな安心に満たされるのだつた。

畏くも殿下には数ならぬ私達をも赤子として御愛撫を垂れさせ給ふのである。私達は殿下在はしませばこそ大磐石の安きよりも尙心を安んずる事が出来る。これこそ貴き信頼である。君は民を愛し且信じさせ給ひ民は君を心から信じ奉る。かくてこそ七度人間に生れてと誓つた正成あり、山川草木轉荒涼のみ詠じて一滴の涙も見せなかつた乃木將軍は世に出たのである。貴き信頼の存する所其他には未來と云へども無限に正成は出で乃木將軍はあらはれるものである。

貴き信頼それは君臣の間のみではない親子の間にも明かにそれは見られる。母のあたゝかき懐に抱かれてすやくと眠る時嬰兒の心は大船に乗つたよりも大きな安心にやすらかな眠も恵まれるのである。即ち嬰兒は凡ての信頼を母の懐にかけて心から安心し得るのである。何と云ふ尊い清い信頼であらう。親

の子に對する心も同様である。又朋友の間にも師弟の間にも兄弟姉妹の間にもこの貴く美しい相互間の信頼は兩者の間にあつて常に輝き得るものである。宗教家も御佛に對し又神に對し心からなる信頼を傾け、何物をもつてしてもうごかすことの出来ない大信仰は益々固められて行くのである。

貴き信頼は他國と干才を交へる時も一國は勿論世界の平和を維持して行く上にも必ずなくてはならぬ精神である。

知らなかつた。かくも貴き精神の人の世にある事をしかも今度はじめてそれを知り得た、否殿下の御徳が私をしてこの偉大なる精神ある事をさざられしめたのである。

殿下を拜し奉つた夜寝る時にはこの世に生を享けてより嘗て感じた事のない大なる安心の中に私の心は靜かにゆつたりと充分に浸つてゐる事をしみじみとつた時云ひ知れぬ涙が出た。

何故安心なのか自分にはあきらかには云へない。たとひこの地にはあきらかに限りなき御恵と御威徳によつて秩序ある平和な社會に常に安住する事が出

來る自分である。

それにも關はず殿下が同じこの地に在はしますと思へば更にある云ひ知れぬ大なる安心が私を包圍する、否おそらく私のみでは無かつたであらう。

それにひきかへ二十七日の朝殿下が我が廣島の地を去らせ給ひ一時私の心は例へば只一人大洋の孤島にとりのこされた様な、又母の懐から野の草の中に一人残されたやうな、又諸佛に見すてられた凡夫が一人暗黒の道をたざらねばならぬ時のやうなやるせない淋しさがひた／＼と私の心に迫るのを感じた。

その夜は恰も野にすて去られた嬰兒が懐しき母の乳房を求めて泣く如く、罪の子が闇の中を御佛の神を求めて涙ぐむが如く日もなき空の下に夜更くる迄この地に在はしました日の事ども思ひ出しては涙ぐんだ。

床に入る時もうら淋しかつた。二十四、二十五、二十六の三日間の如きたのしく幸多かりし夢を再び結ぶ時をまつのみである。

「今夜の夢はきつと露けく淋しいにちがひない」  
私は一人つぶやいて灯けした闇の中に悲しく目をと

ちた只三日間それも時々御通路に拜したばかりの殿下に對し參らせて私達は何故こうも敬慕の念止みがたいのだらう。それは勿論殿下の高徳の輝きにはちがひない。

又我が日の君と日の民とありてこそはじめて生れ出づる所の他國人には味ひ知る事の出来ない一貫した精神ではないであらうか、君臣の間の貴き信頼もここに赫々たる輝きを見る事が出来る。

貴き信頼それはとこしなへに我が君と民との間にその輝きを消滅する事は無いであらう。これが必ず／＼断言し得るものである事を確信し得る我が國体が今更のやうに尊くうれしい。正氣歌にもある如く私達は死しては忠義の鬼となつても極天皇基を護らねばならぬ。我が光輝ある國体をまもりおほせねばならぬ。

やるせない淋しさの闇の中に煌々たる光明をみだめ得た私の心は決然と微笑んだ。

## 窓より

第五學年 田邊信子

又家がたつた。遂此の間まで鑿や鉋の音が絶間なく聞えていたのに、此の頃では夜淡赤い灯がぼーつと窓から滲んでゐる。もう人が住んでゐるのだらう。かうして此の小さな窓からながめる範圍と云へは狭い地にすぎないのに去年の暮から今年の春にかけて三軒もの家が新築せられた。

夏になれば緑色の木々が鬱蒼と茂つて濃い影を地に落してゐた。そして永い一日中を蟬が鳴き通す。夜になると市内とも思はれぬ程の静寂が訪れてよく木の茂みから鼻の聲をきく。晩秋風の吹く頃になると常緑樹の間に黄に紅に色づいた葉が風の吹く度にがさごそとなつて鋭い秋の日に光つてゐた。かうして日光と水とに恵まれて獨りで芽え獨りで散つて行く自然の地にも遂に人間の魔の手はのびてきた。草木の總てが活き／＼と萌出様とする春先頃多くの人達によつてそれ等の木々は皆何處かに移されてしまつ

た。そして其の後に黒い高い垣をめぐらした家が建られた。

今まで廣々とした緑色の地をながめていたのに、急に黒い垣を見出した時には、何とも云へない淋しさを感じた。

目に見えない或る大きな物から壓迫せられてゐる様で重苦しい氣持にならないではいられなかつた。暫くの間、うらみにうらみみた氣持で黒いかきをながめてゐた。

しかしまだ高い青空と流れ行く白雲とは心ゆくまでのぞむ事が出来る。其の黒いかきを隔て、彼方に淡赤い灯の滲むまごがある。其處も元は可成廣い空地だつた。其の隅に二つのぼろ／＼になつた土藏がたつてゐた。壁は半分ばかり落ちてしまつて残りの後半分は雨にうたれてねづみかゝつた白色をしてゐたもう余程前に作られた物だらう。暖かい日なごよく其の朽ちた土藏の前で子供が澤山集まつて學校ごつこ等して居た。去年の春頃其の土藏も白い煙をたて／＼二三日の中にとかれてしまつた。

かうして古い物は／＼破壊せられて新しい物が

後から／＼と侵入して来る。生存競争の激しい今日、人々は一寸の餘地も與へない。大きな自然を壊してまでも人工が加へられ様とする。その餘地がなくなると今度は上に／＼とのび様とする、今から幾年かの後には／＼から青空までものぞめなくなるかも知れない。

さうした中に唯一つ、昔と同じ様に窓の南に聳えてゐる銀杏の木がある。澄みきつた青空の中を黄金の葉の舞落ちるのを硝子ごしにながめるのは忘れ難い物である。後二月すれば又黄色くいろづくだらう。總ての物が／＼と移り變つて行く中に此の木のみは私の唯一の味方の様な氣がする。いつまでも變らないで聳えてゐる様に／＼と祈り度い様な氣持になる。

## 飛行機

第五學年 野崎アサエ

すが／＼しい青葉より漏れて来る光線が水色のカー

テンを、すかして氣持よく部屋に満ちる。芽の香が強く鼻をつく。面やつれた妹の顔が淋しさうに明るい光線の中に浮んで其の寢息が靜かに空氣を、ふるはせて聞えて来る。急に大人らしく見えて来る妹の様子がたまらなく淋しく悲しくなつて来る。體を動かす度に氷枕からポトン／＼と重苦しい音が耳につく。

庭の木立で忙し想に鳴く蟬の聲は、かつて邊を一層、物靜かにする様に聞えて来る。

「ブーン／＼！」大きな音だ！ プロペラの音！

私は夢中になつて窓から背伸びして、まばゆい光線の中を目を細くして見上げた。

三点小さく／＼と飛んで居る。

本當に力強い何といふ雄々しい姿たらう！

氣持よく廣い空を自由に飛び廻る氣持はどんなだらう……。

「姉さん！」「ハッ！」とした。青白い妹の顔が目

うつゝと共に私は目を伏せた。

「姉様飛行機でせう。大きいの。久し振りに見たいわ」

「私は見たい姉さん、いゝでせう。何台飛んでゐるのかしらん」

私は何とも云はれない、あれ程父母から八釜しく云はれている身が、体の自由を奪はれた妹の眼前で軽々しい行爲は私は辱かしい私は何といつてよいか分らなく、唯胸が一杯になつた。

病氣で氣短くなつた妹は終ひに泣き聲を出した。

「姉さん此の寢台をそつちに持つて行つてよ。ね窓近くによ——」

「……………」

「姉さんたら、姉さんたら！」  
妹の聲が亂れて來るに從つて私は如何にすればよいのやら、たゞハラ／＼とするばかり。ソーと妹の顔を見た。

あゝ妹は泣いてゐる。私は胸がわく／＼して臉が度々と暖くなつて來る。妹の頬に涙が傳はつてる。兩方とも聲をたてまいとしてゐる。妹の様子だ、たまらなく氣の毒になつて來た。終に妹は泣きじやくり出した。度々と妹の興奮して行く様子が私の胸に一層苦しい暗い物を投げて行く。無言の部屋の中にプロベラーの音が、腹立たしい程聞えて來る。どう

か早く降りてくればよいが、あゝ早く…………飛行機本當にうらめしかつた。

妹は無言で天井を見つめて居た。私は「許してね！」の一言が漸く出た。愚かな私には妹の切ない願に満足と與える事が出来なかつた。ソーと部屋より出た。再び部屋に歸つた時私は無意識の中に蓄音機をもつてゐた。早速私は、先年七月に阿部、河内、飛行士が東風、春風で歐洲に訪問に行かれた時の送歌あの空の勇士のレコードをかけた。

行け／＼勇士空遠く…………

無邪氣な子供の明るい聲が隅から／＼にひゞいた。妹も機嫌がなほつたらしく、歌つてゐた。

私はその様子が、たまらなく嬉しかつた。どうやら心も落ちついたらしい、元の平和な静かな部屋に返つた。

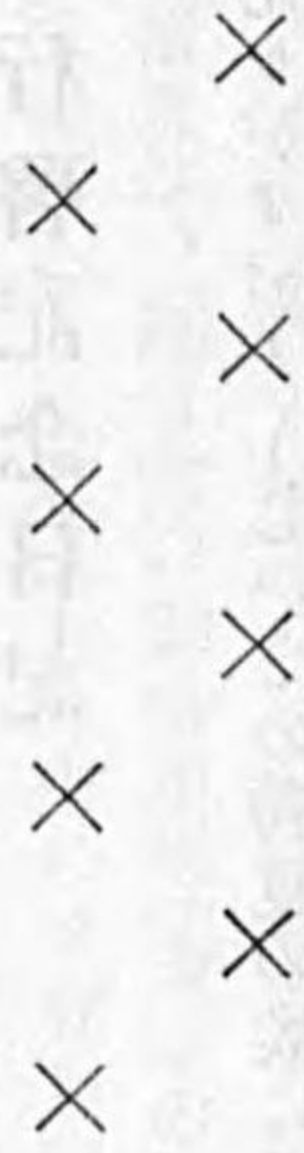
優しい光に抱かれて二人は幸福だつた。

明るい中に日にベッドが反射的にくつきりと浮んでゐる。妹は幸福に見えた。エンゼルの様に可愛く見えた。

静かな部屋の中にレコードの軽い音を立て、走る。

「姉様！」私は顔上げた。ニッコリと笑つた顔、私もたまらなくなつて「許してね」「御免なさいね姉様」二人は和解した。

あの笑顔、あゝ長い間苦しんでた心も、總て幸福の光にあたつた氣持がした。走るレコードの絶え／＼に幽かなプロベラーの音…………そうと妹を見上げた。何も知らない妹は無心に白い美しい白布に包まれて聞きとれてゐるのみ……………  
夏の眞晝は本當に静かだ。  
窓の所を蜻蛉が二匹スイ／＼と飛びたはむれてゐる。





### 校友會記事

#### 行啓記念日記

若葉の光りがすがすがしいこの初夏の候に畏くも我が皇太子殿下には民情の御視察の御爲め鶴駕を我が山陽の地に御進の遊ばす由、報せられ且つ又、誠に有難い事乍ら我が縣立高等女學校にも行啓の榮を賜ることに決定した。實に千載一遇の光榮に接すべき職員、生徒一同は夢心地にてその榮えある日を待ちわびて居る。

五月六日木曜日午後零時半専攻科三年生は、控室に集合し校長先生より此度の行啓に關するお話ありし時、三年二部生十名には特にこの光榮を永久に記念するため、雑誌を作るからそのために今日から毎日この事に關係ある記事を記録してくれよ、との仰せあり。そして他の組の者は二部の者に記すべき材料

を供給することになった。それからこの日校長先生より學校の重要書類を特別を以て我々二部生にお渡しになった。我々は校長先生の御ことばにより大切に取扱ひするため、成田さんがバスケットをもつて来てそれにそれらを貯藏することにした。私達は急に重荷を負つた様な氣がした。記するに當り出来るだけ精しくするため今少し記すべき範圍に於て遡ることにする。

四月廿五日 日曜日

皇太子殿下行啓の際西練兵場に於て行はれる親閲式の練習國民歌の練習をなすため登校す。雨上り、日光強し。

四月廿六日 月曜日

西練兵場に於て御親閲を賜るについての練習をなす。市内各中學校、女學校生徒集る。

四月廿九日 木曜日

昨夜の雨は今朝は晴れた。午前六時規定の如く練兵場にて煙火が上げられたので豫定の通り西練兵で練習が行はれた。雨上りなので水溜り多く殊に縣女の位置には多くてこまつた。靴の中に水が侵

入したが歸校する迄には大半は足の熱と太陽の熱で乾いた。

午後講堂にて校長先生及び原先生より御注意あり後座禮室に専攻科生徒全部集り校長先生よりお話あり、これもやはり行啓及びそれにつき本科一組、専攻科一組授業を台覽に供することについての話だった。

五月一日 土曜日

午後二時間の豫定にて大掃除行はる。

五月六日 木曜日

第一校時に本科専攻科共に講堂修身あり。此度我校に行啓を仰ぐに當りて、我々一同の注意すべき事項二、三についてお話及び御注意あり後、殿下の御盛徳及び、御日常の御時間割(規定の御生活)についてお話あり。私はあゝ上にお立ちになるお方は何とお忙しい御窮屈な事だらう。實にお氣の毒な事である。それにつけても私達は幸だか何だか分らない氣樂な身分の者である。今少しは何事も熱心に一心に真似目になし果さねばなるまい……と言ふ感じが起つた。同じその殿下の御日定

御職務について承つた時、殿下の博學で御勤勉に渡らせられるといふことにはほんとうに驚く程感動させられた。と同時に我々の如き一般人民とは特別なすべてのはたらしきを有せられる殿下である様な氣した。

講堂修身は約一時間余で終り後校庭に(第一第二テニスコート内)集合し殿下を奉迎奉送する練習をした。

其位置は東側の新校舎にむかつてコート上に左手より専三、二の合併組、専一、五年四、三、二、一の順序、先生方は生徒の前に二列に並ばれる。小林先生は他の先生よりぬきんで、遙かに高くいらつしやる。北側の運動場への昇降口に露臺を据ゑ奉りそれに殿下は出御遊ばされる様になつて居る。露臺は白木製の六尺四方程のものである。順序は先づ殿下は玄關より廊下を北にすゝませられ校長先生の御先導でこの露臺にお出ましになり御親閲を終り後家事の授業教室に御成りになり五分間御參觀後引かへして我々の前をお過ぎになつて本科四年の化學實驗室においでになる。五分の

後出御遊ばして君が代の合唱裏に玄關にお送りし奉る。この間十五分。校長先生が殿下の御代りに練習をなさつた所が臺に上つていらつしやる時、右手と中央との者は御顔が見えないと言つて残念がつたので堀込先生は容赦無く松の枝を鋸できりおどさうとなさつたが皆がおいしいおしい……と言つたので小林先生、石井先生等の御指圖の下に小さい枝だけ落された。行啓について學校ではどんな事をもまげてつくすといふ心持が堀込先生のあの行爲によつて明かに極端に証明せられた様に思へた。練習中雨が降り出し一時は大變烈しくなつたけれども我々はほんとうの時の心持で練習して居るのであるから髪の間から頬を傳へ流れる雨水もきものから肌にしみこむ氣持のわるいこと等も氣にとめる譯には行かなかつた。

然し實の所和服のものは自然にそれらを氣にせずには居られなかつたさうと思ふ。そして少々不平を洩した者もあつたがそれは決して行啓あることのためにこんな目にあふのだとは毛頭思はず只雨がふるこゝろが小にくらしく思はれたさうであつ

たのだと思ふ。自分もその一人として教へることが出来るから。もつと修養出來た人々はこの一時的突然的の不幸に對しても不平は云はないだらう。考へ及ばないであらうと思つた。然し決してこんな雨をうるさく思ひ身邊に氣をまはすといふ事は今の場合いたし方のない事で敢て不敬だとは考へない、何となれば神ならぬ身にはこれが當然であり偽らざる所であつてこの事は平素に於てのみあり得る事でいざ本當の場合となると我々殊に縣女の生徒は特別に獻身的に至誠をつくすことのできるものであることを知つて居るから……。

## 五月七日 金曜日

四校時が十分早く終り十二時半より校庭にて又昨日の様に整列の練習あり。校長先生が殿下堀込先生が校長の代理をなさる。初夏のつよい光りが容赦なく皆の頭上にあびせかゝる。さうろに体に汗ばんだのを感じた。一時より本科専攻科の代表隊のみ練兵場に至り各女學校の代表隊と共に方向轉換唱歌敬禮等につき練習をなす。専攻科が最左なので中心となつた。今日タクトをこいつて下さ

## 五月十日 月曜日

つた男子の先生の聲が半オクターブ位低いのでその位の聲でうたふと妙な調子になつた。元山中の校長であつた梅林寺先生から批評やら當日の禮の仕方順序等についてお話あり。終りに原先生より「皆さんは縣下の女學生を代表して居るのだから充分しつかりやつて立派な所を今度殿下の御目にかけてねばならぬ」と仰やると縣女の生徒の中の者或は縣女が縣下のその代表者だ……といふ者もあつた。實際そんな時には縣女の生徒は妙に氣が高くなる様だが、それも仕方のない事であると思ふ。

## 五月八日 土曜日

午後より校内にて整列し奉迎奉送の練習をなす今日はほんとうの様な形式でなく、時間もほんとうの通りな長さをはかつてなした。二回練習したが、すーつと立ち通したので仲々苦しい。而も太陽がきびく／＼と照りつけるので倒れたり、列を外れたりするものが大變多い。ほんとうに今日はくたびれ足がふら／＼になつた。

今日學校へ消防夫か何かは澤山來て之も亦整列の練習をしてゐた。大そうやり方が滑稽だ。

## 五月十一日 火曜日

午後全校生徒は大掃除をなす。前の土曜日の時より一層きれいに床をソーダ水で拭くのだつた。私等は二年二部と代替に教官室の掃除をして居るが今日は二年の番なので早くかへつた。それで掃除施行の状態については不知。

本日東京職より本校卒業生の學校に於ける整列を許可する旨の御通知あり、又防疫課長とか言ふ方が見えてその方の談に「かつて長野縣に行啓があらうとした時、一教師が病氣に（流行性）侵された爲め切角の行啓が取りとめになつたと言ふ例があるから本校も、くれぐれも注意あれ……」とおつしやつたさうなので校長先生より組長を経て今後しばらくは一層注意して通學下校の途中は一切他所に立寄らない様に氣をつけよと御通告あり。今度照宮様の御土産として専攻科、裁縫科卒業生五名が貝塚先生の監督の下に講堂階上の一室内で謹製して居られる紅白襲の御召物はもう刺繡は終つて縫ふ事に取りかゝつて居られるといふ事をきいた。築瀬先生が又其の御模様を考案なさつたださうである。まだ見せて頂かないので實際は分らないが、金銀、諸種の色ごりの糸できらびやかにぬひとりとされて居るであらう御召物の美しさが想像となつて目の前に見える。出來上つたら一度拜觀させて頂き度いものである。

であるのに口惜しくも雨の爲め駄目になつた。弟の學校（附中）では今日初めて参加するのだから勇んで居たのに……

聞けば昨日の大掃除に本科の生徒が學校の周圍の石の圍を石粉で磨いたと言ふ事である。學校創立以來の砂塵が積つて居たであらうその石は千載一遇の今度の行啓のためすつかりおとされて面目を一新した。さぞびつくりしてしまつた事であらう。もしこの石に心があつたならばどんなにか感泣したであらうに……等つまらない變な想像までされた。この事によつて私は、こんなにまで皆んなが緊張して一心になつて行啓の日を御まちしてゐるのかと思はせられる度に或何ものか分らないが偉大なものが段々と近づいて來て居る様に感じさせられ、そしてそれがどんなものか早く確め度いと言ふ様な氣がした。

五月十二日 水曜日  
林先生と柴田先生のお二人がお休み、四校時が廿分前に終る。

午後三時頃より縣廳から掃除の検査に見えたので午

後大掃除をなした。然し一昨日も大掃除が行はれたのであるから簡單にしてよいと柳田先生がおつしやつたので教官室は四人許りだつたが割合早くすんだ私は掃除する爲めに玄關バルコニーに下りて長いすゝはきで手の届く限りをはらつた。日が大そう強くて足の下のふりきは足にやきつきさうであつたが、これもたまにはいい經驗だと思つて別に不平も何も感じなかつた。校門の正面で而も二階だからと思つて東側の掃除は特に氣をつけてした。

一時から校庭に出て常の如く整列の練習をなす、今日は縣知事さんの一行が當日通りの時間即ち二時二十六分頃に學校へ御着になりほゞほんどうの様な形の順序で行はれた。歴々の供奉、扈從者の中に我々は土屋視學官と中國新聞記者を見出した。土屋先生は私等が法制經濟を一通り御習ひした因縁でか何だか御心安い様な氣がした。縣知事さんを初めて見る事を得た。案外の御老年らしい。

今日は家事室へいらつしやる際には校長先生か御

先導であつたが理科室から御かへりの際には後になつて居られた。殿下を學校内に御とゞめ申しておく事の出来るのはたつた十數分間であるが、それが皆緊張してその事にばかり心をむけて居るのだから一層大變早く時が立ち、あまりにあつけない様に思はれた。——今日はほんどうの日ではないが、今日の結果から考へると、さう思はれた。

——當日は特にそんなに感じるだらうと思つた。

五月十四日 金曜日  
四校時に専攻科、本科共に講堂に入る。行啓、献上品等につきお話あり。献上品は明日縣廳へ送られるとの事、それで後直ちに専攻科生より順序に献上する緋と白のしをせ羽二重製の襲を拜觀した應接間と校長室の間が通じられて應接室のお机の上に御召物はかゝげ立てられてあつた。裕のかさねの振袖、上は緋、下は白、それに（表）鳳凰が三羽と菊と桐との模様が色々な美しい色糸でぬひとりせられまるで鳳凰等はさび出さうに見える程御立派に出來てゐた。まるで繪の様な氣がした。地色の緋が殊にかはいらしい感じをそゝり立てずに

はおかなかつた。長いお袖のあかいあの御召を召されて御養育係りの方にお抱かれ遊ばしてこゝして手等うちふり乍らうれしさうに何か分らない事をつぶやいていらつしやる所の照宮様の御姿が早くも眼前に幻となつてちらつく。あゝこの大任にあづかられた筑瀬先生、貝塚先生、卒業生其他在校生の方々の御丹精の結果はかくも立派な形となつて現はされた。やがては照宮様の御身に御つけする事が出来るかと思はれないのだ……何と勿体ない、かたじけない事であらう。

之を藏める箱は半疊位の大きさの桐製の箱だつたそれに緑の濃い晴々しい、紐がつけられてあつた我々は前から後からと観た。前に来れば後から、後に行けば又前から見たくなつた。

もつと近くで少しでも手に觸れさせて頂いたら……等叶はぬ願望にせき立てられて苦しんだ。ほんごに見ても見飽かないものとはいよく、この事だらう……とさへ思つた。

五月十九日 水曜日

今日校長先生から組長に今度の行啓の際來校され

ふものもあり。字引をひいてこようと言ふ真似目なものも居た。

まだ五分の一位しか出来なかつたがをそくなるから今日はかへり明日する事にした。

五月廿日 木曜日

四校時の体操がなかつた。それで昨日の仕事のつゞきをした。

今日は二年の二部の方も二部の方も手傳つた。今日は卒業生も一緒に練習がある筈であつたが雨が烈しく降り出した。それにも拘らず可成り多勢の方々がお集りになつた。校長先生はこれらの人々を集めて何か行啓に關するお話をなさつたさうである。

六校時のお修身の時間もあの仕事のつゞきをしたとしてどうも皆すませた。出来て見ると譯なく出来る事の様に見えるものである。

五月廿一日 金曜日

午前中三校時迄授業をして午後練兵へ行く。朝はまだ豪雨であつたのでその用意で登校した午後になると急に雨が上つて日さへつよく照り出したの

る方の控所や整列の位置、御通路を圖示したものにそれらの記入をする仕事を三年二部生に委任された。一尺に一尺二三寸位の大きな紙で五百枚許りもあらうこの事であつた。圖をかいた時一緒に記名をしたらしいでもあつてよさうなものだつたのに、まだよく場所の決定も出来ない中に圖をかかれたものとするよほざ行啓準備に急がれたといふ一証例にもなると思つた。

今日放課後本科の中島先生(地理の先生)の御指導の下に私達は會議室内に於て午後五時迄仕事をを行った。黒のインクペン先も一定のものを用ひ楷書で(成るべく)丁寧にかいた。割合はかざらないものであつた。何だかこわい氣がして、一字かくにもペンが何度も止まり勝ちであつた。初めはどうした事か妙な字を誤つてかいた。自動車員の車を者にしたり、動を働としたりするものもあつた。平素は平氣で自動車とかくであらうのに、今日は動と言ふ字を大いの方がちがへて先生ですら他の先生と問答をなさつた位だつた。が動かい、だらうといふ事になつたがイをつけても同じだとい

であつた。私は止むなく學校に止らねばならなかつた。三時にならぬ中に終つて皆がかへつて來ると又雨がふり出した。これが今頃の練習日和なのであらうか!

五月廿二日 土曜日

二時間程授業して直ちにお辨當をすませ十一時、校門を出發して練兵場に向ふ、縣女の代表隊は他より先であつた。二人に一本づゝ傘をさして行つたのであつた。何だか妙な氣がした。代表隊は他の一般の生徒の來る迄に一通り練習をして居た。一時半頃より本式の練習をした。歡迎門も大体出来た。御殿も殆ど完成してゐた。が、あのみどりのあざやかな杉か何かの葉の色が廿五日迄に變りはしないかと思配になつた。小雨が降るにも拘らず觀覽者が可成り澤山あつた。幸に練習中は雨は上つて居た。

やがて兵隊、中學生等の分列式が初まる樂隊の一種言はれぬ感じのする奏樂につれてそれらの各隊が勇しく進み出た時には頭から冷水をかぶせられた様に全身がちぢみ上る様に思つた。やがて靜肅

な廣場の一方で長く余韻をひくラッパの一聲が起るや國旗のつけられた自動車——御召車の代りが入場した。そして次々に御親閲の練習が行はれる。立つて居る我々大變苦しいけれどもお馬に乗つてあの廣場を一周なさる方は大そうお暑い事であらう。殿下もこうしてひきつゞけ、各地で御親閲なさる事であらうが、誠に恐れ多い事であると思はせられた。今日はまだ地に水が溜つて居る所が多かつた。水等には氣をさめずに進む様にと御注意が度々行はれたけれども靴に水が一ぱい入つて歩く度にじゅい／＼と音をたてれば自然に下にむき勝ちにならざるを得なかつた。それを強ひても平氣を装つて進まねばならなかつた。専攻科の代表隊と本科五年生の所とはいつとも乍ら水の多い地にきまつて居た。そして毎日の位置がほど一定して居るので大きなたまりはいつも私の前後、下よりはなれない。

この練習の時の水溜りは行啓に關しての記念として、後迄も忘れられないであらうと思ふ。然し今日も常の例に洩れず靴に水が侵入して幾度か乾い

ては入り／＼した。一通りの練習が済み後唱歌隊だけは二度唱歌の練習をなす。今日は割合によくそろつたけれども廣い場所の所々ではなれ離れにうたふのだから一所に居てきく者には一方の聲しかよくきこえず、又速さも異つて耳に入るべき筈だと思つた。

三時過ぎに終る、今日は往復共に偕行社の方から行つたり、歸つたりした。大變につかれた。

五月廿三日 日曜日

うるさい雨もやつと今朝あたりから上つた。今日は平素の如く學校に行き、九時半頃出席をお取りになつた。そして小林先生から今日や今日以後の行事についてお話あり。後に大掃除に取りかゝる。十二時過ぎ一通り終る。階下は大消毒を行つた。掃除の終つたものは校長先生のお話のある迄の時間を各々利用した。私達三年二部生は校長先生の命で全校の掃除をなして居る様子を巡察した。何だか歴史で習つた青木昆陽の甘藷の植ゑつけの視察の様な氣がして妙だつた。皆白く太い足を出してせつせと板をする硝子窓をみかく、當日授業

のある室及びその道筋の廊下は別してひどく熱心にどぎはがされて、汚れ垢と共に艶迄もなくなつて居り一心になつてすりにすつたであらうと言ふ事が明かに認められる箇所もあり中には新築した所の様なものもあつた。兎に角もとの黒いつやも失せて全く感じのちがつた、白木の少し古い様な様子になつて居た。理科實驗室の前の廊下に比し階段教室の前はきは立つてきたないのが物足りなく思はれた。實驗室には新しい戸棚が二つも後に据ゑられ各々の机上には澤山のきれいな試験管、薬品の瓶等がいかに美しく並べつけられて居て、いかにも行啓の幸ある日を待ち受けて居ると言ふ氣分が漲つて居る様に思はれた。掃除がすつかり済むと一同は素足で教室に出入した。

ピンポンをして居る連中も素足、益田先生がいらいらつしやつたのでそれに挨拶なさつておいでになる小林先生も素足のまゝであつた事は一寸滑稽を感じた。毎日かうしてはだして教室に出入したら……等とも考へたりして皆と笑つた。四時前講堂に入つたが私等はこの時もやはり、はだして入つた。

一部分の方は上靴をはいていらつした。

校長先生は「先生方を初め生徒諸君が熱心に校舎の掃除をして下さつた事を感謝致します。至誠にして動かざるもの未だこれあらず……で、諸君の誠意も必ずお上に通じるであらうと思ひます。……とおつしやつた言葉の中には大そう御満足の御様子がかゞはれて私もうれしかつた。次に廿四、五、六日の予定行事についてお話あり、それから廿五日午前十一時東宮太夫より召され齋藤校長に特別拜謁を仰せつけられる由の令を承つた。これも決して私一人が偉いのも何もない、先生をはじめ皆さんが、お互ひによく學校のためにやつて下さつたからで皆に喜んで頂きたいと思ひます……この言の中には、或緊張した嚴肅な氣持や態度があつた。堀込先生より予定行事、整列の時の注意服装等について御話や御注意あり、講堂より出て唱歌隊のみ練習をなす。時に三時半頃、私はかへりがをそくなるので早くかへして頂いた。

五月廿四日 月曜日

午後一時半迄に校庭に集合した。西門より通行す。



いよいよ今日我が廣島に入御せられる我が皇太子殿下を練兵場に御迎へするべく西門を發して西練兵場にむかふ。和服のものは紋付であるが、それは裕のものも、單衣のものも又中には綿入れのふわ／＼したのをさへ禮々しく着て我慢して居る連中もあつた。今の頃紋付を着るのは稀な事であるから……小雨が降り出したのには小々氣折れがした。新聞に云つて居た如く、今後三四日だけでもいゝからどうかお天氣であつてくれ、ばいゝのに願祈して叶へてもらひたい。否皆心中から祈つて居るのだつた。縣女が又第一着をしめた。奉迎門から大本營に至る眞直ぐの一本道の兩側に各、中、女學生整列し其他の人々も並んで我が日嗣の皇子の思へばはしめての御入廣の時をまちかまへて居る。約二時間あまりも空々なる時間を過した。が常の空々と言ふ意味とは少々違つた意である。が初めは列をはずして待つたが四時頃よりきちんと並んで、もう息をはずませて耳をすませて合圖の音に氣をつけて居た。これまでに雨が半分降つて専攻科は三本許りの傘の下に頭だけを押し入れて

一時の雨やごりをした。突然遙か東南——廣島驛の邊りで、上げたらしいボン／＼と云ふ勇しい煙火の音が靜肅の廣場の空氣を破つた。つゞいて盛にボン／＼と音がする。あゝ我が皇太子殿下は今しもこの廣島へ第一歩をお下し下さつたのだ。……と思ふともうたまらなく胸がぐら／＼する。四時十一分過ぎ(十二分にならない中)いよいよ殿下の御召自動車は一台のオートバイ、一台の自動車の先導に護衛されつゝ、廣島縣民百有六十万の赤子の心のどん底からの至誠を表象したあの奉迎門を通過して嚴かに、兩側に頭を並べて御迎へし奉る人々の間を御通過遊ばされて直ちに大本營へと向はせらる。三台目が殿下の御車ときいて居るので敬禮も心ではつと丁寧にご思ひつゝ形ではそれは／＼して急ぎ勝になり、只殿下々々と頭は左に右に互にうごかして殿下の御龍顏御英姿を拜さうともがいた私もその一人だつたが何分右側即ち殿下のおいでになる方は我々の男女の先生方や工業専修學校とかの大きな高い人々が澤山居られるので遂に殿下の御顔は一寸も拜されなかつた。

その中自動車は通過しようとする時殿下は白い御手を御舉げになつて向ふと私等の方へと會釋を遊ばしたのかやつと見えただけでも殿下の御車は行き過ぎて只殿下の御背部の上の方と頭の軍帽とが見えるだけだつた。御顔を拜する事が出来なかつた事が口惜くて／＼勝負事に負けでもした様な氣がしてなさけなかつた。が明日といふ心強い頼もしい期待の日のある事によつて慰められて歸宅す。母の弟は今日よく拜んだ。丁度僕等の前でこちらにおむきになつたんだから……とほこらしげにまだ拜し得ないものに話して居た。又幸にも廣島驛のプラットホーム内に入る事を許れて居たため殿下が列車からお下りになる所から御自動車に御乗りになる迄よく拜されたと言つた、そして汽車が停ると直ちに殿下の御室の窓は霧の様なものでは／＼と自然にくもつて内部が分らない様になる様になつて居たさうで大變恐縮に堪えない事である。却て悲しく思はれた。父は幸福な人である。恐れ多くも殿下が大正九年に歐洲から御歸り遊ば

された際にも廣島縣在郷軍人の代表として御歸朝の殿下を奉迎するために東京へ遣られ、御馬に召されて御所に御元氣に御歸り遊ばしたのをよく拜する事が出来た。そして翌日は伏見宮邸とかに招かれて參上するの榮に接し方々おそれ多い事のみであつた……等と以前東京から歸つて言つて居た又東京の戸山學校とかに居た時今の天皇陛下がまだ皇太子で居らせられた時御前で徒歩競争や其他の競技をして、殿下の御前を夢中で走つた事もあるとも言つて居た。弟は明日は學校においでになるからよく僕は拜むよ……と今日御迎へしなかつたので少々まけず魂を出して言つて居た。母も明日は拜みに行かうと妹に言つて居た。

五月廿五日 火曜日

大正十五年五月廿五日五の字を三つも有する今日こそは實に／＼我が一生を通じて決して忘る事の出来ない日である。今朝起きて第一にお天氣を見に外へとび出た事だけは知つて居るが、それから後古江の電車の驛で村長さん夫婦の方に(禮服をつけて居られた)逢つて奉迎に行かれるんだなど

思つたまでにはどう思つてゐたかそんな事をして来たか、一寸も分らなかつた。電車は朝早いのもう満員、石つぶをつみこんだ様にぎつしり頭を並べて居るのでまゝもせず通過してしまつた次の漸くの事で無理に乗れた。六時半頃迄に校庭に集合し七時頃、中島先生の今日の整列等につき御注意のあつた後裏門より出發し今日こそは本當の御親閲式に列するのだ……と思ひ乍ら行く。町の通りの兩側には赤白の帷が晴やかに張られ、國旗は平和のシンボルの如くそよ風にひるがへつて居る。人々の顔にも只ならぬ活々とした色が見えて居る。縣女が今日も先頭第一着だつた。西練兵場の隅々にはもう早くから奉迎人がまぢかまへて居る。

この廣場には輝しい初夏の太陽の光りが漲つて丁度今將に御親閲に與らうとする殿下の御仁慈御威徳の光りの如くに思はれた。實に我々は幸せられたる民である事——一昨日迄は連雨で昨日とても時雨日和で心細く感せられたのであつたが、今日のこのあつらへた様にきつぱりと晴れ渡つた絶好

の日和はさうした事であらう——何と言つても十六万の我が廣島市民否々、百六十万の縣民の赤誠の照らしめたものとしてか思ひやうがないではないかこの好天氣のためにどれ程多くの幸福が附加される事だらう。歩けない様な老人老母は乳母車にのせられ、こつ／＼歩けるものは家族のものに手をひかれたり等して、晴れのこの場に勇んで出て来て居る。

彼等も余命少い身にあまる光榮さぞ喜び泣く事であらう。私はこれらの人々の爲に涙もて喜ぶ、中には赤い緒のついた草鞋を穿き赤い裏のついた襪を着て出て来た老母もあつた。これらの人々は大てい杖も持つて居るが、誰かにつれられて居る。こゝに我が國の美風、家族制度の特質があるのだ。美しい事だと思つた。やがて九時二十五分突然大群集の静かな集ひの空中に勇しく而もおごそかな喇叭の合圖が起ると、殿下は御泊所大本營を出御遊ばしてすゝつと東側を過ぎて小學生等に迎へられつゝ、幼年學校へ向はせられる。しばらくして、生徒の擊劍の野試合が

初まつたらしくワイ／＼といふ聲がきこえて来た。幼年校から我等の裏を過ぎられて商陳品列館においでになつた。そして午前十時半(實は三分許り早かつた)練兵場の入口の方に當つて殿下が奉迎門下に御見えになつた合圖のラッパの音がひゞき渡つた。一齊に「きをつけ——」とおそろしい程大聲にきび／＼しく號令がかかる。やがてオートバイ(一台)の先驅でこれにつゞく一台の自動車につゞいて殿下の御召自動車は音もおごそかにさ／＼と軽く音を立て乍ら入つて来た。と思ふ間もなく早や我々の眼前に殿下はおいでになり左に右に御會釋をあそばしつゝ。歩兵十一聯隊の營門前の廣場迄いらつしやつて、そこで下車遊ばした。やがて君が代の奏樂裡に御英姿堂々御愛馬初緑に召されて、東側より順々に各團役員、軍隊、在郷軍人、幼年校生、中學生、女學生、郡部代表團役員等に御親閲あり、殿下の御前に徒歩の一軍人が御先導申し後は數十名の供奉員がつゞいた。やがて殿下は我々の前においで遊ばされ白の手袋をつけさせられた御手をお舉げになつて御敬禮を

賜ひ、而もいとも御丁寧な御禮で長い間御手を上げておいでになり、御手が下るや否や又次々と上げていらつしやると云ふ御様子で誠に恐縮に堪へない事である。と思はずには居られなかつた。新聞紙の報ずる所によると殿下は軍隊在郷軍人等には特に親しく會釋をたまひ、今にも御言葉さへ出づるかと思はれる様であつた。又中學生には「第二の國民たるべき汝等、しつかりやつてくれよ。」と仰せられんばかりの御容態で丁寧な御答禮遊ばれたさうである。我々の眼前に殿下の御馬の見えた時は只夢心地で神様か何かを夢見、幻に見て居る通りな心持であつた。御馬がやがて行き過ぎると、我にかへつてあゝ殿下!と言ふ親しみ深い國民的な情が湧いて来て、殿下の後を追つて行けるものならどこまででも御伴をして行きたい氣がした。親閲が終ると殿下は御座所に立たせられて分列式を御受け遊ばされた。そして又一々御鄭重なる御答禮をなさり御顔さへ少し下る程にも思はれた。分列式は悲壯な程も緊張して居て、海軍のあの軍

樂隊の奏樂に合せてすゝみ出る中學生隊等を見る時には自然に熱い涙がわき出た。何とも云はれない全く云ひ様のない真に迫つた感情に胸は閉ざれて思ふ存分叫ぶか泣くかしたい様な氣がした。次に我々代表唱歌隊は樂に合せてすゝみ出た。一度方向轉換をして、殿下の方にむかつて止つたまでは何も分らなかつた。後で考へて見るといつも氣にする水たまりの事すら今日も猶ほ水が大分あつたに拘らず一向思ひもよらなかつた。専攻科の方が最東で隊の中樞をなして居たが殊に私は一番東の列であつたのであつた。整列して敬禮すると殿下は丁寧な禮を遊ばし、私が頭を上げて見るとまだ御手をお舉げになつていらつしやつたので、もう一度禮をしようと思つた位、おそれ多く感じた。やがて樂隊長タクトを取られ我々はあらん限りの聲をふるひ出して「あーまーてーらーす……」どうたひ出した。いつもよりか聲が大きかつた。「天地と俱に國あり」と言ふ所に來ると、自らポロ／＼と大きな涙

が流れて頬を傳つた。且つ意識を半ば失つて唱ふ文句も誤り勝ちに、自分の他とちがつた聲、ことばにおどろいて口をあはて、つむぐといふ様な事も二三度あつた。あちこちからは涙に咽ぶ聲、すゝり泣きの聲がきこえて來る。殿下は合唱中に二度許りも御うなづき遊ばした如くに思はれた。あゝして我々のなす事を御覽になつていらつしやる殿下はどんな御心持がなさるだらうか……等と考へたりした。合唱が終ると奉迎式にうつり知事の奉迎文朗讀があつた。可成り明瞭な大きな聲であつたので「……光榮この上もございません。……」の覺悟でございませぬ等の文句は、はつきりときこえた。式後知事の先唱で萬歳を三唱し天地も動けよと許り大聲に萬歳、々々、々々とさげけんた。殿下は階段をお下りになり、御召車にて又奉迎者の前を過ぎて縣廳にむかはせられた。時に十一時十五分、私等は直ちに歸校し晝食は各所ですませ、午後の期待して居る殿下の本校への行啓を一途にまつた。午後一時過ぎて常の位置に整列し二度練習をなす。警官が來て御道筋をしらべた。

二時すぎると一段と静かさはまして來た。折からあはたゞしい自動車の音に一同ぎくりとして耳をかたむけると、それは今しも控訴院にお成りになつたのであつた。かれこれする中突然氣をつけーがかゝたので、威儀を正し敬禮する、早や殿下は校長先生の御先頭で早やくも露台の側迄おいでになつて居た。

直ちに白木の露台の上にお立になり直ちに御丁寧なる敬禮を遊ばして豫想外にも永い間舉手のまゝ、であらせられ終つて後は、左、右、正面三方に親しく御顔をむけられ如何にも皆に御言葉でもお下し下さるかのように伺はれた。私等は今眼前の君は我が一天万乗の大君の日嗣の皇子であると言ふかはなれた尊嚴以上にもつと直接的に然も深く肝に感銘したのは我が御慕ひ申す皇太子殿下……と言ふ親しい感じそのものであつた。何人も必ずこれは感得したにちがひない。私は殿下の御姿の見える間見守つた。寫眞屋はこの間（露台の上）いらつしやる間に御寫眞をお撮りした。後から

の話をきくと、殿下の敬禮なさつていらつしやる所を御撮りしようとしたが御顔が丁度光線の工合が悪いので躊躇して居ると殿下は御氣附きになつてか、御手を御下しの後殊更らに寫眞機の方へ御向き遊ばして下さつたので、寫眞屋は誠に恐れ多くどうしてよいか分らない位だつたと片山寫眞屋の御撮影係りが言つたと言ふ事である。殿下の御平民的で御いつくしみの深い事はこの一事が充分過ぎる程も明かに証明して居ると思ふ。殿下は廊下傳ひに家事室に成らせられ、二三年（専攻科）家事科生の寺地先生の授業を御覽になつた。西端のそこから更に化學實驗室に成らせられる際又きちんとして目送する。校長先生は走らん許りの歩調でいそ／＼としていらつしやつた。化學室では予定より一分許り永く居られた。やがて君が代の合唱裏に殿下は脱帽遊ばれて校長、知事より大分をくれて玄關に御立ちかへりになつた後で校長先生から承つた所によると、君が代の時は

常に直立不動の姿勢をお取りになるが今日はつとつと歩いたので、止むなくお歩きになり、生徒等に答禮遊ばす爲に窓近くよつて外の方へむいて御ゆつくりとお歩き下さつたのであんなに後れて玄關口へお出でになつたのだとお供の方がおつしやつたとの事であつた。誠に殿下のたどしへない御性格、御威徳の光りは無言の中に我々を強く射た。我々は活きた御手本を今までのあたりに得た。

あゝ、殿下の御英姿はもう我が校門から去つてしまつた。今一度……といふ慾念が押へられな

い。あゝ、殿下の本校行啓は夢の如く立去つた。二時五十六分(前)より三時十一分(實は十二分)迄の間だけ我が校に殿下を御留めする事が出来た。然しその時間の如何にかゝはらず後に迄も残る記念はずつと偉大無限なる力づよいものがあらう。

我々は實際奮起せずには居られない、日本國民として我が皇國の一子として、かくも御忙しい、御

苦勞なる殿下の御身を思ふ時、ごうかして、といら／＼せずには居られない。私はこの時を機に何等かの形に於てこの記念すべき行啓に謝する意に於ても立派な事を何かしなくてはならない……と自覺した。

殿下御かへりの後寫眞屋が二階から寫眞を取つたかへりに旅館から田舎者らしい人がそろ／＼出るのを見た。電車通りの側にはむしろをしいた老人等がまだ居た。

今夜市内、高、中、小、及一般人民の十万からの人々が西練兵場で提灯行列が行れた。弟は行つた。

殿下は君が代中に御出御遊ばされ答禮なさつて仕かけ花火等しばらく御覽あつて後、御かへりになつたさうである。廣場一面火の海と化した景は我が目前にちらつく。

五月廿六日 水曜日

朝十時迄に登校する事になつて居た。一同講堂に入り十時四十分より校長より本校行啓に相成つた事、昨日の様子感想等、色々とお話あり、私等は速記しようと思つたがなれない爲めごうしても

つゞけて出来なかつた。

あまり校長先生は堅くなりすぎていらつしやつたといふ實例につき笑つたが、之も今となつての事でその當時はほんとに眞剣であつたのだから却つておそれ多い事であり、後の思ひ出の種ともならう。お晝前にすんだが、もう一度殿下を拜したいと思ひ白神社の所で高師へ御成りの途上拜した。

この時は近くもあり案外速度もゆるく、又殿下はこちらにおむきて下さつたのでこの上もなくよく拜めてうれしくてならなかつた。が慾なものでもう一度と思ひ鷹野橋迄行つたが、高師から御出になる十分前だつたので高師前は電車を兩方から横にふさいで向ふへ行く事も出来ない人垣で一寸も見えないので、口惜しい／＼と云ひ乍らひきかへした。今日は二時五十分比治山から御泊所へ御かへりになる筈。廣島市の二日に渡る御行幸も事なく實に都合よく了へさせられた。今晚が最後の廣島市への御宿泊である。

五月廿七日 木曜日

校友會記事

午前八時三十五分、御名残りおしくも大本營御出立、八時五十分廣島驛御出發で呉に向はせられた。今日は三年甲が御送りし私等は行かないのが何だか物足りない氣がする。御送りした弟の話によると殿下は海軍服で堂々としていらつして大そう御立派であつたこの事。

午後二時七分御召艦長門で嚴島沖へ着、嚴島神社へ御參拜、夜八時半より廿日市地御前沖で三万の燈籠流しがあつた。家内の大部分は觀に行つた。

私は行かなかつたが、家から少しは見えた。我が佐伯郡民の至誠は通じてか、殿下は大そうきれいだとおよろこび下さつて小さい艇に召されて廣い水上の無数の燈火の間をあちこちと御めぐりになつたといふ事である。陸の提灯行列、海の探照燈と相應じ水陸共に火でつゞまれた壯觀は永久に記念すべき一現象だつたらう。

この日、神社へ御參拜の後御微行で御予定外にも彌山登りをなさつた。佐伯郡長が御先導申したが、この時知事に頂上迄の位かゝるかを御質問あり一時間位はかゝりませう。と申し上げると、では

三、四十分で上らう。ささも愉快さうにおほせられたさうである。そして御軽快な運動服に中折帽姿でどしどし上つていらつしやるので御伴の人も少からず弱り得がちになつたといふ事である。殿下は侍醫を待つてやらうと仰せられたが二三分間御立どまりになつたのみで約五十分でお登りつきになり大變御元氣にあらせられたさうである。殿下は郡長にハンカチを忘れたから借してくれ……とおつしやつたさうである。郡長は恐れ／＼新調のハンカチを御借し申しそれを永世の記念として保存しておくよと云はれたさうである。何といふ御平民的な殿下ではないか。全く義即君子情即父子の關係の發現そのものである。

夜は軍艦で嚴島沖に御停泊遊ばされた。

五月廿一日 木曜日

今朝十時半頃本縣人の最後の奉送を受けさせられつゝ宮島驛より汽車で山口縣へ御出發になる。五日間の行啓が大變をしくてまだどこかで殿下を拜したい様な氣がする。にくらしい雨が燈籠流しすむのを首を長くして待つて居たかの様に今日は

朝からざ／＼と降りつゞける。山口縣の行啓は御氣の毒だ、それにつけても我々のそれは實に惠まれたものであつて他に對して却て氣毒過ぎる位に思はれた。  
あゝ……皇太子殿下の行啓もすんだのだ。これからはその御追憶のみをする許りになつたのか……六月二十二、三日 土、日曜日  
陳列館で行啓記念の爲め婦人會の方々の主催でバザーがあつた。

專攻科第二部第三學年

石川輝子記



行啓前後の日記

▲五月廿二日

東宮殿下行啓の日は段々と近づいた。颯爽たる、御英姿を拜し奉り得るのも、もうすぐだ、千載一遇の此の佳き日を迎へる事の出来る。歡喜の奉迎氣分は、最早や廣島全市を掩ひ、すべての階級、すべての人の話題は長くも、此れ唯、東宮殿下行啓の事でのみで有る。

まして第一日目の行啓、個所として、此の榮ある日に、臨まんとする我が校に於ても大掃除、大消毒を除く外殆んど全く、奉迎準備成り多少、手後れの万般設備も明々後日中には、晩くも完成するのは勿論で有る。

此の日、御玉歩を運ばせ給ふ博物室へ通ずる廊下は早くから、不用物を除かれて窓越しに見える。植物園の若葉はシト／＼と降る初夏の雨に、つやく／＼しく光つて居る。

第二校時の授業が終ると、專攻科三學年及び本科四、五年は小雨の中を、下級の人達より先きに、第四回目

の豫行演習をなすべく、西練兵場に向つた。雨にけぶる西練場は静かで、中央に設けられた假御便殿の杉葺きの屋根が、雨中に浮び出されて居る。定められた場所に落付いた私共は唯、他校の來場をのみ待つた。やがて市女、山中と紙屋町入口は學生でもつて埋められ、唱歌隊の全員は揃つて整列の練習が始まつた。

此の頃雨は、私共の誠意が通じたのか全く晴れて集つた皆は豫行演習の、始まるのを待つて居た。唱歌隊の練習が終ると、いよく第四回の豫行演習は始まつた。順序は、前日の通りで徐々に進行した。やがて分列式が終り唱歌隊が御前へ出て國民歌の合唱をなし後、萬歳三唱に送られて假のお召自動車は紙屋町奉迎門の方へと走つた。かくして最後の豫行演習も、嚴肅に且つ盛會裡に終結を告げた。  
(四北 佐野)

▲五月廿三日

今日は日曜日ではあつたけれども何分行啓が明後日に迫つた爲に生徒全部登校して大掃除をする事に定

まりました。

登校時間は午前八時で堀込先生より今日の掃除區域を定めて戴きました。

其の割あては

- 一、校外係 (杉山先生、村瀬先生) 四東、二東
- 一、前庭及玄關係 (中島先生、渡邊先生) 四西
- 二西
- 一、御通路廊下床係 (梅先生、重松先生、村田先生) 三東、中
- 一、通路西側戸腰柱係 (佐久間先生、關口先生、高山先生) 三西、二中
- 一、硝子窓係 (中島先生、牧村先生、松浦先生) 三南、北
- 一、家事教室 (寺地先生、末廣先生、高野先生) 專三、二、甲
- 一、化學實驗室 (伊南先生、内村先生、塚部先生) 四年 五〇人
- 一、幕 係 (田村先生)
- 一、便所掃除消毒係 (政池先生) 四南
- 一、藥品調製及分配係 (熊田先生、高橋先生)

一、應接室校長室事務室係 (林先生、柳田先生、貝塚先生、佐竹先生、水戸先生)

專一、二、三

- 一、理化教室係 (柴田先生、福島先生) 四、中
  - 一、教務室 (椎野先生、小林先生、村重先生、村田先生) 五、補 二、南
  - 一、北 庭 (久保先生、大和先生) 一東、西、南、北
  - 一、中 庭 (石井先生、松谷先生) 一中、二北
- 組1-3は各受持の教室をなし2-3が各々割あてられた教室に行く事になりました。
- お辨當は雨天体操場に置き皆かひくしい素足で大清潔大消毒を行いました。
- 各々擔任の先生の指揮によつて極力清潔に力の千余名の誠心誠意の働きによつて校舎は見る／＼に綺麗になりました。
- 中食をして後も再び掃除に掛つて一時頃、全部掃除を終へて講堂に集合して校長先生より二十五日の行啓の豫定のお話が御座いました。
- 午前九時 廣島御泊所御出門 御徒歩五分

- 一、第五師團司令部 九、〇五着 九、二五發
- 一、廣島陸軍幼年學校 九、二八着 九、四三發
- 劍術 野試合の台覽
- 一、廣島縣商品陳列所 五、四六着 一〇、二六發
- 物産及献上品御覽
- 一、御親閱場(西練兵場) 一〇、三〇着 一一、三〇發
- 一、御親閱 (軍人、學校生徒、青年團)
- 二、分列式 三、唱歌 四、知事奉迎文朗讀奉呈
- 五、萬歲三唱

- 一、廣 島 縣 廳 午前一一、四三着 午後 一、一三發 御晝餐
  - 一、陸軍運輸部 午後一、三八着 二、〇八發
  - 一、廣島控訴院 二、三三着 二、五三發
  - 一、廣島縣立廣島高等女學校 二、五六着 三、一一發
- 授業御覽になる事又校長先生の言上なさる事等、

くわしいお話が有つて後堀込先生より當日の服裝に對する御注意が有つて四年五年專攻科の唱歌隊は村瀬先生、中島先生、堀込先生の御指揮により整列の練習をなし四時十分下校した。(部員 山崎)

▲五月廿四日

連日の曇りの影は全く消え去らなかつたが、かへつてそれが立昇る塵埃を蔽ひかくして日嗣の皇子の御車を御迎へ申すにふさはしい今日、東宮殿下には福山の奉送裡に鶴駕を廣島に進め給ふのである。私達は廣島市民として廣島縣立高等女學校の生徒としてどんなに今日を歡喜感激に高鳴る胸を押沈めて御待ち申し上げたう。

本日我校では全生徒の二分ノ一が西練兵場において四時廣島に御着き遊ばず殿下を奉迎申し上げるのであつた。悉く道々の家には紅白の幔幕を引きまはし軒に提灯を下げて十九万の市民の熱誠こもつた奉迎氣分は遺憾なく發揮せられてゐた。紙屋町に設けられた若緑匂ふ大きな奉迎門から大本營入口迄の御通路には一面に玉沙利を敷詰めて塵一つさへない様に

箒目正しく掃き清められてあつた。その御通路を中心にして市内各中等學校の生徒は隙間なく整列した。大本營入口近くに並んだ幼稚園の生徒及び同じカーキ色の制服に小さい体を包んだ少年團の人達は可愛らしかつた。それより少し隔つた所には盲啞學校の男女生徒が整列してゐた。見るにも語るにも思ふにまかせぬそれ等の人達の手まねで自分の意志を相手に傳へ様としてゐるのを見ると同じ光榮に浴する身ながらも同胞の不遇が思はれて思はず涙ぐましくなつて來た。やがて四時過ぎたであらうと思はれる頃、東方に當りて數發の銃聲が起つた。あゝ今御召列車が廣島驛に着いたのだ。

私達は神經の一本一本が急に引しまつた様な感を覺えた。續いて絶間なく銃聲が起つて空高く千切れ雲にも似た白煙がむく／＼と湧き上つた。一言も口を大きく音すらない。堪え切れぬ歡喜感激を秘めた沈黙の幾分かゞつゞく、間もなくその靜寂を破つて爆音すさまじく一台のオートバイが疾驅して來た。續いて御召自動車も近づいて來たらしい各所で「氣

を付け」の號令はかゝつた。

一台目の自動車は近くまで來たらしい時私達の所へも「禮」の號令はかゝつた。前から二番目のがそれと豫め承はつてゐた私達は敬禮をするに逸早く瞳を移した。

御車の御内には軍服を召した殿下の御姿が拜せられた。その瞬間何とも云へない尊さを覺えたがそれと同じに強く御懐しさの念が湧いて來るのを禁ずる事は出來なかつた。間もなく御車は大本營内に吸込まれて了つた。後には玉沙利の上に歴然とわたちの跡が残つてゐた。何だかまだ物足らない様な感情があつたが私達はそこで直に解散した。しばらくは聲も出なかつた。

「誰よりも一番なつかしい人に會つた様だつた」と云ふみんなの言葉は不思議な程一致してゐた。併しこれは何の不思議でもないだらう。同じ八千万の同胞に同じ血の通つてゐる事は當然である。この廣島行啓の第一日にかくも深き感激を覺えた私達は明日の光榮を夢みつく元氣に歸途に就く

(四東 赤川)

▲五月廿五日

初夏の香が深緑に濃く漂ふ大本營の奥深く皇太子殿下御行啓の第一夜は明けた。私達市民の等しく待ちに待つた喜びの日は來た。天もこの日を壽いでか昨夜の雲を遠く彼方に追ひ、残るは只美しく輝きまざる旭光のまぶしさで涯なく蒼き大空だけであつた。私達は悉く歡聲を禁じ得なかつた。

殿下には今朝も常の如く六時に御起床遊ばされ御朝食の後お手植があつた。又有資格者に拜謁を賜ひ後、幼年學校に行啓。その次は商品陳列場へ成らせられ重要物産品御前作業等台覽あり、その後に御親閱式があつた。私達の遊山と異り殿下はかうして朝から御暇もなくゐられるのだ。偲び奉りては恐懼の餘り言葉も出ない。そして心から至誠を以て君に奉せんことを誓つた。

一方私達は六時半に學校に集合して列を整へて西練兵場に向つた。こんなに早いのもう一般民衆が奉迎門のあたり押よせてゐた。一旦整列してから次の合圖迄休む。十時五十分殿下の御車が御着きになる。殿下は御馬

に召して十一聯隊の方からおはいりになる。君が代の奏樂の裡にお進みになり御親閱あらせられた。終つて假御座所で分列式を御覽になつた。一同は國民歌を高唱した。知事は各團體代表者を引率して御前で朗讀した。後萬歳を三唱して終つた。その式の感じは只もうれしく尊くおそれ多くておのづこ頭が下つた。殿下の御英姿が現れると皆等しく水を打つたやう一人として咳をするものもない。あの時の心こそ眞に清く誠の心だつた。

殿下の御慈愛深き中にも冒すべからざる威嚴をお具へになつた御風姿。吾が國の擧よ。我が民の幸。世の誇である。かうした時を得た廣島の喜び永く永く後に傳へたい。式が終つてもすぐには口もきかない。眞に感に打たれたといふべきだらう。

十一時三十分には縣廳に行啓になり先帝御遺愛の櫻樹に深い御感慨があつたと承る。午後は陸軍運輸部、控訴院に成らせられ二時五十六分いよいよ本校に行啓。先生、生徒共にいやが上にも緊張して御待ち申上げた。

卒業生も大せい集つた。一同校庭に集合し、授業を受ける者は教室にゐる。誰の顔もよろこびに満ち／＼て生氣あり其中にもどこか緊張した落付を見せてゐる。

君を迎へ奉る門の邊りは美しく掃き清められてある。其中先發の自動車がついた。人々は静かになつた。丁度時刻は二時五十六分御車は玄關に入る。校長の御案内で露台にお出ましになる。整列した一同に御會釋を賜ふ。そして長い間御止りになつた。一同はこんなにも近く拜し奉つて感涙にむせび眼前に忠君の閃きを見た。

又校長先生の御先導で家事教室に御成り、専攻科二三年の家事の授業を御らんになつた。こゝでも誰もが尊嚴な感に打たれた。此の間五分時。次には化學授業を御台覽。本科四年生は入口に殿下の御姿を拜して御なつかしく感じ有がたい餘りに涙を流した。鐵の反應について實驗した。殿下は一人々々隅まで御らんになつた。

そのいつくしみ深い御まなざしは先帝陛下を偲奉ることが出来た。これもわづか五分間しかし外のどの

人よりも私達は長いわけだ。實けんしてゐることも順序も始めの中は夢中だつた。しかし少しも忙てはゐなかつた。非常に落付いてゐた。中頃から何をしてゐるかやつと分り出した。殿下は成程と思召した所は領かせられた。ほんとに心の底から有がたかつた。こんなことは一生にもう二度とないと思ふと、恐多い餘りに身慄ひした。誰にも失策がなく先生も御満足私等もうれしい。伊南先生も今日は大變緊張していらした。今日のやうな熱のこもつた授業は再び經驗し得ないだらう。君ヶ代に送られておかへりになつた。後に承れば君ヶ代を奏すると殿下は直立不動の御姿勢にて終までお止りになるさうだ、それで私達が歌ふと殿下はお止りになつたさうだ。しかし一度でなく四度もつゞくので仕方なく帽子をお持ちになつて自動車迄いらしたこの御事。尊い御方でさへさうであるのにまして私等はよく心得るべきである。

家事教室迄の廊下に御奉迎申上げてゐる縣下女子中等學校長等にも御丁寧な御會釋があつたと承る。

有がたい程である。先帝陛下御記念の松にも大帝を

おしのびになつたのであらう。何だか始終御下問ありさうな御様子であつたと校長先生がおつしやつたしかし何分二分の超過があるので御案内する方で急いだらしいやうに拜する。

化學教室で私達は殿下の御靴跡を全部の人がさわつた。五十人もがさはるのと殿下の御足跡がきれいなとでもう消えてゐる。今日は之でもうおかへり遊ばすさうだ。

本校歴史に深くのこる事であらう。私達も日誌にはしくかいた。

夜は提灯行列があつた。人々は町々で列を組んで行つた。私も見に行つた。さしもの西練兵場も火の海。ほんとに日本特有の壯觀だ。遠くから来る二つ三つは田の上をどぶ螢火のやう。何時頃だつたか君が代を合唱して御所に向つて萬歳を三唱した。人々は散る。あの人。下は黒く上は眞赤。いくらでもつゞく。限りがないかと思はれた。こむので土手に上つてまつてゐる。殿下もさぞかし御満足のことだらう。あんなに押し押されながら大きく奉迎の歌を歌つてゐる。やつと少くなつた。螢合戦はあんなのかしら、

三つの出口の間を行つたり來たりする火。

出て本通りへ行く。四つ角は大混雜、交通巡査は在つて無いに變らない。兩側の店はみんな紅白の幕を張つて美しく映えてゐる。電燈の光もまぶしい。

飾窓にも奉迎の意味を出した裝飾が澤山見えた。押され／＼とやつと人の少い通りに出た。ほつとしたが何だか寂しかつた。こんな盛な奉迎振りには日本にだけある。實に美しい風俗だ。今日出てゐる人の誰の顔もみんな至誠を以て君につくすといふ色がほのめいてゐる。誰も眞面目に奉迎した。やはり日本人は頼母しい國民だと思つた。

#### ▲五月廿六日

待ちに御待ち申し上げて居りました皇太子殿下御成りも愈々昨日と濟んだ幸多き我が校。

今まで全校擧つて其の準備に餘念がなかつただけにさぞこほりなく芽出たく、其の日を終るここの出来た大きな安堵を見る人毎に感じる今日の朝十時より校長先生より當日の委しいお話があつた。講堂に入つて來た皆々はどんなに緊張して先生のお



口の開くのを待ったことであらう。  
今こゝに私の頭に残つて居りますことだけを書いて  
おかうと思ひます。

校長先生お話の大略（文章のつたない事は許して戴  
きます）

私は昨日の朝四時に起床致しました。空には一點の  
雲さへなく、たゞ大きな大きな青空でした。いはゆ  
る日本晴であたかも此のよき日を祝福してゐるかの  
様でございました。私は先づ日誌に今日は天祐だと  
記しました。心の奥よりこみあげる様なよろこびを  
感じる氣持よい朝で伊勢神宮、祖先に禮拜を致しま  
した。間もなくして寄宿舎の専攻科生徒が、心ばか  
りの御祝ひに赤の御飯をたきましたからと云つて來  
たときは、やはりうちの學校の生徒だ。しつかりと  
した心持であると思つた（と、さもうれしさうにお  
笑ひになつた。私達も其んなお顔を見るのは大へん  
にうれしかつた。）

午後いよく控訴院より我が校に御成り——御召し  
の自動車か門を御入りになると、其れより後のこと  
は、かねてより練習をして居りましたことですけれ

ども、唯々畏れ多くて、たゞ夢中でありましたので  
何もおぼえはありません。

（ほんとに其れが實際だと思ひます。人間もこん  
なにまでなつた時が貴いのだと思ひます）

かねてより殿下には御足が早いと承つて居りました  
ので其のつもりでは居ました。

職員、生徒、卒業生への御親閲は案外にお永くなさ  
つて下さいまして、おそれ多く、又幸福と存じてゐ  
る次第です。

専攻科家事、本科四年化學實驗  
右御台覽、いづれも親しく御覽下さいまして。

御趣味深く御見受奉りました。

（たゞ、恐懼おくところを知らずと云ふ様子で  
ありました、その言葉がくりかへされる）

奉送は君が代唱歌連續でありました。

御歸途廊下に於きまして、稍おためらひの御様子  
がおありでしたので後はおつきの方より承ります  
と君が代は陛下にたいする敬意でありますから殿下  
には常に直立不動の御姿勢をお取りに、ならせられ  
るとの由、誠になんとも其の御成徳に感動の外はあ

りませんでした。

最後に自動車にお乗りになります際に明治大帝御行  
幸の御記念の松を御覽に入れました時も深くおうな  
づき下さいました。

おごそかなる御態度と一方には御慈愛深くあらせら  
れる殿下の御前には眞に恐懼おくところを知りませ  
んでした。

愈々御發車の前に拜し奉りました御顔、御慈愛に富  
める御顔は今もあり、と眼前に拜することが出來  
ますまことに畏れ多いことでございますが今一度拜  
したいものと思つてゐます。

私は永久に今一度と思ふ念のつゞくことと思ひます  
幾度拜しても尙々と思ふこれこそ君臣の眞の心と思  
はれます。

（以上大体に於て校長先生のお話を思ひ出して書  
きましたもので其の儘の文章でないことはま  
ことに残念です）

御一舉、御一動、誠に御徳高くなります殿下、將來  
もかく聖天子を戴くことの出來る日本國民はまことに  
幸福でございます。

あ、大正十五年五月二十五日は廣島は勿論のこと我  
が學校としても永久に記念すべき慶日でございます  
う（四中、山代）

▲五月廿七日

六時までに登校。新鮮な朝の空氣と輝く朝日に包ま  
れた校内には御奉送に燃えた數百の魂が一樣にベル  
を待った。御奉迎申し上げた時の歡喜も一部を止め  
てごこへか遠くへ離れ去つた様な氣持が誰も心の  
支配して居た。何とも云はれぬ淋しさである。滅多  
にはない事否、永久に恵まれぬ光榮であるかも知れ  
ぬとの心が胸を異様にさきめかすのである。

涼しい空氣の中を西練兵場へ向ふ。縣女が第一着  
である。それしきの事にも何となく喜びをおぼへて  
御奉送の場に整列する。お立ちの時間には一時間餘  
りもある。皆はその場を十間程下つた所で休息——  
お話の中心は常に殿下の御事、畏多い乍ら話さず  
はゐられないのである。皆の心が一樣に忠節にもえ  
波立つてゐるのだらう。睡はそれを充分に証明する  
如く輝いてゐるではないか。

一時間餘りの時間が無精に待たれ無精に惜しまれた一刻千金の時は徐々として御出發の時間に近づく。一同は整列した。

正に八時三十五分、自動車の警笛も勇ましく。知事の自動車が無精に失つた様な皆の心の前を過ぎた。「その次だ」皆はそこに、海軍の軍服を召された、英姿颯爽たる殿下を——少くほゝゑませ給ふ殿下を拜し得たであらう。御乗車は静かに通り過ぎた。何とも知れぬ敬慕の心が數百有餘の心をあふる。目には同じ様に感激の涙が光つて居た。

「もう一日でも廣島に」皆の心にはすべてこれがあつた。あゝ！けれどももう十餘分の後にはこの土地を御去りになる殿下にあらせられる。こう思へば自づと涙があふれて来る。

いつまでもじつとして居たいこの土地にあるなつがしみをおぼえ乍ら先生の號令で止むなく一同離散した。(四南、内藤)

### 庭球會 (六月五日)

葉ざくらの新緑が、すみ渡つた碧空の下にサラ／＼と美しいリズムを繰り返して、赤い土の上に判然と描き出された。コートは白線は初夏の強光に豊かに映えて居る。土曜日の第一回庭球會が、第一コートに於て行はれた。

畑さんの開會の辭に破れぬ許りの拍手、石井先生が審判台にお上りになると、場内は水を打つた様な静けさで、入學以來始めて庭球會を見學する。一年生は好奇の目を見はつて二階の室から、今しコートに立たんとする選手のユニホーム姿とラケットの唸りを待ち詫びて居る。

やがて選手は右手にラケットを下げて、コートの上を姿を表はし場内は、いやが上にも、緊張味を増して來て二年生の試合を封切りに、試合ひはは始められた。

勢よくボールは快い音をたて、ラケットに依つて、は、はねかへる！控席からは割れる様な、拍手聲援

が起つて来る……

此の日のプログラムは次の通りで有つた。

H	植川	G	中村	S	永村
S	沖本	G	橋本	H	藤木
H	西雲	S	松岡	G	三宅
H	金田	S	福井	G	井上
G	森藤	H	清原	S	野田
					邊田

各班得点 S 10 H 5 G 5  
次は先生選手の試合ひで有つた。先生方も非常に好成绩でたのもしく思つた。

紅

白

山本	中山	柴本	近藤
野本	竹村	森本	小久保
松野	中野	畑田	柳田
野田	椎野	堀達	柴田
林島	福島	堀石	井田

これは白組が優勝した。かくて半日の楽しかつたテニス會も五時過ぎ閉した

今日の庭球會は、出場者も、應援者も互ひに努力して、かつて見ない盛大な會を終へた。

### 金子督學官の御話 (七月九日)

二校時が終つてすぐに講堂にはいつた。二年の金子さんのお父様が洋行してゐらつた時の感想をお話になつた。金子さん御一家は今度東京へおつしやるのだらうで、其の御別れにお出で下さつたわけだ。お話の内容は「日本には澤山の女學校があるが設備が整い、よい歴史を持つて、立派な校長先生を頂いて、永い間確實な教育を授けられ、先生が力を合せて生徒のために盡してゐらつしやる此の學校は日本でも屈指の學校と云ふべきである。此の學校に自分の子供が學んでゐることに嬉しいことであつて、其の御禮として洋行中のお話をして皆様に得る所あれば幸だと思ふ。

先づ歐洲文化は十八年此の方、大變遷遷したが英國の女子の精神だけは永久不變である。英吉利は昔からの一等國であるが、それがどうして其の位置を保ち、世界の富を握り、ユニオンジャクの旗風を世界の中、の港に吹き翻してゐるのは、何處に其の力があのかと思つて、氣をつけて見てゐた所がそれは全

く婦人の力にあるのだ。英國婦人の力は實に強い。男子は外に出て大いに奮闘し、女子が古來の美德を支持し、子供を嚴格に教育して行く所にある。女子の道徳で最も大切なものは嘘を吐かないといふ事である。ロンドンで下宿してゐた家にベツギといふ一人の子があつた。其の子が或日大層大聲で泣いてゐた。英國の中流以上の家庭では、ガミ／＼云つたり、わめいたりする様なことは稀なので、階下に降りて行つてピーちゃんを慰めるべく日本扇子と飴玉と繪葉書を與へ、そして理由を聞く。「今日私は對面にかゝわる悪い事をしました、それは恥しくて云ふことは出来ないから聞かないで下さい」といふ。婦人に對して尙此の上尋ねることは不作法に當るので聞かなかつた所が、二階へ上つた後、おばあさんがごなり込んで来て「貴方は大變悪い事をなすつた。私の家の家庭教育といふものを破んなすつた。あなたは日本人の中でも相當に教育にも理解がある方だと思つてゐたのに、あんなことをなさるとは思ひ掛けなかつた。直ぐに出て行つて下さい」と云ふ。驚いて其の理由を尋ねると「云ふべき事ではないけれども、家のベツギは嘘言をついたんです」何でも猫とふざけて砂糖の壺を引つくり返しておきながら、女中が聞くと私ぢやないつて言ふんださうだ。日本だつたら、これつ位の嘘は常に行はれてゐて、

差程悪いことだとも思つてゐないのに誠がないからだ。英國人はうそを吐く様なものは駄目だと云つてゐるのである。又英國人は親切で、老人を尊ぶ。英國に於て長老といふものは威張つたものだ。或時、大通りをシルクハットの紳士が老人をおぶつて十字街を通つて来る、すると巡査は自動車を止めて此の二人を通してやつた。か様な美しい表れは、老人が世の功勞者であるといふこと、弱いから大切にすること、二つの理由から來てゐるのだといふ公徳心の發達してゐる事は著しくチームス川に塵一つ落ちてゐないこと、公園等に煙草の吸がら等少しもないことによつても分る。或る時、公園でマツチを捨てた所が、傍に居た英人がさげすみの目を以て見てゐる。別に悪いことをした覚えはないけど、ジロ／＼見られるので去ることならす立つてゐると他の一人が煙草の殻を持つて行つて屑籠へ入れたので、さてはと思つて自分も捨て捨て、來ると、人々はさも満足した様に去つた。又日本の女學校が大變おしやべりであることは第一の欠点だから注意したいものである。以上の様に大變有益なお話で得ることが多かつた。ひどくお急しい御時間をお割き下さつたことを私等は感謝すべきである。

## 第二回近縣女子オリピック大會

(九月二十六日)

スポーツの秋!

純情の乙女が晴れの舞臺で日頃鍛へに鍛へた陸上の技を競ふ藝備新聞社主催第二回オリピック大會は初秋の風のナヨ／＼と軽く袂を吹く今日、二十六日午前九時から臥虎山麓廣島縣師範學校の運動場で開催された。

我が校では、午前七時と云ふに、早くも應援團は集合し必勝を祈るの字のあざやかな運動場に應援歌を高らかに歌へば選手の意氣益々昇天して行く。かくして七時半選手は白神社に今日の必勝を祈るべく詣で我々應援團は正門より縣師範へと足を運んだ。

× × ×  
 深み行く、秋の露しげきに早くも、出場各學校選手應援團は詰めかけ碧雲比治山上に飛び吹く秋風のさわやかに膚をすべる絶好の運動日和。  
 白線あざやかに書き出されたトラック、フィールド

校友會記事

排球、庭球の競技場、白いユニフォームに、色さま／＼な鉢巻の雄々しい選手は場の西側に陣取り、應援團は場の四圍を包んで各々母校の上に、榮冠あれかしと待ち詫びてゐる。西側の門からは、今日の我が運動史上の華を見んものと、足を運ぶ觀衆ひきも切らず。かくて九時半大會委員を先頭に出場選手は劉曉たる奏樂の音につれて入場し璀璨として、麗はしき優勝旗は前手者の優勝校たる我が校より、返還された。次いで清副會長の開會の辭有りて大會は百米豫選より開かれた。

- 入場式開會の辭
- 百米豫選 (二等迄)
- 二百米リレー豫選 (一着及ベストセコンド)
- 籠球投決勝
- 小學校千米リレー決勝
- 五十米豫選
- 四百米リレー豫選
- 走巾跳決勝

晝 食

千米リレー豫選

百米決勝

ホスジャンプ決勝

二百米リレー決勝

五十米決勝

四百米リレー決勝

走高跳決勝

千米リレー決勝

庭球 (三、四等は第三グラウンドより定む)

排球 (三、四等は第三グラウンドより定む)

一成績報告

一授賞式

一閉會の辭

我が校は何れの競技もあまり振はなかつたテニスと準優勝戦で負け、排球も市立高女の大奮闘に無惨に負けてしまつた。それに、トラックの方は、全く駄目で有つた。唯フキールドのみは、二十點と云ふ最高點で他校を抜くことが出来た。

かくて西日の美しく、照り映はる頃、清副會長の閉會の辭有り、應援團は熱狂し各競技は緊張裡に終了

3 四十五點……山中

4 二十八點五分……進徳

5 二十七點五分……吳女

右の如き成績にて閉會式をあげ、後成績報告有り、本大會の總得點最高者市女に榮ある優勝旗は渡され又トラックの部の優勝旗も市女の手落ちた。

我が校にはフキールドの優勝旗を授與された。

各校應援席からは拍手がなり響いて盛大裡に、秋の運動界を飾る大會も終つた時に五時半。

灰色の氣はあたりをまいて、旗の先端の槍が夕闇に淡く輝いてゐた。

平田先生の號令で集合した人々は、皆秋日に焦されて、熱烈な應援の後が伺はれる、整列の後選手を先頭に歸校し校庭に於いて、中島先生のお話があり、今日の敗戦を嘆きながら解散した。併し、運は巡りめぐるとか、我が校もまたいつか昨年の如く、榮ある優勝旗を握る事が出来るで有らう。

し得點を採點の結果

トラック

1 五十三點……市女

2 三十二點……山中

3 十三點……吳女

4 八點……廣女

5 零……進徳

フキールド

1 二十五點……廣女

2 十三點五分……進徳

3 十三點……山中

4 九點九分……吳女

5 三點……市女

庭球

(1) 市女 (2) 進徳 (3) 山中 (4) 廣女

排球

(1) 市女 (2) 廣女 (3) 進徳 (4) 吳

總得點

1 八十九點……市女

2 四十九點……廣女

庭球會

(九月三十日) (四西)

土曜日の時間割と繰り變へられた今日木曜日午後から庭球會がある。

盛り過ぎた萩の上を吹く風は夏服の肌にかい涼しさを與へる。吹き拂はれた雲の間から伶俐氣に見ゆる

青い静止の瞳が流石に季節を思はせる。

運動は秋に限る。純白なユニホームの選手等の輕やかな活動、今回の試合は謂は、同志打ちの様なもの

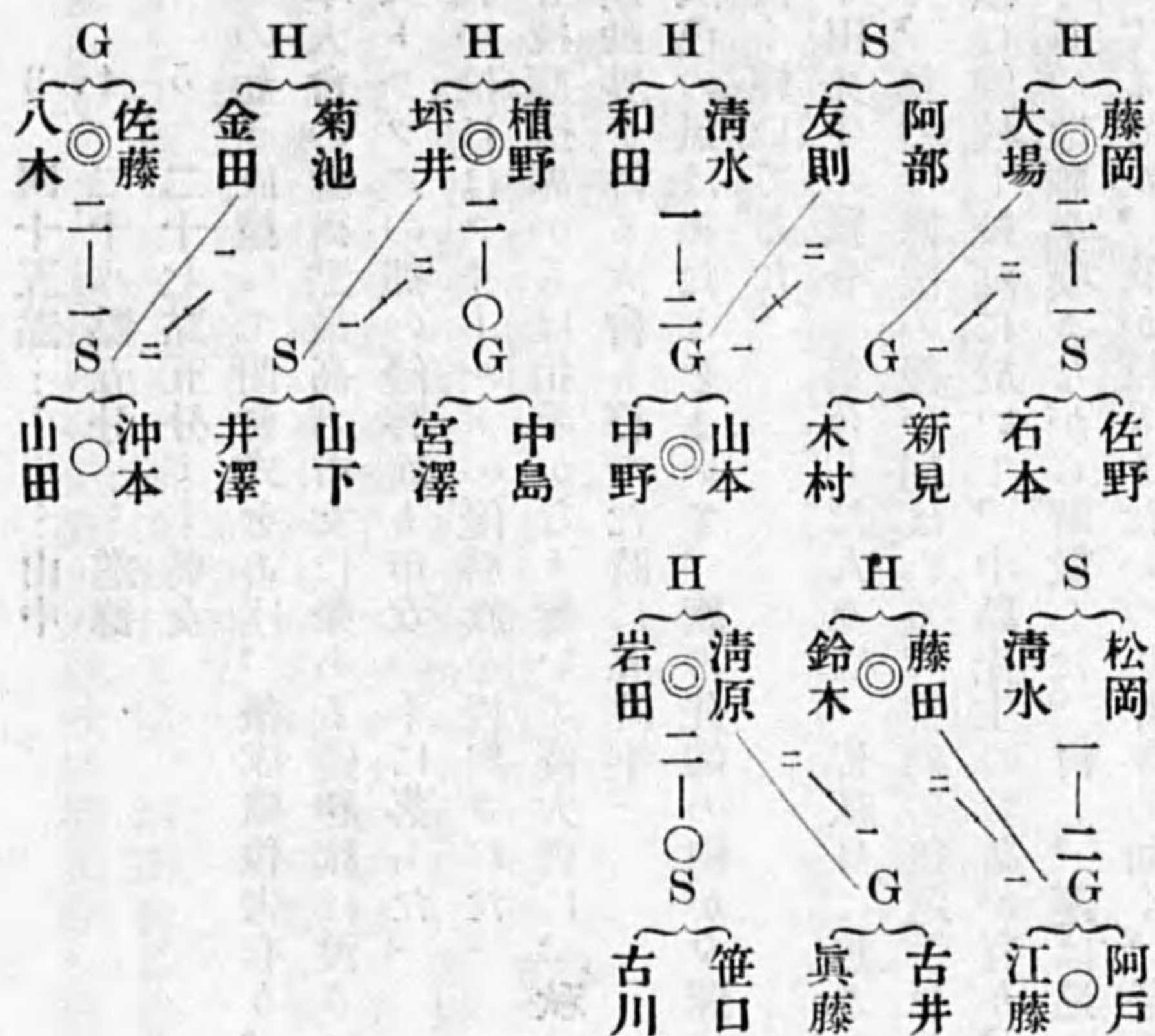
ではあるが、来る關西庭球大會の腕しらしめもあり。班の競争にもなつてゐるので選手の方にも見る者にも

自づと熱があつた。クラスに一組づゝの選手を出してゐるので、應援も随分と盛んである。

持筆すべきは一年生の試合で法則も心得ず、方法も自由の儘なので、一同が吹き出す程の滑稽を演じた。然し、彼女等も立派な選手たるべき素質を持つてゐる事であらう。

それ等に較べると本選手のマッチは張り合ひがある。球の音の快さ、晴れ渡つた空氣の中に響く。だ

がかゝる時にこそ、去年去つた巨頭の腕の牙を思はずには居られない。未だ今年の選手は下學年である。切角の奮勵を祈る。番組は左の如くである。



### 秋の遠足

(十月二日) (土) 晴天 (四中)

青空高く澄み渡つたすがすがしい秋の日の遠足、甲隊は極樂寺山中腹へ、乙隊は五日市へ、夫々身に適したところを選んだ。先づ甲隊は七時半迄に己斐驛前に集合した。珍しいと云ふ道ではないけれども久しぶりにまた秋の田舎道を通ることはなつかしい感じである。稍冷氣ある朝風に黄金の波がサラ／＼と寄せて來るとき私達の胸にも嬉しさがこみあげて來る。喜び勇んだ一隊は楽しく語らひながら行く。やがて海に臨める井口邊りの街道にさしかゝる。波一つだに動かざる平和な瀬戸内海、沖間の白帆は島々の間に夢の如くに浮んでゐる。陽も漸く照り氣持ちよい秋晴れの天氣、さすがは我が校の遠足だとうれしい。だん／＼と目的地は近づく、五日市の八幡川が見え初める。清い流れの兩岸には眞赤な入道花が一面に咲きみだれて一際目をひく。

### 英語會

(拾月八日)

橋を渡ると又畠道で愈々極樂寺山が目前に迫る。稍疲れを感じられはじめた時であつたが勇氣をよびかへして歩む。やつと麓のあたりに足をふみ入れた頃に少々ばかり雨が降つたが心配する間もなく又日が照り出した。いつもの草原に到着したのは十時半であつた。先生の注意が終るが早いかばら／＼と散り、にぎやかに車座をなしてさわざ、あるひは二三人づゝたのしくかたりながら、谷川の水の音を耳にしながらか、お辨當は開かれる。お菓子や果物をたべあきると今度は歌がきこね初める。中にはおとなしく編物をしてゐる人もある。ほんごに心地よい極樂境である。一時半集合。名残り惜しく其處を別れて山を下る。下りは大變樂で滑るのが面白かつた。再び來た道を通り八幡川の岸邊を歩んで井口の街道をすぎ己斐驛に到着、其處で人員をしらべて後解散した。

かねてより皆の期待して居た英語會が今日の放課後に開かれました。先刻から南庭には小雨が音も立てず降り注いでゐます。硝子戸もしつとりと濡れて講堂もいつもより落つき出演者のアクセント等もはつきり聞けると思ふと雨の日を反つて嬉しく思ひました。梅先生の叮嚀な開會の辭があり五年生は都合によつて此度は出演出来ぬと云はれた時大きな失望を感じました。夫は最上級と云ふ名丈でも立派なものを想像さすに充分でしたから：第一番は一年生の Belling Theat で元氣發らつたるものがありました。ラストシーンの Cag Cao と小聲で云ひ乍ら逃げる所において最も價値があつたと思ひました。英語はアクセントも必要ですが元氣も大そう大切だと思ひました。次は三年の Hancidac Cab で御座いました。之は又内容もあり悲劇的な方から皆の心を捕ねました和田さんのアクセントは實に美しいものでした。久保さんはあんなにも出来るものかと思

はれる程、パン屋の小父さんになり切つてゐられま  
した。又小林さんもいかにも父と云ふ感を皆の心に  
起させました。パンからお金が落ちた時等、和田さ  
んの表情と言葉がピッチリ合つて氣持が好うござい  
ました三番目は二年の Afternoon でした。之は練習  
の不充分と物練れない所から聲が小さくて後の方に  
は聞かないと云ふ有様でした。梅先生の最後の批評  
に「これによるとお茶をのんでお菓子を食へたに過  
ぎませんでした。が馴れたらこれ程にもないでせう」  
とおつしやつた。

最後は四年の Wisemenknousnuch でした。梅先生  
の御批評通り、少し荷がはつた爲こなせなかつた點  
があつたと思はれました。が坂戸さんの裁判官はそ  
の聲量に於てその威嚴に於て充分成功してゐたと思  
ひました。一体にも少し元氣があつて欲しいと思ひ  
ました。全体に亘り上級生になる丈け氣取る積りか  
態度が無暗に柔弱になつたり上調子になつたりする  
傾向がある様に思ひますが一年生の時の様なことは  
らない元氣と無邪氣が続けて行きたいと思ひます。  
梅先生の御批評が十五分許りあつて會は無事に三時

過ぎに閉ぢられました。

バザール (十月三十一日)

日の丸の御旗がひるがへつてゐる大路を幸福感にひ  
たりながら登校いつもの正方形の校舎を想ひながら  
登校したのに、その考へは全然くつがへされてしま  
ふ。

中に這入つて見ると丁度満艦飾の歎である。皆のた  
んせいになつた裝飾が美をあらそつてゐる。  
式がすんでから暫くするともうポツ／＼人の足跡が  
する様になる。

ひつそりとしてゐた校舎が急にザワ／＼と活動を初  
め出す。朝の間は生徒の眞黒い影ばかりがうよ  
／＼してゐる様に思はれた。午後はあれ程多くあつ  
た賣店も人の居ない所はないと言ふまでになる。自  
分の學校であるにもかゝはらず、何處か別の世界へ  
行つてゐるのではないかとあやしまれた。  
食堂はたくさんさんの賣店の中でも一番よく活動してゐ

た。いつ見ても人がいつばい。午後二時頃から講堂  
で音楽會がある。歩き疲れた身体をいこふにこの上  
もない所であつた。美のエキスとも言つても好いメ  
ロデーが耳に快く入つて今までの疲れ等は直に影も  
ひそめてしまふ。  
午後四時過ぎバザールの第一日は閉ぢられる。

第十七回運動會 (拾月二十一日)

「天高く馬肥ゆるの候」實に高い空は一層高くあざ  
やかに晴れて、全くの縣女日和で有つた。  
白線あざやかに引かれたコース。掃き清められた會  
場すべて、乙女等の心をいやが上にも元氣づけた。  
八時より莊嚴なる入場式が有り、校長先生より

非常な元氣

嚴格なる規律

緊張したる精神

に於て、正々堂々たる運動をせられん事を望む、と  
の訓辭が有り、生徒は血湧き、肉おどるの思ひで、

校友會記事

歴史ある運動會に、更に／＼新しき光輝ある歴史を  
築くべく退場した。

プログラム

- 一、入場式
- 二、開會の辭
- 三、運動

午前の部

トラック

- 一、一〇〇米 第一豫選 四回 各班
- 二五〇米 六回 二學年
- 三、一〇〇米 五回 三學年
- 四、九〇〇米リレー 四學年各班
- 五、五〇米 第一豫選 四回 各班
- 六、五〇米 六回 一學年
- 七、九〇〇米リレー 二學年各組
- 八、一〇〇米 第二豫選 二回 各班
- 九、二〇〇米リレー豫選 各班
- 一〇、一〇〇米ハードル決勝 各班
- 一一、四〇〇米リレー第一豫選 各班
- 一二、一〇〇米 五回 四學年

フキールド

- 一、メヂシンボール 一學年全体 班各
  - 二、ベースボール投 決六人 二學年全体
  - 三、体操 五年專攻科一年
  - 四、行進遊戯 各班
  - 五、バスケットボール決勝 三學年全体
  - 六、ポトボール 決六人 四學年全体
  - 七、走幅跳 決六人 本科對專攻科
  - 八、体操 一學年全体
  - 九、バレエボール 二學年
  - 一〇、行進遊戯
  - 一一、方形ドッチボール
- 午 後 の 部
- トラック
- 一三、五〇米ハードル 決勝 各班
  - 一四、四〇〇米リレー第一豫選 縣下小學校尋常女子選手
  - 一五、九〇〇米リレー 一學年各組
  - 一六、五〇米 第二豫選 各班
  - 一七、四〇〇米リレー第二豫選 各班

- 一八、四〇〇米リレー第二豫選 縣下小學校
  - 一九、二〇〇米リレー 決勝 各班
  - 二〇、二〇〇米 決勝 各班
  - 二一、九〇〇米リレー 三學年
  - 二二、一〇〇米 決勝 各班
  - 二三、五〇米 決勝 各班
  - 二四、四〇〇米リレー 決勝 縣下小學校
  - 二五、四〇〇米リレー 決勝 各班
- フキールド
- 優勝旗返納式 (小學校)
- 一二、体操 本科全体
  - 一三、バスケットボール投決六人各班 二學年全体
  - 一四、行進遊戯 本科對專攻科
  - 一五、バスケットボール 四學年
  - 一六、コーナーボール 三學年全体
  - 一七、体操 各班
  - 一八、ホ、ス、ジャンプ 決六人 專攻科二學年
  - 一九、行進遊戯 決六人 各班
  - 二〇、走高跳 決六人 各班
  - 二一、行進遊戯 四學年全体

- 二二、バレエボール 決勝 各班
  - 二三、体操 專攻科一、二年
  - 二四、バレエボール 職員對生徒
  - 二五、行進遊戯 三學年全体
- 優勝旗授與式
- 四、唱 歌 (君が代) 一同起立
  - 五、閉會の辭

勝旗を持つて、小おごりをして居る。どんなに誇らしく、立つた事だらう。而して我が校として、最もよろこぶべき事は三班の點數が相接して居る事で更に、班に對して希望を抱かした。楽しい一日の流れは早かつた。私達は西に没せんとする太陽を招くすべもなく夕陽に名残を惜しみつゝ、先年に負けぬ丈の歴史を築いた事の誇らしさに、快心の笑をたたへつゝ、遺憾なく發表した各自の技量を語りながら宵の家路を急ぐ乙女等をさぞ天の月や星は、歎賞した事だらう。次に本日の活跳ぶりを表記しよう。

縣下小學校選手の四百米リレーは今日の運動會をにぎはす一つで有つた。各母校を應援する者で運動中は火のついた様なにぎあひで有つた。而して、月桂冠は鼓ヶ浦の學校の物となり、喜びの吹奏の下に、希望に輝く、彼女等生徒は皆の拍手の内に送られた。我が校もHが勝つか、Gが勝つかSが勝つかの危機で有つたが最後の四百米によつて遂に、左の點數が階上高く、掲げられた。

- S 九十九點
- H 九十八點
- G 九十點

榮冠は斯くて、Sの手に渡り、再び得たる喜びに優



回数	競技名	等級	レコード	競技者名	
6	50米	一年	B 1	7 $\frac{4}{5}$	H 塚野
			C 1	7 $\frac{3}{5}$	S 小畑
			D 1		S 加賀美
			A 2		S 久保
			B 2		G 和田
			C 2		H 横田
			D 2		S 金子
			A 3		G 諏訪
			B 3		S 島村
			C 3		G 佐方
			D 3		G 森脇
			A 1	8 $\frac{5}{1}$	坪井
			B 1	8 $\frac{1}{5}$	山ノ井
			C 1	8 $\frac{2}{5}$	丸下
			D 1	8 F	上田
E 1	8 $\frac{1}{5}$	和田			
F 1	8 $\frac{3}{5}$	大山			
7	900米リレー	二學年	1	2'39"	北
8	100米第二豫選	各班	A 1	15F	S 山本
			B 1	14 $\frac{3}{5}$	S 佐藤
			A 2		G 和田
			B 2		G 佐藤花
			A 3		H 岡太
9	200米リレー豫選	各班	B 3		H 小野
			A 1	30 $\frac{2}{5}$	H 小野
			B 1	30 $\frac{2}{5}$	G 佐藤花
			A 2		G 森野内
10	100米ハードル決	各班	B 2		H 岡太
			1	16 $\frac{2}{5}$	S 永久
			2		G 峠

クツラト

回数	競技名	等級	レコード	競技者名	
1	100米第一豫選	各班	A 1	15F	S 山本
			B 1	15F	S 佐藤
			C 1	15F	G 和田
			D 1	15 $\frac{4}{5}$	G 佐藤
			A 2	15 $\frac{4}{5}$	G 山口
			B 2		H 小野
			C 2		S 小畑
			D 2		S 田村
			3		G 岡森
			3		S 久保
			3		S 小畑
			3		H 岡田
			4		G 八木
			4		S 田邊
			4		G 本岡
4		G 角田			
2	50米	二年	A 1	8 $\frac{4}{5}$	西・信京
			B 1	8 $\frac{4}{5}$	南・田谷
			C 1	8 $\frac{3}{5}$	南・宮澤
			D 1	8 $\frac{1}{5}$	南・渡邊
			E 1	8 $\frac{1}{5}$	南・東
3	100米競走	三學年	F 1	8 $\frac{1}{5}$	中・赤井
			A 1	17 $\frac{3}{5}$	東・廣川
			B 1	17 $\frac{1}{5}$	中・福屋
			C 1	17 F	中・森本
			D 1	16 $\frac{4}{5}$	中・萬屋
4	900米リレー	四學年	E 1	17 F	東・石川
			1	2'44"	北組
5	50米第一豫選	各班	A 1	7 $\frac{2}{5}$	H 田村



回数	競技名	等級	レコード	競技者名				
17	400米リレー第二 豫選	各班	A 1	1分 $\frac{4}{5}$	H小野			
			B 1	59秒 $\frac{2}{5}$	G佐藤			
			A 2		S田村			
			2		S島村			
18	400米リレー第二 豫選	縣下小 學校女 子選手	A 1		神崎			
			A 2		福島			
			B 1	1分3秒 $\frac{2}{5}$	鼓浦			
			B 2		袋町			
			19	200米リレー決勝	各班	1	30 $\frac{1}{5}$	H小野
						2		G佐藤
20	200米決勝	各班	3		H岡田			
			1	32 F	G山口			
			2		G角田			
			3		H佐方			
21	9000米リレー	三學年	1	2分39秒 $\frac{3}{5}$	S吉村			
			中組					
22	100米決勝	各班	1	14 $\frac{2}{5}$	S佐藤			
			2		G佐藤花			
			3		G和田			
			4		H小野			
23	50米決勝	各班	1	7 $\frac{4}{5}$	H田村			
			2		S久保			
			3		H塚野			
			4		S小畑			
24	400米リレー決勝	縣下小 學校女 子選手	1	1分3 $\frac{2}{5}$	鼓浦			
			2		袋町			
			3		福島			
			4		神崎			
25	400米リレー決勝	各班	1	1分 $\frac{1}{5}$	H小野			
			2		S田村			
			3		G佐藤			

回数	競技名	等級	レコード	競技者名	
11	400米リレー第一 豫選	各班	3		G足立
			4		H東
			A 1	1分 $\frac{4}{5}$	H小野
			B 1	1分 $\frac{1}{5}$	G佐藤花
12	100米	四學年	C 1	1分2 $\frac{2}{5}$	S田村美
			A 2		S田邊
			B 2		H清原
			C 2		G森野内
			A 1	16 $\frac{1}{5}$	西・清水
			B 1	17 $\frac{4}{5}$	北・河上
13	50米ハドル決	各班	C 1	17 $\frac{3}{5}$	西・谷崎
			D 1	16 $\frac{3}{5}$	東・原田
			E 1	17 F	中・本名
			1	9 $\frac{5}{2}$	G峠
			2		S小畑
14	400米リレー第一 豫選	各班	3		H植田
			4		S松田
			A 1	1分2 $\frac{1}{5}$	鼓浦
			A 2		袋町
15	900リレー	一學年	B 1		神崎
			B 2		矢野
			C 1	1分7秒F	福島
			C 2		段原
16	50米第二豫選	各班	1	2分38 $\frac{2}{5}$	北組
			A 1	7 $\frac{2}{5}$	H田村
			A 2		S久保
17	50米第二豫選	各班	A 3		S小畑
			B 1	7 $\frac{2}{5}$	S島村
			B 2		G和田
			B 3		H塚野

フ井ールド

回数	競技名	等級	レコード	競技者名	
1	メデシンボール	1		一東	
		2		一北	
		3		一中	
2	ベースボール投	1	42.80	S 宮川	
		2	41.20	S 福田	
		3	41.10	S 山下	
		4	40.45	H 引地	
5	バスケットボール決	各班	}	H	
		各班		G	
7	走巾跳	各班	1 4.58米	H 小野	
			2 4.45米	S 佐藤	
			3 4.33米	G 佐藤	
			4 4.31米	S 山本	
8	バレーボール	學年	0	專攻科	
			2	本科	
9	方形ドンヂボール	學年	}	北西中	
	ボートボール	學年		1	二三三
10	バスケットボール	1		19.02W	S 山下
	投	2		18.53W	H 和田
		3	18.30W	S 山村	
		4	15.22W	H 清原	
			12對2	專攻科の勝	
11	バスケットボール	專攻科	1 9.83	S 山本	
12	ホスチャンプ	對本科	2 9.78	G 佐藤	
		各班	3 9.19	H 河本	
			4 9.08	H 小野	
13	走高跳	各班	1 1W32	G 和田	
			2 1W32	G 兒玉	
			3 1W27	S 佐藤	
			4	H 思田	

修學旅行記

十一月一日 (日)

一年も前から心を躍らしてゐた舊都への旅は、今日なのです。けれども今日といふ日が奇妙に私の心から浮いて居ます。ともすると、過去一年もの期待の中に溶け込んで了ひさうです。憧憬も、嬉しさも、出發の今日には淡い哀愁ささへ變つて、星影白き晩秋の氣も肌寒き身に泌む時、僅か一週間なのに、再び家に歸るのは遠い日の様に思はれて、心弱の目に早宿る玉の滴に、曇り勝の町を午後七時廣島驛に集合しました。見送りの父母兄弟の前に整列して百五十の友は、發車迄の待遠くて又短い時間を語らふ聲さへ、打沈み勝に過しました。時は刻々に迫つて、八時にはもう汽車はホームを滑り始めました。驛の紅い灯が、次第に小さく遠ざかり行くのを、いつまでも窓から眺めて話聲さへもどぎれ勝でありました。けれどもそれは暫くして、やがて華やかな笑聲で賑かになりました。馴れない車中は思ひの外辛

校友會記事

く、十時、十一時過ぎても眠れない。スチームで曇つた硝子窓に、「母」と書いてある意深き字や、胸深く秘められた思ひを乗せた列車は、すべてを無關心に、高い星空の下、彼方に遠く續くレールの上を唯ひた走りに轟進する。恰度明石の濱を過ぐる頃、新月浦回の夢を抜け出て、その睡深き小波に、み光を覆ひ給ふ神々しさ。

一時を過ぎ、二時も過ぎると、流石に車内も静まりあて知らず迷ふ夢歸る頃には窓外にぼつかり開いた宵待前の淡い黄色も、ほのかに認められる程でした。

十一月二日 (火)

重い臉を壓へてゐる中に、午前七時十三分、無事石山驛着。初めて踏む舊都の土に、淡い懐しさを覺わつ、それより直に湖南汽船にて、波おだやかな瀬田川を溯りて、石山寺に向ふ。黄に、紅に、深き秋を彩る木の間、長く續いた石のきざしを登ればそこに、見るからに物古りたる石山寺がある。さ、やかな源氏之間に、その人を偲び、古來詩人の幾多胸を痛めけん石山の秋の夜を思ひながら、十分餘り

二九五

にして、再び汽船により、遙に比叡山を望みうつり行く湖畔の美景を愛でつゝ三井寺に詣る。瀬田の唐橋の擬寶珠は故知らず、懐舊の念を呼びおこした。三井寺にては、名高い鐘樓を見る。月清く中空にかゝりて、草葉の露の白き頃、瀧にひびき渡る晩鐘の音に、その一日を懺悔する。邊りの人の幸を羨みつゝ、山を下り、程近き所より疎水を下る。眞暗な隧道の中を船は心地よくすべり行く。前を行く船のかざり火がバチとくゝ小さな音して赤く水面にうつるのがうら淋しい迄に詩情をそゝる。舳に乗つた人の顔も眞紅だ。各船からはゆるやかに懐しいリズムをもつた船うたが流れ出る。その間を縫ふ様に等間隔な櫓のきしみ、かくて、水郷に漂浪するが如きその夢も、未だ醒め果てぬに、一時間あまりにして三條蹴上につく。轟々蹴上を下る激流の白きに、堪へ難き壯快を覺ねながら、平安神宮に參拜する。大橋殿の左近の櫻、右近の橋に古の歴史の跡をたどりつゝ、次いで智恩院に詣る。當堂建立の際工匠の擔に残しおいたといふ傘は、僅に柄のみが見られたのみであつた。

それより圓山公園に至りて晝食を終へ、前掛に日足袋、角帶姿の旅館の番頭さんの案内にて、清水寺に參拜する。洛中第一の靈場とよばれては、そゝる奥床しく、可愛い巡禮姿も自ら淨んで來るのであつた。續いて西大谷、方廣寺、豊國神社に參拜し、三十三間堂に至りて、本尊千手觀音に興味を覺ね、次いで西本願寺に參詣する。西本願寺の鴻の間始め、繪畫彫刻の精巧には驚かされながらも、當時の隆盛を思ひおこさずには居られなかつた。こゝに至りて、急に豫定が變更され、電車にて北野天滿宮に行く。天滿宮の梅樹に、管公をなつかしむ餘裕もなく、夕關迫る間を、急いで嵐山に行く。紫に暮れ行く空に、ぼんやり嵐山の形を認め渡月橋を渡りて、深い満足を覺ねながら、七時過ぎ漸く三條大津屋旅館につく。夕食後は、未だ疲れの癒ねぬに、直に買物にと、市中に飛び出す。九時半頃両手に大きな風呂敷包をかゝりて、宿にかへり今日一日の印象を新しく思ひおこすひまもなく十時過ぎ就寢

(四東 赤川 石川)

十一月三日

清く靜かな京の朝は一面霧に蔽はれて、ゆつたりとした温雅な感じが漂うてゐたなつかしい大津屋旅館を立つこと午前六時、列を正して京の市中をうねつて御所に向ふ。霧は次第に晴れて京都の町はやつと目覺めた。廣々とした境内の一面には芝生が滑らかな曲線を描いて居る。一塵もない縁の大庭には小鳥がチ、と鳴きながら飛び廻つて居た。小高い岳が幾つもあつて、そこには幾千年の歴史を物語る老松が枝ぶり面白くうねり立つて、松葉の間からは、燦々と太陽が顔を見せ始めた程よい松と松との間からは淡褐色に眞白の五線を劃かれた御築地が優美に又壯嚴な姿を現はして居た。

やがて其の御築地に近づくこと、あれ程小さく見えて居た御壁が實に大きかつた。九重の雲深く牆壁を隔て、僅かに殿宇の甍を望む事が出來たのみ、建札門西の宣秋門等を横に拜しいつしか境内を出た。八時三十分自動車で金閣寺に向ふ、開門の時刻を待つてやがて寺内に入る廣い池の面には浮草がまるで繪の様にポツカリと浮いて時々微風にゆら／＼とゆ

れるのが何とも云へぬ可愛かつた。こんものりとした山を背景にあの名高い金閣寺が優美なそして、何となく輕快な瀟洒な趣を表はして居た。面白い小僧さんの説明を聞きながら二階三階と上つて行く途中彌陀三尊夢想國師、義滿法禮の像等があつた。三階は全部金を塗りつぶしてあると聞いたけれど古い建物とても早金は殆んど剝れて居た。庭に廻れば、南天の床柱、萩の違柵等を右に見てやがて金閣寺を出づ、八時過ぎ電車にて伏見桃山に向ふ空はますます麗かに汗をもよほす程の熱さをじつとこらへて坂路を登る。こゝには道路一面に小砂利が敷き詰められてあつて、一歩々登るにしたがつて心の緊張はますます強くなつて行つた。清淨に閑雅森嚴たる御宮居!!何と神々しいんだらう一同潺々たる御手洗の清水に潔濟し心を淨めて御前に整列した時眼前には遙かに高く清淨な砂礫にておははれた御陵が平和に、いかにも安らかに聳ねて居た。急に我々の身心がピリツとして冷寒を覺わずには居られなかつた。唯兩陛下の御靈の御安住と、皇室のいやが上にも榮わん事を祈る念より他には何も

ない、ほんとに純な心がむら／＼とわきかへつた。静寂な御道を慎しみ歩んで伏見桃山驛に向ひこゝにて宇治行電車に乗る宇治驛に着くと直ちに平等院に向ふ鳳凰の両翼を張つた様な優美な建築前には濁水の池を控えて、太古の歴史を物語つて居た。其處より濱島にさまよふ。青い空と緑紅まじりの四方山の調和が何とも云へない。深緑に澄み透つた清水が岩根にくだけて真白い玉の様にほとばしる、其の物凄いや音を耳にしながら鬚髯としてあたりをながめた。三時三十九分汽車にて宇治驛を發し奈良に四時二十九分到着する。京都の温雅な町に親しみて奈良の町を歩むと何だか氣持が變つて居た。世に名高い猿澤の池を右に見て興福寺前の旅館に一泊、そこより奈良公園を通つて東大寺に向ふことには最早人なつこい鹿が我々の後をしたつて来るのも可愛かつた。大佛殿に參拜、木造建築として世界第一と稱せらるゝ大佛殿に來た時實に驚嘆した。案内者の説明に應じて金堂の後方にある正倉院をはじめ二月堂、三月堂等の古建築物を見て、そゞろに昔の面影を偲んだ。

しんみりとした老木の間に聳れて居る春日神社に參拜、境内には幾千ともあらう燈籠が列を正して其の處には小鹿がたはむれて居る。手向山の麓に鎮座される手向山神社の傍には菅公の腰掛石と云ふ古石が苔にむされてあつた説明者は「神のまに／＼」と菅公が歌はれた所ですと説明して呉れた時、たまらなく其の石が慕はしかつた。日は既に西の山端にかゝらんとして居る。あたりは最早薄暗くなつて、こんもりと茂る老木の間に豪壯な建物が幾つも／＼そびれて、いかにも崇高な感じに打たれた。遠くの方から鹿寄せのラツバの音があはれに細く響いて來たかと思ふと今まで遊んで居た鹿は一目散に黒い影を消してしまつた。我々は此の鹿の動作を見た時、大いに感ずる所があつた。日はもうとつぶり暮れてしまつた。興福寺猿澤の池等の説明を最後に今日の日を無事に終へたのである。(四西、中山、小野)

十一月四日

今日も又あわただしく旅装を整へ僅か一日では有つたけれど思出多き奈良の都を後にしなければならなかつた。先生にせき立てられ早朝より旅館の門迄幕ひ寄つた春日神社の神鹿に送られて奈良を立つ。途中龜山で乗換へ長い間汽車の窓より深み行く秋色を眺めつつ旅行の主眼たる伊勢神宮に向ふ。午後四時半小田驛に着いた時は何時からともなく意識せぬに小さな雨がし／＼と降つて居た。誰か知ら清めの雨だと言つてゐた。手荷物も預けて皆甚しく緊張して參道を行く事約三丁にして外宮に至る。小砂利をふみしめて先づ一の鳥居をくゞり白木造の園の中に溢れ出づる清水で口を嗽ぎ髪を撫で容儀を整へ静々肅々隊を揃へ神杉古木立並ぶ白砂を拜殿へと進む。間もなく一行は檜皮葺の屋根に清淨無垢の白幕を垂れし御前に至り深く／＼頭を下げた。有難さ——一種靈妙なる感のみ全身を傳はり只夢中で深く頭を垂れた。そして再び無言の裡に元來た路に引返へし塵一つ落

ちて居ない路を徴古館に向ふ。小雨なれどさう寒い秋雨をついて館に着いた。晩秋の殘紅をくらべ顔に櫻、楓は白亜の館に照り映えてその姿のお艶なる事よ!! 人工的に配置された小庭の美しくさ……そつくりその儘廣島の學校に持つて歸へりたいとの願に驅られつつ館内に入った。色々歴史上の參考品多き内各御代に於ける風俗の各特徴の美が一番深く印象づけられた。徴古館を出れば今迄静かに降つて居た雨も上つてしつとりと落着いた中にも何とも言へぬ晴れやかさが邊一杯にみなぎる。外宮に參拜してより誰れも緊張の度を越し妙にめ入つて居たが始めて蘇生した様な氣持で夫より又暫しの間參宮電車にゆられて内宮に向ふ。一同五十鈴川で手を淨め無言の裡に奥深く進む。途中時間の都合により神樂殿にて神樂を奉納す。純白の衣に緋の袴をつけた可憐な乙女古典……的なるその場の有様に思はずうつとりとして我を忘る。やがて其處を立ち出で尙奥深く進む。行くにしたが

つて幾千年の昔を物語る老杉両側に生ひ繁り神氣は邊一面に漂ふ。此處も外宮と同じく白木造に建てなした御社の何となく神々しく思はず頭の下るを禁じ得なかつた。この神聖なる場所に於いて次の如き校長先生の御訓辭を承る。

訓辭

- 一、諸子は良妻となり賢母となり以て初志を貫徹することを期すべし。之れが爲には昔の賢れたる婦人並に先輩の行を見習ひて之れを實行し備さに艱難を嘗め膽力を養ふべし
- 二、初志を貫徹する爲には必ず徹底的に従順謙讓献身力行の諸徳を發揮さるべからず。
- 三、忠孝を第一の道徳と心得祖先を尊び親存命中残りおしき所なきまでに孝行をつくすべし。親亡くなりたる後は如何に思ふも致方なきものなり。
- 四、學校を去りたる後も師を敬ふことを忘るべからず。
- 五、夫を天と心得神身を捧げつとめつくして常に心を安からしむべし、夫を怒らしむるは妻の

- 不徳なり。
- 六、貞操義烈堅く守るべし。
- 七、如何なる困難苦痛を忍んでも有爲の子を出すことをつとめよ良き子ならば親の心は安きものなり。
- 八、他人に對しては心の底から親切をつくすべし傲慢は女の不徳なり。
- 九、朝は早く起きて家族の爲に働くべし朝寝は女の不徳なり。
- 十、東宮殿下に對し特に忠誠を勵むべし。

大正十五年十月三十一日

校長 齊藤鹿三郎

之で愈々參宮も終り神殿裏より歸途につく。途中止まつて再び清き流れの五十鈴川をあかず眺め一の鳥居を出て記念寫眞を取る。今では全く疲れ切つた體を再び電車に乗せて憧れの二見ヶ浦に向ふ。二見に着いた時は全く日は暮れ果て、それに雨さへ加はつて居た。今では皆旅館迄の距離ばかり心配してゐたが案外早く朝日旅館に着いたので一同狂氣せん程喜ぶ。こゝで全く、くつろいで旅装をどき、お

湯に入つて夕食を済ました時はほんたうに別人の様に快活にはしやぎながら皆んな夫々楽しさうに町に出て行つた。

それから暫くの間、大きな刺戟を受けた乙女達は夢中で怒濤の押し寄せる海岸をさまよつて居た。

お、!!懐しい二見よ!!思ひ出多き二見よ!!

私は御身を永久に忘れないであらうよ。殊に今宵の御身を……。

(田中 井上 兒玉)

十一月五日

邊りの騒しさに、短い夢を破られた。電燈の光る四時に止つた様に、にぶ色の大時計の針がぬれてゐた。雨戸の隙間から吹入る潮風に、衿をたて、洗面器を引寄せる、蒲團の暖が懐しかった。充分疲れの直らぬ足を、思切つて立てる。

「お早やう直夫婦岩へ行くんですつて」タオルを下げた走つて来たNさんが足元のさゞねの殻を蹴飛ばした。「まあ!!いけない人!!ちや待つて、仲よく同志が約束して、三々五々濱に出掛ける。太陽は未だ寝てゐた。子守唄にふさはしくない太平洋の怒濤が、海の

果から雄大な自然の音楽を奏した。皆の合唱の聲も人々も浪に吹散らされる灯の堤に、猛り狂ふ白い泡沫が人を包むのだ。

満潮の大浪がスル／＼と、矢より早く數間、磯をなめて岩にぶつかる。自分の營を破られたのを怒る如く、カツと頓に口を開く。返すうねりの寄せる浪にかち合ふ時、又數尺盛上る。和かな内海の磯に高く望まれた私達には驚きであつた。

やがて、紫の霧が薄れて微に、水と空との界がみえ出した頃、火星のかけを踏んで、夫婦岩に辿りついたが、さて覺悟はしてゐたもの、その正体には失望しないわけには行かなかつた。

日の出なら、最少しはよいであらうにと、恨みを殘して曙の海邊をさ迷ひ歸る。宿を立つ頃はいつか、星も消えて、蕭々と吹く二見の浦風は、透明にあげてゐた。汽車に乗つてから、名残を惜んだ太陽が、燦爛と黄金の矢を窓より投込む。向ひの友の顔がはつきり浮上る。

「××さん!!」呼んでみる。「え、ごをしたの」  
てれかくしに窓外に瞳をうつしたお日さまがきれい

ねえ。」  
刹那々に、移り行く田園の黎明は、實に美しかった。汽車はさして行く高野への希望を積み、黙々と走る。

十一時過ぎ和歌山線に乗換へて途中で一諸になつた三重縣立高女の人と別れた。車中で、一番印象の良かった朝日館のお辨當を美味しく戴く。

京坂地方だと云つてもまだ廣島へ近い。そして西日本だもの、何處へ行つても田舎の風景に會ふと廣島近郷の山野に汽車旅行してゐる様な氣である。

一時過ぎ橋本へ着いた。之から高野線電車で高野下へ行く。京都の嵐山行電車は廣島の郊外電車の様な感じであつたが、此の電車は一寸それより調子が異つてゐる。みんな高野登山のエネルギーを養ふつもりか車中は大そう静である。

高野下では各々好みの登山姿になる手荷物一つさい車で運んで貰ふ。草履や草鞋に變へる人もあれば靴で頑張る人もある。大抵の人は眞白い二錢の杖を求めた。  
みんな新レコードを造るのだと云つて競つて早く上

らうとするそうして先生に注意された。「今からそんなにごんごん歩くと疲れてしまふ」と。  
体力の弱い人のみを乗せた自動車は自動車道を警笛を鳴らしつゝ、中腹の推出へと向つた。

紀の川に架つた長い橋を渡る、幾年の間水や風の爲に蝕ばれた緑紫色の奇石とその底にたゞへられた深い碧色の淵を眺める。白衣に笈をおつて金剛杖をついた修業者や、信心家らしいお婆さんや殊勝げな娘さん等にも會ふ。思つたより道は良い。數十間置き位に茶店がある。氣持良さそうな水や果實や杖等を供してゐる。軒にぶら下つてゐる草鞋は屈たくそう。段々中腹に来る。此のあたりから道は次第にスロープが強くなつて來た。思はず後をふりかへる、深い木立の間と高い山と山の窪みに我が廣島健兒の列がうねつてゐる。中腹に來ると初め程足が元氣に運ばない。此の頃から早遅の差が激しくなる、三々五々頑張り乍ら登る、段々木立は深くなる、静かである。漸く深山に這入つた感じがする。併し頭上に張られたケーブル線にぶら下つてゐる荷物を運ぶ籠が調子はづれた。

極樂橋を渡つていよ／＼不動坂にさしかゝる、此の頃から二百米毎に立てられた丁標の懐しさ。道は大分上ると下り坂や平坦な道やらになつてゐるので大變上はよい。併しその下り坂が随分なスロープだから足の筋は大いに痛む。

瓜先上りに疲れた身を喘ぎ乍らこつ／＼と登つて行く、女人堂を見付けた時はもう皆來たかの様に嬉しかった。古びた狐格子の御堂は女人禁制の昔を偲ばせて今昔の感に堪へない。高野山と云へば濃／＼い緑の山のように思つてゐたら美しい紅葉に會つて驚きをして喜んだ。思はず立止つてしまつた程だ、お、美しい連樹のリズム！此の女人堂から少し登つた頃が一番きつかつた。もう倒れるだらうと思つた位だ、こゝが過ぎると大きな平坦な通りが開けた。急に冷氣を感じる。この都の大路の様な通りをしばらく行くと龍泉院があつた。

廣島縣立廣島高等女學校の文字が懐しく眼を射た。多くの尼さん達に會ふた。  
龍泉院に着くとお湯に飛込んだ、下衣はびつしよりにつて冷くなつた。今晚程お湯の氣持良かった。

事はなかつた。  
大廣間で火鉢を圍んでの今日の物語りにふける楽しさ。やゝ暫くして夕餉の膳が運ばれた。他所では見られない有様である。墨染の衣着たお坊さんにお給仕して戴くのである。高野山の精進料理は忘れられないだらう。  
日頃から期待して止まなかつた高野下りも好ましい印象の中に過されて行つた。今日の一日で最も忘れられないのは緑の木立の間の紅葉である。  
寒い／＼と口走り乍ら床へもぐつた。今夜は美しい夢が結ばれるとだらう。  
(四北 増田 岸田)

十一月六日  
冷い深山の靈氣を吸いて起き上つたのは翌日六日お坊さんに最後のお給仕をして戴くと直ちに奥院に向つた。高野山といへば誰でも俗世界を離れたお寺ばかり立ち並んで居る所を想像するであらうに、雜貨吳服店、八百屋、牛肉屋等が軒を並べて街を作して居るのは先づ驚いた。更に進んで奥の院の道にさしかゝるとさすが他には味はへない神秘的な心持に支配

される。  
細道を挟んで天をも摩す如く聳え立つ老樹たちは、千古の歴史を語り、金剛不壊といふ言葉に似つかはしい程な、ごつしりとした迷のない壯大な力強さを以て突立つて居るかうした樹々の間に貴きも賤しきも真心より捧げた、尊い信仰を表象する様な苦むした石塔や五輪の塔が無数に立てられて居る。かゝる靈域の御廟に大師は永へに眠らせ給ふのである。貧者の一燈長者萬燈をまのあたり見て言ひ知れぬ神嚴な感に浸りつゝ、引返す無名の橋は刈萱童心と石童丸の果敢ない邂逅を物語つて居る。  
それより眞言宗古義派の總本山なる金剛峯寺で有名な寶物等を見せて戴く、更に他の伽藍をも残らず訪ね終れば早や此の仙境にも別れを告げなければならなかつた。あんなに苦しい目をしてやつと登つたのに直ぐ下るのは何んだか惜しい様な氣がしてならぬ一足一足塵の世に近づいて行く、一同は縣女魂を發揮して登る程苦しまないで二里半の山路は盡きて平坦な道に出る。高野下で疲れた身体をなげ出してまだ十時だといふのに、もうお辨當を戴く人も多か

つた。そこから電車で畝傍の榎原神宮に向ふ。白い砂をふんで神宮に参拜した。畝傍を發して平端で乗かへ、法隆寺で下車した。木の間がくれに遙かに美しい五重の塔の尖頭が望まれて茂古老蒼を想像しつゝ、田舎道を急いだ。睡眠不足と、幾日かの旅に疲れ、た身体を無理に元氣を振つて歩くのであつた。間もなく古典的な世界最古の木造建築物である法隆寺を近く眺める事が出来た。朱塗もさめはてゝ居るが曲線美を現はしたエンタシスの柱の膨みは重々しいうちにも軽快な感がある。この柱こそ千四百年の昔の姿そのまゝに太く豊かに朽ちもせで残つたなつかしいものである。金堂の中の尊き寶世界にならびないといふあの壁畫も玉虫の厨子も時間の都合で見せて戴く事が出来なかつたのは、ほんとに残念な事である。歴史と相呼應して蒼古の調を帯びた松林の中に聳ゆる塔は雲形肘木によつて全体の感が柔かく大變氣持のよい建築である。  
又聖德太子が大變お好みになつて御臨終までいらせられたといふ夢聲も拜した。創建時代の文明藝術が是程までに榮えてゐたかと思ふ時驚かざるを得な

つた。千古の歴史を夢と吹く、松風に送られて、邪念や慾望をすつかり洗ひさられた清らかな心持で推古美術の淵藪である法隆寺をふりかへりつゝ元來た道に歩を運んだ。こゝからは直ぐ電車で大阪が向ふであつた。電車の中で誰も彼も、こくり／＼と始まる。席のない人は立つたまゝでも電車にふられてもぐつすりと寝てしまつて、最後の目的の大阪に着いた時はもう眞暗で空には星が輝いて居た。不夜城の大阪市は京都の様なのんびりした所が一寸もなく、非常に繁華で全く命が縮りさうである。眞直ぐ虎屋旅館に向つた。一同は元氣回復して夕飯も待ち遠く道頓堀、樂天地、大丸等と云々に三々五々連れ立つて分れる、眩しいばかりに照らし輝く電燈の光、人の雑沓……さすが大阪は大都市なるをうなづかせ

(四南 佐伯 笹口)

十一月七日 (日曜日)  
道頓堀の雑音に大阪の夢は未明に覺された。身じまひを整へるとすが／＼しい心持になつた。昨夜眠れなかつた方は多いらしい。それもその筈。賑かな

大阪市でも殊に繁華な通りに宿を取つたのだもの。七時過に宿を出て先づ天王寺へ。直ぐ近くの停留場へ出る迄にも幾度自動車の警笛に脅かされた事だらう。天王寺公園の菊は見事に咲いてゐた。泉水の畔で私達の先頭に立つて御案内下さつた白井先生の御紹介があつた。こんな慥な御案内役がいらして下されば大阪見物は心強い。先生について天王寺のお寺の方へ行つた。大阪での古い寺院ださうだ建築の妙味は説明では私達には一向通じない。  
そろ／＼足がくたびれる。次は大阪城。お堀の水の少ないのも哀れだつた。彼の時理めさへしなかつたら堂々たるものとして残つた、らうにと残念がつた。例の大きな石で築いた門を通る。本當に何と大きな石だらう。この石の大きさが太閤の大きな心を語つてゐる。よくもこんな大きな物が持つて來られたものだ。奥へ進んで雑草の繁つた道を通つて天王閣跡に上る。疲れた足を持上げるには相當骨の折れる様なきつい石壇だ。日曜なので遊びに來てる人もぼつ／＼あつた。皆珍らしさうに一年一度の珍客を眺めてゐる。餘り嬉しくもない。石垣に凭り掛つて賑

と東西南北に大阪市は一目に見渡される。數知れない煙突の吐く煙は空を掩つて暗い。向ふには縹渺たる生駒の連山が霧の中に微かに浮んでゐる。こゝで御晝食をいたゞいた。まだ十一時過ぎなのに。草臥れてはゐるが今は私達長蛇を作つて最も嬉しい三越へ進んで行く足も軽い氣がする。二時間の自由行動に私達は大喜びで階上階下をあちらこちらをお土産物をあさつて止まない。

時間が来て外に出て見ると二三人ゐらつしやるきり再び入る勇氣もなくビルディングの角で日向ぼっこをしてると人が入ることく随分来る。自動車で乗付ける人も多い。この道を通る大半の人は此のビルディングの角の入口に吸込まれる。大した人だ。見てゐても飽きない。又並んで次の所に向ふ。何處にやて流石見とれる人もない。田舎者には倦々してゐるのかそれとも忙しくて見る隙のない人達か。階藤さんにお目にかゝつて梅田の邊り迄一しよにいらして下すつた。途中中の島の公會堂で折柄開催中のオーケストラ大阪女學生音樂會の聴衆となること約二〇分余。ぞろ／＼と一度に這入り込んで眠む相に音樂を聴い

てゐる色の黒い田舎者を見榮坊な大阪の女學生はクツタイヤナと嘸嘸き合つたことだらう。大阪の女學生は音樂が巧い。少々羨ましかつた。

それからやつと阪神電車の御客様となつた。草臥れてゐるのに立つてなきやならなかつた。神戸迄の時間をどんなに長く感じた事だらう。寒くつて睡たい。大抵の方は居眠りしてらつしやる。神戸についでやつと安心した時四邊はもう暗かつた。お腹は空しく寒さは肌にしみてほんとに心細かつた。おまけに宿から迎へに来てゐないのでたゞぼんやりと立つて居た。仕方がないので待たないで行く事になつて電車に乗つた。停車場の近くの宿屋に着いた時は全く一時に氣が弛んだ。御飯を食べて睡つた。湊川神社は隨意参拜。外出樂して十一時迄を過した。藤林さんが夜を須磨からわざ／＼尋ねて下つたのは嬉しかつた。長い旅行と氣の弛みで身体はへこ／＼。十一時に宿を出て汽車に乗つた。もうこのまゝ眠つてゐれば明日の朝は故郷に着くのだと思ふとうれしい。長かつた様な又短かつた様な一週間の思出は數多い。楽しい思出や心細い追憶を残して修學旅行

は終つたのだ。何だか心残りだ。

けれど終日の見物に疲れた身を休めるべき旅館の深切な待遇は身にしみて嬉しい。私達は今度の旅行から色々な教訓を得た。そして又次から次へと思ひ出すと東大寺も法隆寺も一緒になつてしまひさうだ。今夜は疲れてるからぐつすり眠る筈なのに中々ねつかれない。二時間許しか眠らないのに四邊が騒しい。うつら／＼してゐる間に東が白んで來た。あゝ。この空がすつかり明け放れる頃はもう懐しい廣島の地を踏んでるのだと思ふとうれしいの一方では成るべく時間が経たないやうにと願はないではゐられない。待ちに待つた楽しい旅行も遂に無事終りをつげたのだ。

(四西 小野 中山)

異國情緒漂ふ神戸の夜のおさらばを告げ十一時發の列車に乗つた我々一行。なつかしい廣島の地へ歸へるのかと思ふと本當に嬉しい。眠られない。そして一週間の楽しい追にふける。

「奈良の商賣人が物を買うてやらないものだから私等を見て松茸だとかホウロクを被つて言ふのよ」

「私等は又臺灣人だと思はれたのよ貴女等は臺灣から遙々來なかつたかなんて言ふのえらさうにね」

華やかな乙女らしい大笑がどつと車中に湧く。時は過ぎ汽車は夜霧をついて故郷へと走る。黎明の光に不圖醒めて見れば廣島縣に這入つてゐる。畑に霜が下りてると言ふので大騒動、冬も私達を待ち切れないでその姿を自然に表はしたのだらう。車中では今更らしくお土産の荷物をしばり直してゐる人やまだ眠の國を彷徨してゐる仲氣坊主も居る。海田に着いた。辨當屋の聲がどんなに我々の耳に嬉しく響いた事であらう!

向洋……廣島の街の空が見える……煙突も……お、山よ河よ!!御身が子供は今七夜の秋の旅終へて歸へつて來た。強く抱きしめて欲しい廣島の地よ感激に高潮した我々は窓から顔を出して見れば見慣れたブラットホームに父が居る、母が居る……姉が弟が……澤山の彼等への土産物兩手に抱いた皆は小鹿の様な元氣さで近親の傍に馳寄つた。そして驛前の廣場で人員點呼をなして中島先生より今年の最後の運動競技會に於いて素晴らしい好成績を得た

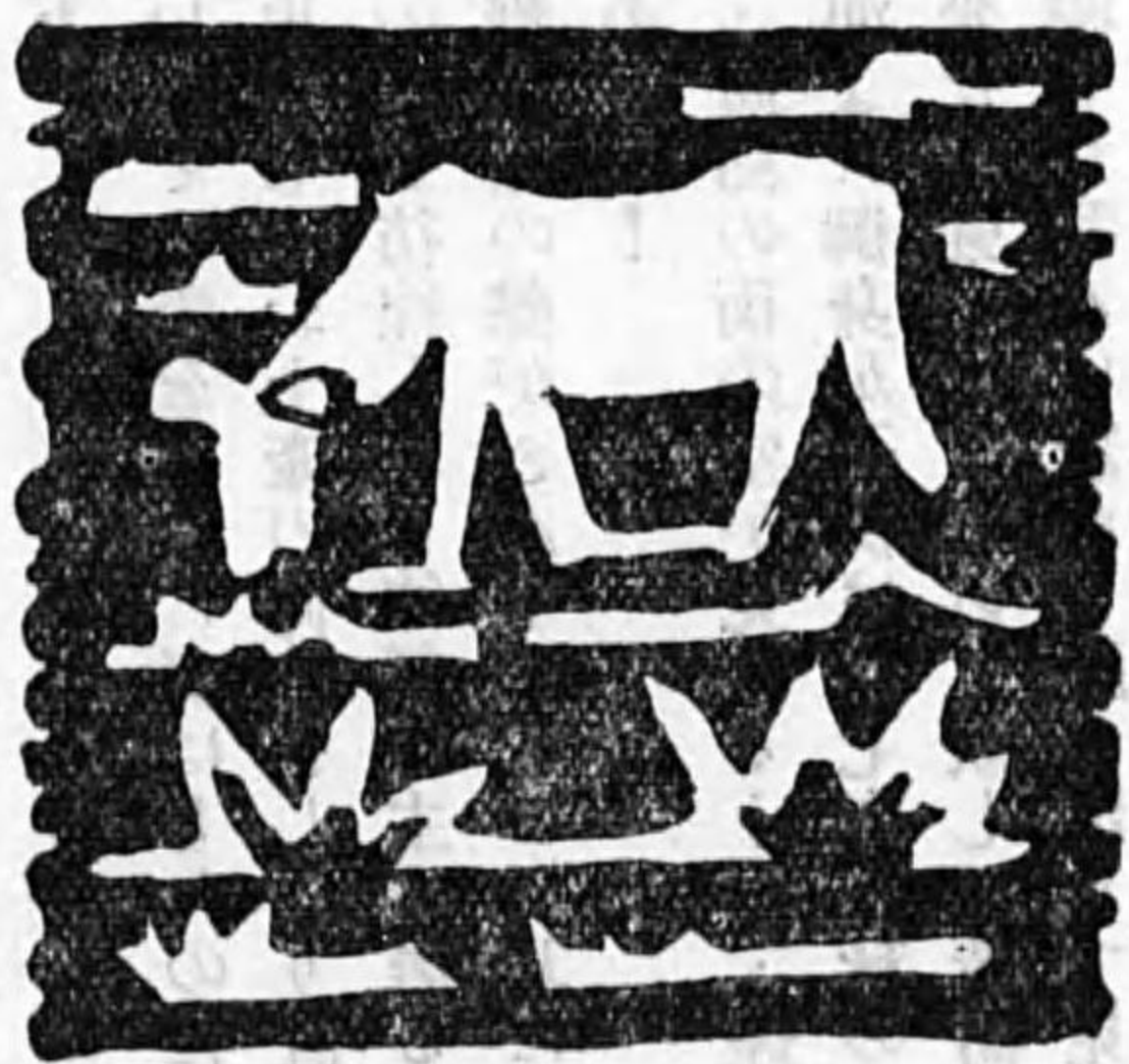


と云ふ報告を聞き何か知ら萬歳でも三唱したい気分  
になりながらなつかしい我家へと歸宅の路に着い  
た。

あゝ嬉しき秋の旅なりしよ!

かの日……の日の思出の樂しき事よ!

(四中 兒玉井上)



（Faint, mostly illegible text in the upper left section of the page, likely bleed-through from the reverse side or very light print.)

（Faint, mostly illegible text in the lower left section of the page, likely bleed-through from the reverse side or very light print.)

昭和二年二月廿四日印刷  
昭和二年二月廿七日發行

編輯者兼

廣島縣立廣島高等女學校

校友會

編輯者兼

廣島縣立廣島高等女學校

學友會

右代表者

廣島縣立廣島高等女學校

椎野 佐 玄

右代表者

廣島縣立廣島高等女學校

横澤 憲 治

印刷者

廣島市猿樂町二十五番地ノ一

久保原 章

電話二四一五番

299  
63

終